

わいふ

女の言いたい放題誌 ● 200

WIFE

特集 ● 私とわいふ 吉岡紗千子 細野清美 飯田みち子

投稿 ● 三宅島の米軍基地 近藤美子

投稿 ● “家”にいては出来ない仕事 栗本幸代

エッセイスト・クラブ ● 陳さんの君が代 海老根紀子

マジの発言 ● 子供会は必要だろうか？ 小川由里



主婦の誕生

●アン・オークレー著 ●岡島茅花訳／1,800円

〈専業主婦〉とは、労働と家庭生活を分離させた産業革命によって誕生し、その後の産業社会と並行して定着してきた。本書は、産業革命前後の社会状況を歴史的に検証し、〈近代主婦業の誕生〉の過程を探り、主婦労働の内実、社会的位置付け等を分析する。〈兼業主婦〉が急増しつつある今日、その将来像を問う！



日本男性論

樋口恵子 ●エコノミック・アニマル論
●データに見る日本男性像

渥美雅子 ●離婚と現代男性像
加藤富子 ●日本男性の意識構造
木村 栄 ●新しい男たちの動き

男たちはどう変わればいいのか、なぜ変わらないのか——
女性をめぐる社会状況の変化は著しいが、
男性の現状はどうであろうか。
気鋭の女性陣が男性諸氏に贈る、
熱くて厳しいメッセージ。1,400円

羽仁進の新・家族論

●羽仁 進著／980円

いま、「家族」が変貌しつつある……。
旧い「家族」像は崩壊し、それぞれのモラルや
価値観で創り上げる『新・家族』像を意欲的に探る！



シングルス・リポート

●J. シムナウアー & D. キャロル著 ●石川弘義訳／1,700円

結婚よりも一人で生きることを選り出した
米国のシングلزが、本音で語る『独身白書』。

現代の雇用平等

●花見 忠著／1,700円

なぜ“真の雇用平等”は確立できないのか——
雇用平等の世界的潮流と米・英国などの法を紹介し、
グローバルな視点から今後の課題を提示する。
雇用平等の基本法理を知る上で、女性必読の書！

三省堂

☎03(230)9411(編集)・9412(販売)

〒101 東京都千代田区三崎町2-22-14

いいたい放題　したい放題

書きたい放題　よみたい放題の

投稿誌が　わいふです

人間　ほんとにやりたいことは　やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いつきりやれば　気がはれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回　わいふが出来あがるのです

仕上げに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを！

ピリツとくるか　まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第！

WIFE 200

わいふ目次

表紙イラスト 松本圭以子

クラブア

非行中年の集まりへわいふ編集部

4

写真 佐々木恵子 文 田中喜美子

特集・私とわいふ

書くことは生きること

10

吉岡紗千子

読んで、書いて、貸して

16

細野清美

出会いが運命を拓ける

22

飯田みち子

わいふと私の十年

28

——一つの出会いがすべてを変えた——

田中喜美子

エッセイスト・クラブ

36 ★

藤野宏子・千木保子・海老根紀子

マスコミむしる 45 ★

堀内千恵子・勝浦恵美子・山本綾子
山田幸子

ニューヨーク便り⑥ 50

西田淑子

マジの発言 52 ★

小川由里

観たり聴いたり 54 ★

松本弘子

三宅島の米軍基地 56

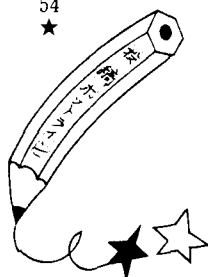
近藤美子

職場は多面体 63 ★

岡村和代

マン・ウォッチング 64 ★

前田信子



教師とケンカする法

66

門野晴子

ファミリィ・イン・ブルー

70★

KN・KT・窪田潤子・向井かおり

対話のページ

77★

中野昌子・古池けい子・三井早穂子

家においては出来ない仕事

82

トレース

栗本幸代

うちの悪ガキ

89★

法村香音子

連載 6

私の昭和史

92

桜井淳子

マンガ笑止・笑止

栗田 笑 99

連載 5

ただ一枚のチラシから
山口洋子 102

フライベート・ルーム

108

相談 田口和子 アドバイス 河野貴代美

連載 3

山の彼方の空遠く

113

声楽に憑かれた私のヨーロッパ留学記

高木 梢

生きてます活字人間

124★

半田たつ子・柴田知子・大沢陽子・
野路あゆむ・駒尺喜美

親のホンネ

130★

織田裕子

わいわいがやがや

132★

谷山由美子・中村季代美・岡部シゲ・久家弘子・
岩田真砂子・河野民枝・潮田恵子・岡博之

情報コーナー

100 ほん 106

サークルだより

140 特集テーマ原稿募集 141

投稿規定 142

編集だより 144

★印は
投稿ホットライン
の、ページです！

ブラ下ってるのは書類、洗濯ものではない!



非行中年の集まり

わいふ編集部

写真・佐々木恵子
文・田中喜美子

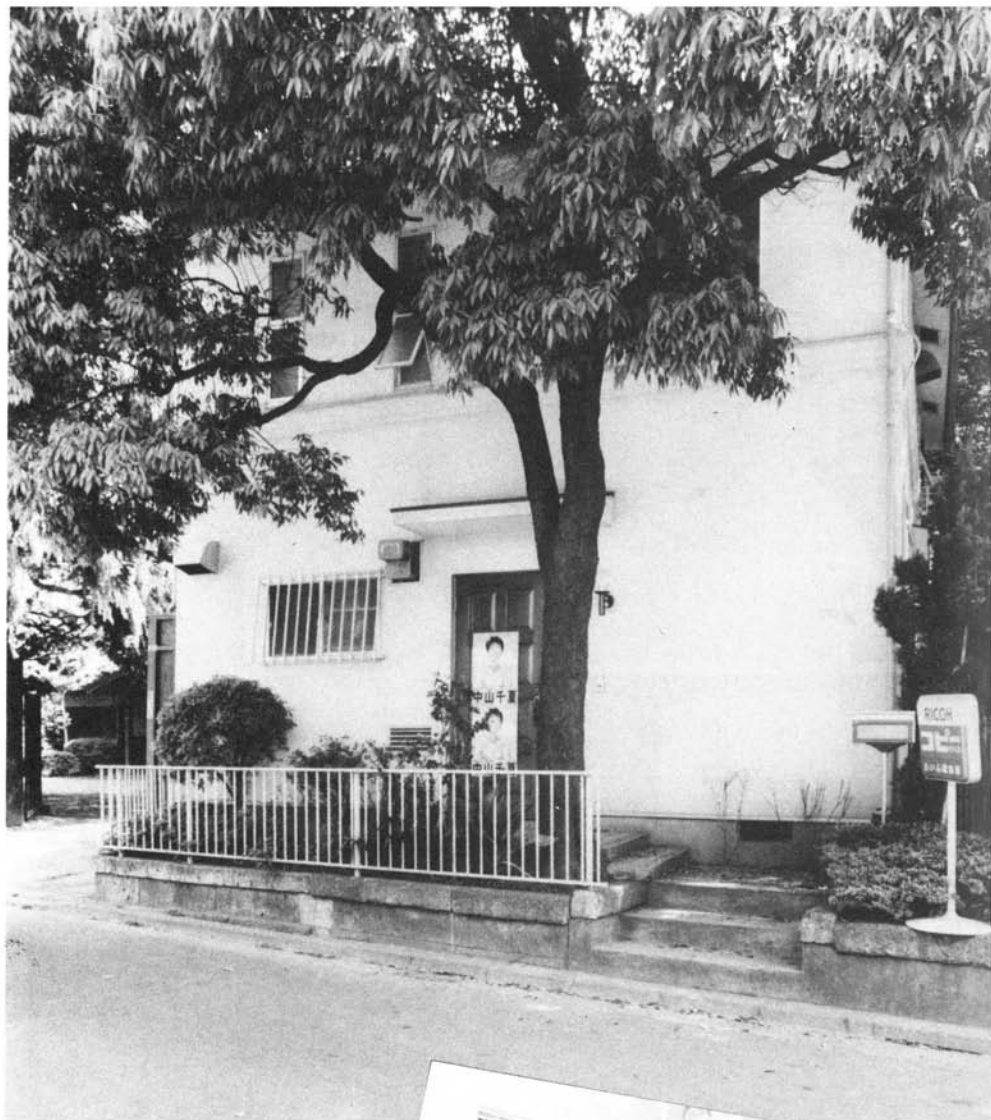


一年に六べん、一四四ページの小雑誌を世の中に送り出すこの集団は、昭和一ケタから団塊の世代まで、さまさまの年齢、さまさまの思いの女たちのゴッタ煮だ。目ざすはただ一つ、ホンネだらけの、面白い・雑誌をつくらうということ。株式会社、とご大層な看板にかけてはいるが、要するに、わいわいがやがや、女の集まり。

最近、は、ぞくぞくと単行本も生まれています。

コピースタンドが表札がわり、マズいいんです

「ビルですか」ときかれてときどきひるむ。ただの家の一室借りてます。



わが社にもワープロぐらい、あるノダ！



本棚だって、あるノダ！

和田 好子

わいふの知恵袋。小柄な体にアイデアいっぱい。しゃべり出したらとまらない。



原田 静枝

修業がみのって読売の再就職コラムを担当するまでに。努力と笑顔のたのしみを見よう。



加藤 歌子

わいふきっての優秀なヒト。編集を一手に切りまわし、広告取り能力も抜群なんだなあ。(引っこぬかないで下さい！)



鈴木田美子

50代猛女には生まれ小さくなってるカワイイな30代。ただし男には滅法つよい。(もちろん、気が、ですぞ)



わいふから生まれた本

- 母親たちの自分史
- 手探り 女の自立
- 離婚のしかた教えます
- 王国の妻たち
- 近代女性史

田中喜美子
一見やさしそー、でも笑顔の下には鬼編集長の素顔が。こと文章にはウルサイノ



辻浦知津代
会員入退会を把握している大黒柱。面倒みのよさでみんなを包みこむわいふのオカーサン。



早川 裕子
奥さまふうしとやかさの裏に言い出したらあ
とへ引かないモーレッツ魂が。いま教育問題の
ルポ執筆中。

- ハイスクールレポート
- 性・妻たちのメッセージ
- 子別れのすすめ
- 結婚式の本
- 妻たちはガラスの靴を脱ぐ



高尾千恵子
他のヒトがつけたら三日かかる帳簿を一日で。
わいふ唯一のプロの有資格者です。

国民的課題としての老後を考えよう

第10回老人福祉問題全国研究集会

- 〈と き〉 1986年 7月26日(土) ~ 28日(月)
- 〈と ころ〉 島根県松江市・松江東急イン 電話 0852-27-0109
- 〈講 演〉 「今後の老人福祉のあり方を国民の立場から考える」
講師 小笠原祐次 (日本福祉大学)
- 〈基礎講座〉 1. 高齢社会をどうとらえるか 2. 婦人問題としての老後
- 〈分科会〉 1. 老人保健法と医療 6. 排泄援助のあり方
2. 地域福祉・保健・医療のネットワーク 7. 老人ホームのケアと勤務条件
3. 自らの老後を考える 8. 老人の食生活
4. 呆け老人への援助 9. 老人保健施設を考える
5. 老人の生活とリハビリテーション
- 〈参加費〉 5,000円(会員4,000円) 〈宿泊費〉 18,000円(2泊4食付)
- 〈申 込〉 〒699-08 島根県出雲市神西沖町2479-6 ひまわり園気付
第10回老人福祉問題全国研究集会実行委員会
- 〈主 催〉 全国老人福祉問題研究会

●季刊 生活倶楽部

11号

特集

暮らしをひろくまぢむ

いま、あなたのまちでは――

インフルエンザ予防接種を受けるかどうか親が決めることができますか？ 図書館活動に市民の声が反映させられますか？ 教育委員会は気軽に傍聴できますか？

私のまちからのレポート 献立に親の希望がとり入れられる学校給食 講座づくりに市民が参加する公民館 東京・神奈川・千葉・埼玉・長野、各地のまちづくりは

●暮らしの探険報告書 究極のトマトを求めて

●バックナンバー

9号

生き活きネットワーク101

生き方、暮らし方を変えたいあなたへの101人からのメッセージ――働く、学ぶ、遊ぶ、行動するいきいき女性101人は一歩をふみだした。

●好評発売中

特大号 240ページ 九六〇円

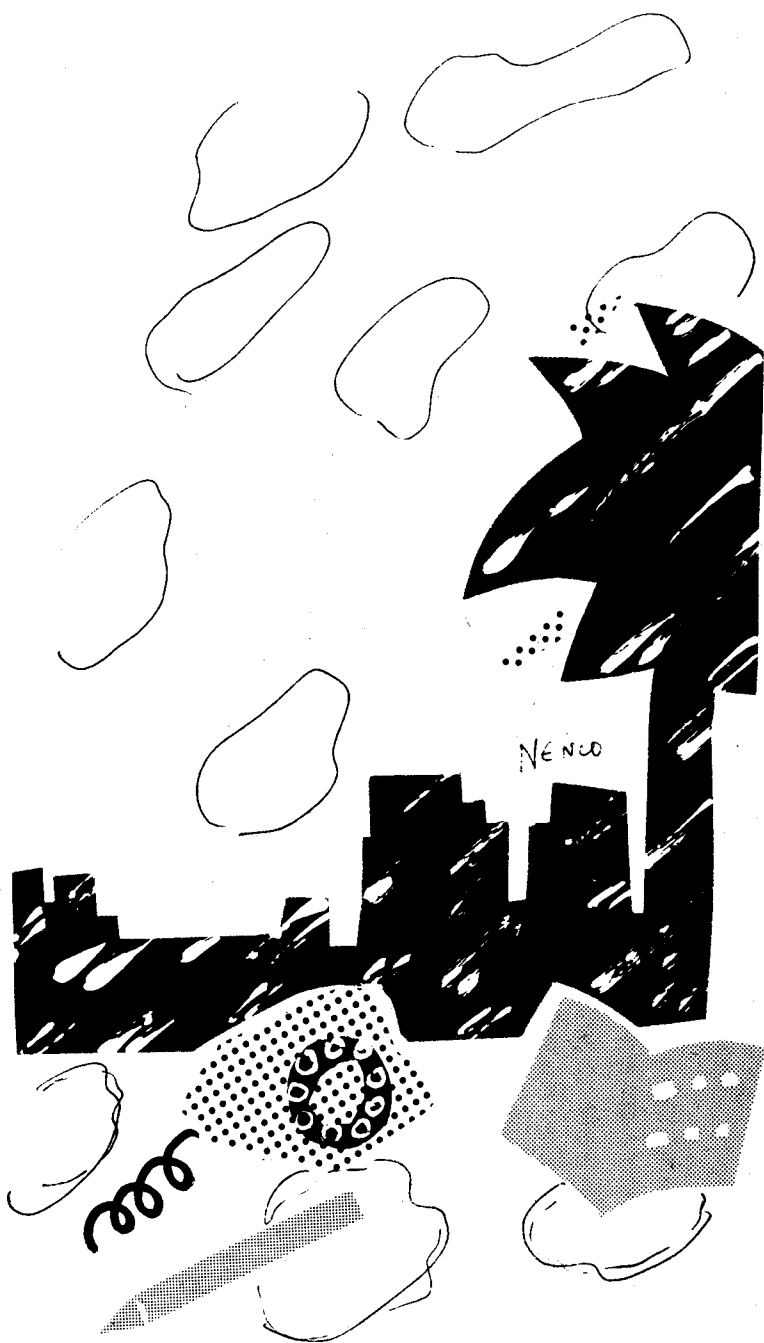
生活年鑑1986

この一年あなたの暮らしはどう変わりましたか。86年はどうなる？ 暮らしに何が起こり、私たちの課題は？

●読者と共に考える総特集号 128ページ 四八〇円

※注文は、最寄りの書店(地方小出版流通センター扱い)または直接ご連絡を

特集
私とわいふ



書くことは生きること

吉岡紗千子

東京都北区



離婚からの出発

不思議なことに、私と「わいふ」との
出合いは、私自身がわいふでなくなろう
と必死に闘っていたころのことだった。

離婚調停のまっただ中で、専業わいふ
である友人一同に総スカンを喰らってい
た。

「まったく、あんたって人は、わがまま
なんだから」と言われれば、その通りだ
と頷き、「これから先どうやっていくの？
母子三人食ってゆけるの？」とたまたみか
けられれば、にわかに不安が募り……だ
からといって、亭主ドノに頭を下げよう
という殊勝な気持ちには、どうしてもな
れず……まったく困った奴だと我と我が
身を嘆いている日々が続いた。

十四年間というものの専業主婦に徹して
きた身である。世の中とはどういうもの
か、働くとは、稼ぐとは、どうすること
か、何ひとつ確信の持てる返事ができな

い。

もっと困ったことがある。夫と別れる、そういうときには、しっかりと女らしく涙にむせんでいるほうが美しいんだという固定観念が世の中に定着している。私自身も、そうしなければいけないんだと思いつこんでいた。まるで、お葬式のそら涙のごとき演技で、自分を閉じこめようと……でも、できなかった。

先ゆきに不安はある、子供もろとも貧乏と失敗の底へおちこんでゆくかもしれない。そうだとしても、今までのように敷かれたレールの上を無感動にゆられているだけの人生じゃない。自分の力で、自分の意志で切り拓いてゆけるのだ。もしかししたら、素晴らしい未来へたどりつけるかもしれない。

日ごとに内側に活力が溜まってゆく、強くなってゆく。この感覚は決してこち良いものではなかった。女らしさ、妻らしさが、こそげ取られてゆくような、柔らかな肌がゴワゴワと厚くなってゆく

ような、奇妙に居心地の悪い思いがした。

折しも「キャリア・ウーマン」とか「翔んでる女」とかが流行語となっていた。ああいう人たちと肩を並べていくのか、と深い溜息をついたものだ。

わいふ歴十四年の中で培ってきた女の守備範囲には、外へ出て華やかに働く女性軍を理解できるような素材もチャンスもなかった。あの人たちには才能がある、だから、私とはちがうんだ、と思いつづけてきた。エイリアンを見るようにして彼女たちを見つけた。

ところが、今や私も、そうしたエイリアンの一人になりつつあるのだ。しかも、働く女に不可欠である「才能」もなしに仲間に入ってゆかなければならないときている。

嫌だ、いやだと思いつつも、引っこしを決め、仕事を決めていた。できるか、できないかを危ぶんでいられる身分ではなかった。とにかく調停が下ったその日から働かなくては母子で飢えてしまう。

自分を肯定してくれる人

私の内で、女らしさの基準と、明日への希望と不安とが、せめぎ合っている、そんな時期に、わいふ、編集長の田中喜美子さんと出会ったのである。

場所は、東京都婦人会議の開かれていた一室だった。私はPTA広報部から誕生したグループ「YU」の代表者として出席していた。代表と言っても、人員わずか十六人の会である。いかめしい名前前のついた総員何十万人を抱える会と会の間で、肩身狭くうつむいていた。

田中さんは「わいふ」の取材で来ていたのだが、あまりの弱少グループ、あまりにヘドモドの代表者あいさつに興味が持たれたらしい。会議が終わってから、私に声をかけて下さった。ものごしのやさしさ、声のおだやかな温かさ、今まで私の頭の中にあつたキャリア・ウーマン像とは全くちがう女性性が、そこにいた。

つりこまれるようにして、自分のことをしゃべり出してしまふ。離婚のこと、まっさらになる未来のこと……初対面の人に、こんな立ちいったことを話すなんて、と恥ずかしく思いつつ、口はとどまることを知らない。

「大丈夫、あなたにはできるわ。必ず素晴らしい日があるわ……」友人たちの誰ひとりも言わなかった言葉を田中さんは言ってくれた。このひとことが欲しかったのだ。私は、夫との別居以来初めて、自分を肯定してくれる人に出会ったのである。

出会いにはタイミングが重要なポイントになる。もし、あのとき私が、どっぴり主婦業につかって幸福なんだと思ひこんでいたら、こうした出会いはありえなかったろう。きりきりと働く決意に燃えて、自分の道をまっしぐらに歩いていたら、あのひとことが心をゆさぶることはなかったかもしれない。

不安と希望の入りまじった中を、手さ

ぐりで歩いてゆく道のりであった。一日のうちでさえ、気分は天に舞い上がったかと思うと地下深くもぐりこんでしまふ。私のやっていることを正しいんだとは誰も言ってくれず、自分すら疑ってかかっていた。

全面肯定……一人でもいい、ひとことでもいい、それさえあれば吹っかれてしまうのだ。私はまるで命綱にすぎるようにして、そのひとことを聞いた。

松本へ引越してから、田中さんの言葉は届いた。雑誌の仕事をしていると伝えると、自分でも書いてみるように、とすすめられた。書くって何を？ 私には創作をするだけの視点すらないのに。

雑誌社の仕事も書くには書くわけだが、いつも、あてがいぶちのテーマがあつて、それをこなしてゆくだけだ。無難で、字数と締め切りが合っていさえすれば良い……独創性など入りこむ余地がなかった。PTA広報部にいたころを思い出してみても、自分の視点でテーマを見つけ出

して筆をふるったことはない。皆で決めで、皆で書いて、が通り相場だった。

書くべきテーマがない、と手紙に書く、と、あるはずだ、と田中さんの返事がきた。離婚、引っこし、新天地での就職……どれをとっても大テーマになるはずだと。

それでも書けなかった。離婚のことは書きたくないし、引っこしのことは、あまりの忙しさにかまけて覚えていないし、就職のことにしたって、さして目ざましい活躍もしていないし……結局、私にはものを書く才能なんてないのだ。

人に伝えたいものができた

それよりも、息子とその友人であるツッパリとのつき合いのほうが楽しかった。彼らは一様にリーゼントにダボズボンで凄んでいる。中三、十五歳という幼さをかくそうと必死になっている。

まるで私と同じじゃないの、と思った。

母子家庭の弱味、知る人といえない土地にいる弱味を見せまいと、精いっぱい肩を怒らせている私に……。

彼らと一緒にロック音楽を聴き、管理教育をこきおろし、冗談を言い合う。ときに教えられ、ときに叱りつけ、私とツッパリとの連帯は強くなっていった。

彼らが高校生になった年の秋に、ツッパリの一人が死んだ。バイク事故で即死、思いもかけない悲しみが私たちを襲った。

もう手の届かなくなった友のために、ツッパリ一同は追悼コンサートを企画した。その資金を稼ぐために働き始めた。平均睡眠時間四時間弱、あとの二十時間は学校と練習とバイトで埋めつくされた。誰もが辛かった。見るみる彼らはヤセ細っていった。しかし、やめようとは言わなかった。

追悼コンサートは大成功のうちに終わった。すべてを自分たちの手でやりとげた少年たちの顔には、今までに味わったことのない清々しい感動があふれていた。

もちろん見守る私の心にも……。

感動のあまり、また田中さんに手紙を書いた。すぐに返事が来た。「こんな素晴らしいことがあったのに、自分だけのものにしておくつもり？」そう、ようやく私にも、ものを書く視点がわかりかけていた。

「ロックよ、静かに流れよ」の連載は、初め二回ぐらいと指定された。しかし、いったん書き始めた筆は、あれもこれもと欲張ってとても二回では足りない。四回に増やしてもらってようやく収まった。

原稿を送るごとに、田中さんの的確な指示が返ってくる。「人物像をもっと明確に書きわけなさい。あなたには、その力があるのだから……」

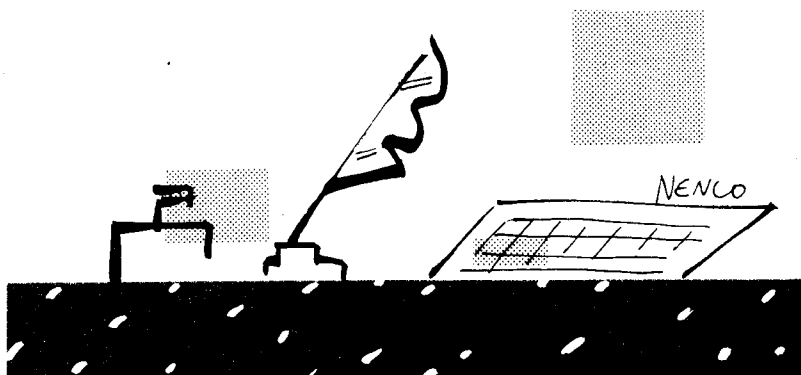
力があるかないか、上手く表現できているか否か、自分では何もわからなかった。とにかく、この少年たちの素晴らしいさを、もっと多くの人に知ってもらいたい。ツッパリを切り捨ててしまう社会、身なりで人間性まで疑ってかかる大人に、

何とかしてこの子たちの心情をわかってもらいたい。私は、熱病にかかった人のように日夜原稿用紙と格闘した。指摘された部分を直すと、たしかに見えがえるようにくっきりとテーマが浮き上がってくる。言いたいことが鮮明になってくる。ものを書いたのしみが少しずつ、わかり始めていた。

連載二回目にさしかかるころから、わいふに読者からの感想が載せられるようになった。直接、読者の方から手紙をいただいたりする。

自分の書いた文章が、他の人に感動を与えているのだ、という実感はなかった。偉いのは私ではない、主人公の少年たちなのだ。私は、それを物語ったにすぎない。

だから、こうした讃辞はすべて、少年たちに捧げられたものなのだ。ものを書くというのとは、こういうことなのだ、私は初めて、書くということの意味がわかりかけてきた。



書くことは愛すること

文章力がある、文才がある、ものを書く才能に恵まれている……大切なのは、そんなことじゃないのだ。

書きたいもの、どうしても書かなくては行かないものを持っているかどうか……そういう生き方をしているか否か、ということがポイントなのだ。

もっと煮つめると、それほど深く愛しているものがあるかないか、だと私は思う。声が良から歌を歌う、それと同じように文章を書くのが上手いからものを書く……それでは一人よがりだ。

上手く書こう、ここで読む人を感動させようと思うよりも先に、書く対象に魅かれて、とにかく書かずには行かない……愛するものを見つけたす優れた眼力こそがものを書く上でのキイポイントなのだ。

田中さんに書くことをいくらすすめる

れても、テーマがないと渋ってきた。大テーマの狭間にいなながらも、それを見つけてできなかった。誰も、何も愛していなかったのだ。のめりこんで、まばたきもしたくないほど見つめる対象を持っていなかったから……そういう生き方しかしていなかったのである。

「ロックよ……」を書きながら、私は自分でも思っていなかったほど強くなっていった。かつては、ゴワゴワと心地悪かった強さが、むしろ気持ち良いものに変わっていくのが感じられた。

「あなた強くなったわねえ、まるで別人よ」「離婚が境目なのねえ、きつと」友人たちは、私をエイリアンを見えるような目で眺めている。

たしかに強くなったと自分でも思う。可愛げや女らしさは急速にうすれてしまった。これでいい、こうなりたかったんだ、と私は開き直っている。

柔らかな少年の心を、管理という名の下にズタズタに切り裂いてゆく大人たち

がいる。黙って見ていたら共犯になってしまうのだ。私は味方よ、とサインを送らなくてはならない。身なりや言葉づかいなんか悪くても、君が生きてること、君がその生命を輝やかせていることは素晴らしいんだと、全面肯定してやりたい。私は、そのために「ロックよ……」を書き、これからも、このテーマを追いづけてゆこうと思っている。

とにかく書いてみよう

愛するものがない、愛する者を傷つける相手があるとしたら、力なんかあろうとなかろうと、闘うしかないのだ。武器としてのペン、そして愛を告白するためのペン、二つの素晴らしい神通力を教えてくれたのは「わいふ」であり、「わいふ」を支えてきた沢山のわいふたちだ。その人たちは誰もが「書きたい女たち」である。いつか自分の文章が活字になる日を夢見ている。

永年の読者で、書きたいと念じ続けているが、いまだに一度も投稿していないという友人を知っている。彼女もまた、かつての私のように「テーマ」を探して踏みまどっているのだ。

「私は平凡な主婦だから、あなたのように波乱万丈じゃないから……」と彼女は言う。

そんなことないじゃないの、愛する子供がいて、すくすくと健康に育っている、草花を育てるのが好きで、ベランダいっぱい季節の花々をあふれさせている。さまざまな講演会や研修会で勉強もしている。理解あるご亭主が子守りも食事も交代してくれる……。愛するものがこんなにいっぱいあるんだもの、書けないなんて、もったいないことを言わないでほしい。

私流に訳せば「書きたい女たち」は、愛するものを持っていくせに、告白できないうちに内気な少女なのだ。

ご参考までに申し上げるが、ものを書

くの道具はいらない。書斎なし、専用机なし、万年筆なしで結構なのだ。

ちなみに私は、放浪のものの書き屋と呼ばれている。あるときは食卓で、あるときはコタツで、またあるときはトイレで……。

みっちり、たっぷり時間をかけて……というのも私の場合はふさわしくない。息子の朝食と娘の弁当づくりと猫の餌と……その合間をかくぐって書いている。忙しいから書けない、と言ってしまったら、書けるものではないのだ。

小刻みの時間をつみ重ねても、とにかく書いてみる。書くことによって、あらわになってくる自分を見つめる。ありきたりの紋切り言葉に逃げないで、自分と格闘する。その面白さを、より多くのわいふたちにも、味わってほしいと願ってやまない。

読んで、書いて、貸して

細野 清美

神奈川県横須賀市



「読むだけ会員」 からの出発

今から七年前、読売新聞に「わいふ」の記事が載ったのを読んだときは、とても新鮮な思いがした。「これだ！」と思いきや会員になった。上の娘が四歳、下の息子が一歳になったばかりという時期であった。

この頃の私は、育児三昧の日々ではあったが、それでも書くことは好きで、地域の婦人会新聞を一人で発行したりしていた。B4判一枚きり。手書きしたのをコピーして会員（六十名位）に渡していた。

これはずい分と喜ばれ、そのうちに会員の中からも投稿してくれる人が出はじめたりした。誰に言われてやったものでもなく、いつ辞めようと私の勝手だった。でも、やり始めたからには三年は続けるよう頑張れよ、と夫に励まされ、それもそうだと続けることを決め、いろいろ考

えて盛り沢山の記事をB4判に詰め込んだ。

今でもこれは良かったなと思えるのは、「ふるさと」の思い出「シリーズ」である。会員の人たちのほとんどは、他の市、県から来ているので、自分のふるさとを一人ずつ書いてもらって、毎号載せた。これを読んだ会員同士が、何かの折りに会ったとき、投稿を肴に話も弾むわけである。

ともかく、三年間はやった。しかし、四年目になって身辺が忙しくなり、少しずつ回数が減り、自然とやめてしまった。

その間、私にとっての「わいふ」は、二カ月に一度送られてくる「読み物」だった。二回目の払い込みのときは、「どうしようかな、やめようかなあ」と迷っていたほどだった。

ちょうどその時、横浜で「公開編集会議」があることを知らされ、編集部の人たち見たさに出かけていった。編集部から三人の方がいらしていたが、そのとき「わいふ」の成り立ちから、編集の苦労

女性の生きることなどの話を伺った。

もともと「わいふ」は、PTAで知り合ったお母さんたちから始まったという。最初はノートを回し、そのうち、新聞形式になっていったと聞いて感無量だった。すごいなあ、こんな本になって。しかも全国にまたがっているのだから、と私の小さな新聞のことも思い出した。その時集まった見ず知らずの仲間たちにも刺激され、二回目も払い込むことを決

投稿し始めて開けた道

それからまもなくして、私も思いきって投稿してみた。内容は私の住む横須賀についての思いを書いたのだが、それが載ったと同じ横須賀の会員の方から連絡があり、とても嬉しく思った。活字になっただけでも嬉しいのに、すぐ反応があったのだから。

そして、その方の紹介で、横浜サークルにも時々顔を出すようになった。が、行くにも時間がかかるし、私も地域でい

めた重要な日となった。

また会議が終わったあと、編集部の方と立ち話をし、私が、読むばかりで書けないことを話したら、「それでもいいのよ。読むことで参加しているのだから。あせらないで。そのうち書きたいことがでてくれば、気軽に書いてごらんない」と言われ、大いに力づけられて帰ってきたのだった。

ろいろとやっていたので、だんだんと足が遠のいてしまった。しかし、思わぬ収穫があった。

メンバーの中のある方と帰りの電車の中で話したのだが、その方は近所の子どもの勉強を見てやっているというのだ。それを聞いて、思った。（あら、私にも出来ないかしら。そうだ、そういうこともあったのだ）。そう考えたら、急に未来が開けたようで、私はすぐ実行に移

した。

知り合いの中学生をもつ近所の方三人ばかりに声をかけてみた。一對一のマン・ツーマンで、英語を教えます、というふれ込みである。反応はすぐにあった。



一人の方は、中学校でPTAの役を一緒にやっている方に話してくれたのだ。すると、タイミングよくその人がちょうど、塾を探していたところだからと、嬉しいことにもう一人誘って来てくれることになったのだ。

また、もう一人は、自分の息子をよこしてくれた。こんなに順調にいくとは思ってもみなかったが、これも、あの友人のおかげ、また、叩けよ、さらば開かれん”の精神のおかげで、運が開けたのだと思っている。

あれからもう四年目。最初の生徒たちは無事卒業し、今は二回目の中学生である。何も宣伝してはいないが、口コミか何か、ちょうどほどよく、途切れないでいるのが幸いである。忙しい中、これだけは私の収入であるから、職業意識をもって、つとめている。何がきっかけになるか、何が刺激になるかわからないものだ。これも遠くは「わいふ」のおかげか。しかし、私にとって、「わいふ」とのつ

ながりを決定的に強いものにしたのは、昭和五十七年、一七七号に載った特集、「肉親の老いを見つめる」からだ。このテーマの募集を見たとき、これなら書ける、書きたい、とすぐ思った。

義父母は私の両親とちがってずい分と年をとっていたから、私は二人の話に興味をもった。そして、いろいろな話を聞いているうちに、いつしか二人の生きてきた人生が、頭のなかに膨らんできたのだ。一気に二十枚ほど書き、それが載ったときの嬉しさと言ったら……。義兄弟四人にも一七七号を送った。

それからの義父母の老いは激しく、二人で入退院を繰り返し、その間、さまざまなことがあった。私のなかで、またもや、義父母の老いに対する体験と意思が膨らみ、翌年、パートIIを書き、それが一八一号に載り、さらに、義父が亡くなるまでのパートIIIを一八二号にと、続けて載せてもらえた。全部合わせれば、七十枚にはなるだろう。もちろん、私もこ

れだけ書いたのは初めてであり、肉親の老いと死を通じて、私自身が成長したと思っている。

何しろ義父は、亡くなったときは九十一歳、私は三十五歳だった。私にとって、まさに「明治」に触れられる人であった。

その義父が逝って三年。私の「老いを見つめる」は続いている。今度は、少しも歩けなくなった義母を看るのだ。

書くことの意味は、私にとっては記録であった。義父母を書くことによって、私自身を記録してきた。書いたものが残ることは、素晴らしいと思う。そこに私たちが「わいふ」と離れられない良さがあるのだ。

自分の歩みを記録する

その後、一八五号の特集、「親離れ闘争記」にも投稿し、私自身を書いた。この四冊は、義父母と私の生の軌跡であり、

私の宝物となっている。

将来、子どもたちにも贈ろうと思つて三組揃えてある。

子供たちにとって、明治、大正、昭和と生きた祖父母のことは、ほとんどわからないと思う。年老いて、子供たちに世話になってゐる姿しか記憶に残らないかもしれない。でも、このささやかな私の記録で、少しはわかつてもらえるのではないかと思う。

「わいふ」は私に、実にいろいろな広がりをもたせてくれた。と言うのは、

義母を息子たちで交代に看ているとき、私はそれでも働きたいと思い、自分に何ができるかを考えた。義母を看る順番がきたら、その仕事は辞めなければならぬ。そこで、辞めてもさし支えないようなもの、そして、中断されても、また、復帰ができるものは？と考え、都合の良いものが思いついたのだ。

それは市の登録ホームヘルパーであった。これなら半分はボランティアの仕事

だから、いついつまでしか出来ませんけど、それでも良かったら……と、言うことが出来る。今の今、困っている人のところへ行つてあげることができると思つた。私はついていた。市へ電話した二日後にもう仕事が入つたのである。

結婚以来初めて外へ勤めに出ることになった。外に出るといっても、家族を送り出したあと、八時半頃家を出れば良いのだし、仕事は九時から十二時までの三時間だから、家族も抵抗なく、受け入れてくれた。

最初に派遣された家で七ヶ月勤め、喜ばれ、その後義母の世話のため、辞めた。三ヶ月後また、運よくヘルパーの仕事にすぐ復帰できた。計算通りだった。

このヘルパー体験記を「わいふ」に載せてもらったら、これを編集部の原田さんが、読売新聞の「働きたいあなたへ」の三十二回目に取り上げてくれた。見出しは「主婦業を生かせる数少い職業」だった。反響はというと、東京にいる友人

が、「あなたのことが載っていたわ」と、我が家が朝日新聞だということを知っていたらしく、送ってくれた。また、見知らぬ千葉の人からの問い合わせが一件あり、わいふの仲間の友人からも問い合わせがあった。

原田さんの連載で、『資格』をテーマにした時は、ものすごい反応があったと聞いている。女性の意欲はすごいな、と感心する。それに比べると、ヘルパーへの反響は少ない。

老人介護やら、ヘルパーなどという地味なことは、誰も好んでやることではないのだろう。「わいふ」の会員たちが、少しでも知的な仕事につきたい、また、そうしている人たちも多いことは、よくわかる。

大学出の主婦たちが多くなり、家事と育児だけではおさまらなくなるのが当然だ。みな知的欲求に溢れている。大学まで男性と同等に肩を並べて勉強していたのに、結婚したら、隣りに座っていた人

は、学んだものを社会で生かし、どんな認められていくのに、自分は、学んだことが結婚、出産によって途切れてしまふのだから。夫を横目で見ながら、いつか再就職を思ってはみても、十数年家庭にしていると、社会音痴になっているし、歳をくってしまっている。少しでも生きがいのもてる仕事を得るためにはと、ここで『資格をとろう』となるのだ。

全く「わいふ」には、いろいろな素晴らしい体験、考えをもっている人たちが大勢いるので、他のどんな雑誌を読むより、主婦の生の声が出ていて面白い。

私は三月いっぱい、ヘルパーをやめた。これは計算違いだった。

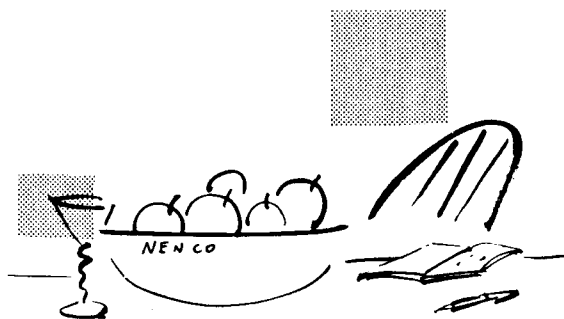
四人の息子のところを回っていた義母も、丸三年経ち、心身共に限界にきたようだ。諸条件、諸事情が絡み、ついに、末子の我が家に落ち着くことになったのである。

私のこれからの生活がこれで決まった。何年続くかわからない。義母のいるかぎ

り、外へは出られないことが決まったのである。こういう束縛がなく自分の人生を決めていける人がいたら、それだけ楽だろう。

でも、老人問題が避けて通れない人は、やはり、それなりの生き方を考えねばならない。

私はイヤイヤ引き受けたのではない。でも、自分の体力がどれだけ続くのか、



気力がどれだけ沈滞しないで行っていか
るか、不安定要素は沢山ある。

家に居て、出来ることをしようと思う。

でも、時間に追われ、雑事に追われ、先
ほどの話ではないが、資格をとる勉強な
どする気力もないのが実情だ。夜、英語
を教える位が精一杯。

車イスに座り、テレビを観る位しかす
ることがない義母と、つい一緒になって
テレビを観てしまったり、何となくのん
べんだらりと過ぎてしまう一日一日がこ
わい。

自分に描く夢

だから私は今、もう義母との生活が終
わった後のことを考えている。もうヘル
パーはするつもりはない。そう、今度は
まるっきり、ちがうことをやりたいのだ。
そのための家にいる準備期間が今なので
ある。

私は一体、何をやりたいのか、何が向

いているのか、こんな私でも、まだ眠っ
ている可能性があるのだろうか。よく考
えてみたいと思っている。

一年間だけだったけれど、パートに出
る経験もした。主婦が、たとえパートで
も、毎日出ていくことの家庭へのしわよ
せも感じた。老人介護も体験した（して
いる）。

何かを経験して、無駄になるようなこ
とはないだろう。すべてが自分の肥やし
になるのだと自分に言いかけつつ、と
もすれば、会話の少い義母との生活に埋
もれがちになりそうな自分をふりいたた
せながら、いろいろな夢を描いている。

そういう意味でも、「わいふ」を読ん
でいることは、私の大事な情報源であり、
刺激源でもある。「わいふ」を通じて、
全国各地の人たちと交流をし、さまざま
な世代の人たちの生き方、考え方を知る
ことができ、私の世界も広がっていく。
今、私の所には、「わいふ」が五冊、ま
とめて送られてくる。同じ団地の中で、

「わいふ」を読んでくれる人が、出来た
のだ。「これ読んでみない？」と言って、
貸してあげていた人達が、自分から言い
出して、会員になってくれたのである。

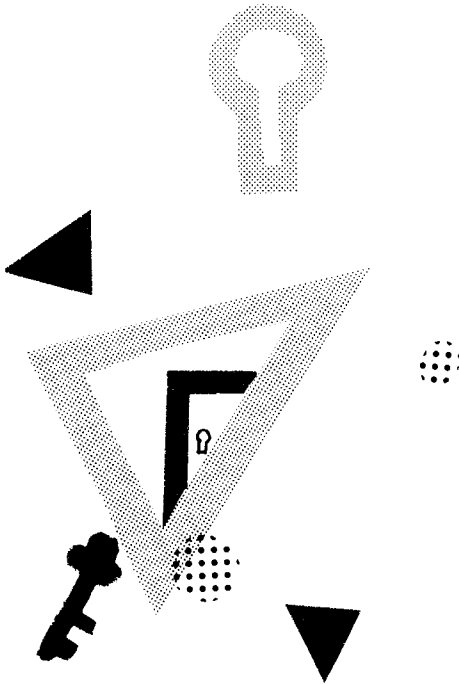
横浜サークルのある人が、「わいふ」を
貸してみても、その人の反応がどう出るか
が、友人を選ぶ一つのバロメーターにな
っている、ということを書いていたが、
それは言えるかもしれない。「わいふ」を
読んで、何かを感じてくれる人は、何か
しらの共通点がある。話ができる。心や
さしく、真面目に物ごとに取り組む姿勢
がある。それが何より嬉しいし、私の励
みになっている。

十周年記念、二百号記念と「わいふ」
は着実に大きく進んできた。多くのミニ
コミ誌が生まれては消えていく中で、こ
れだけのものになったことは素晴らしいこ
とだ。私の七年間も、「わいふ」と共に少
しは成長したかな、なんて思う今日この
頃だ。

出会いが運命を拓ける

飯田みち子

埼玉県草加市



“わいふ”でかなった就職

“わいふ”と私との出会いはY新聞に紹介されたときに始まる。それからの私は“わいふ”によって友人が増え、“わいふ”によって仕事を得、今その数奇な出会いをひとりかみしめている。

友人というのはIさんのことだが、私の家は自営業なので開店したばかりのとき経理まで手がまわらず、丁度“わいふ”に経理の仕事を探すIさんの文がのり、電話をかけたのがキッカケだった。その後コンピューターによって経理を夫がするようになってからも交際が続いている。しかし最も庄巻だったのは、Mさんの出会いである。私が十一月に夫と別居してから仕事探しをしていたのだが、何せ無能無芸の中年オバンとしては、お手伝いさんくらいしかなく、それさえ保証人がなければ雇うところもない。へそくりを百万ほど持って出たが、使い果たして残額二十万になってしまった。アパー

トを借りるにしてもどうにもならない。

とうとう涙をのんで頭を下げて夫のところへ帰る決心をした矢先、「わいふ」の読者のMさんが声をかけて下さった。五十歳になって生まれて初めての事務員で、最初は緊張で肩は凝るし目は疲れるし、どうなることかと思ったが、有難いことに社会保険まで入れてくれるという。

しかし私は自分でこれならやれるという自信がつくまで断わることにした。六畳と四畳半二間の家を見つけて保証人になって借りてくれたのもMさんだし、着るものしか持って出なかった私に、給料差し引きで月賦で洗濯機やアイロンも揃えてくれたし、冷蔵庫もまだ新しいのを調達して下さって広い？家は体裁を調えた。

大家さんは「あとから旦那さんも来るんだって」と何もないガランとした室内を見まわして何の屈託もなくいつてのけた。私は内心ヒヤッとした。一人になった女には部屋を貸してくれる家主もいな

いのだ。権利金も敷金もなくて良いといってくれたときは、通帳の残高が胸をカスめた。

今、テレビもラジオもない音なしの家に一人で座っていると、しみじみ自由の有難さと、これからの多難さを感じて心が研ぎ澄まされてくる。さあ、これからはハングリーになって家事にじゃまされず原稿用紙のマス目を埋めることにしよう。

しかし夜中にふと人が私の布団に入ってくる気配で目がさめる。まだ夫に未練があるのか。けれども夫でなく他の人であっても良いのだ。

Mさんが私に声をかけて下さったきっかけは、昨年の三月に新宿の随園という中華料理店で、「わいふ」の十周年記念パーティーをやったとき、誰でも良いから何か話して良いと言われ、ノーメイクの話をしたときから始まる。そのときの話にMさんが感動され、以来ノーメイクになさっていられるという。消費者運動をや

っていた私にとってこうした瞬間が人生の至福のときというおか嬉しいときである。こうした運動は道なき道を行くが如くで、人に笑われ、軽蔑され、うとまれ、良いこと一つもないといったものだが、こんなことがあるとまた次の運動にもふり立つのである。

でもMさんにお会いしてがっかりした。というのはMさんが非常な美人だったからだ。

ノーメイクの運動は私の友人にいわせると「化粧しなくても美人の人が、私はノーメイクでもこの通りとエリート意識ふんぶんの運動」と茶化していつていたから。Mさんの顔を見ながら、これじゃあんまり広がりにならないと、さもしく考えた。

ともあれノーメイクの話は、あちこちでするのが、草の実会の総会でもしたのに何の反応もなく、シワだらけのお婆さんがシワのミゾに固まった化粧品をさらしている。

頭も良く話をして面白い人が多いのに何としたことだろう。ノーマイクは単にお化粧をやめるということでなく意識革命である。私の友人は合成洗剤からノーマイクに入った人や、またその反対にノーマイクから合洗反対運動に入った人など入り方はさまざまだが、自分を商品化せず、知性そのもので勝負しようというところは共通している。

ところでMさんには「飯田さんはパーマをかけていますね。パーマしなければもっとすてきなのに」といわれギャフンとした。逆に私がパーマをかけたことを反省させられた。

Mさんのところに来る前に実に面白い体験をさせてもらった。私の息子は（二十二歳）私が捨てた夫を哀れに思い、

「お母さん、家を捨てたなら僕のところについてまでもしがみつかず、立派に自立してみろ」という。それは全くその通りであるけれど、百万の金で老後を考えるとなると家賃の要らない息子のところは

仇同士のようにしてでもいる必要があった。そんな話をSさんが聞いて、

「私のところはワンルームですが良かったらいらっしゃい」といつてくれた。

そのころSさんも失業していて、SさんとSさんのお嬢さんと私と女ばかり三人で共同生活が始まったが、今度は息子から、

「お母さん、荷物どうするんだ捨てちゃうぞ」といわれ、Sさんに話すとSさんは「実家の物置を父に片付けてもらってそこに入れたら」といつて下さった。

しかし私は着物が好きで着物をしまっ

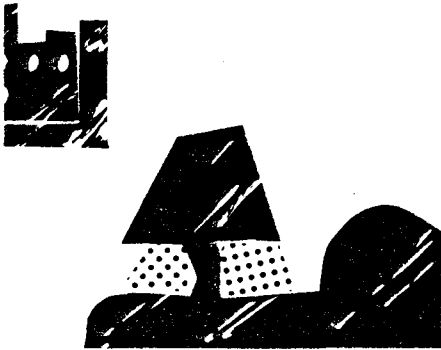
には物置では、ちょっと惜しいし、かといつて市ヶ谷のSさん宅は名にしおう土地の高いマンションだったから、私の荷物は行き場を失ってしまった。わいふに広告を出して私の荷物を預かってくれる人を探そうと思つていたら、Mさんの家でも丁度事務員がやめたばかりで空きがあつたとのことで、スベリ込みセーフで東京に落ち着けることになった。

そのときの嬉しさといつたらハガキに三十枚、「ついにやりました。自立の念願叶う」と書いて出して友人達もおどろくやら、あきれやる。

浅草の友人は「貴女の自立のお祝いよ」と合羽橋の食器店で丼を二つ買つてくれた。

新世帯のようにお皿二つ茶碗二つと買いつながら、お墓の下で母は、さぞ嘆いてゐるだろうと思つた。食器店のご主人は、冗談に、

「今度こっそり夜でも伺います」といつ



て私をギョッとさせた。

女の連帯が女を支える

五時に会社から帰ると早くご飯を食べ、メモを持って夜桜見物とシャレ込む。このあたりは人もまばらで、ときどき車が通り過ぎるだけだ。テレビがないと何と夜が長いことだろう。八時から平家物語を朗読して歌を歌って、十時に寝る。朝も五時に目覚めるから近くの神社に参加に行く。

座間キャンプの中ではコートで誰かがサッカーでもやっているらしい。近くの公園では桜がハラハラと散っていて静かな花見が楽しめる。園芸の手入れをしている参道のわきの家の旦那も見ず知らずの私に「おはよう」と声をかける。朝の美しい空気を吸って心まできれいになっただよように思っただけ帰ってくる。

離婚した人たちはばかりで作っているハンド・イン・ハンドの会というのがある。その人たちは私のように、ぜいたくな悩



み？で離婚したのではない。暴力、浮気などなど我慢の限界を越して来た人ばかりだ。それだけに人の痛みに共感できる人たちが。ワンルームに私を招き入れてくれたSさんもその会で知り合った人だ。女は横の連帯がなくて心の中では何とかして助けようと思っても、その力が無い。今回、わいふが悩みごと相談の欄を設けたのも、あまりに私のような人間が増えて来たからだと思う。でも私は自立とはいっても、まだ別居で法律的には独身ではない。

家を出てから一度だけ夫に会ったことがある。非常にやつれて弱っていた。哀れに思った。

友人から「仏心を出していると出られなくなるよ」といわれたが、昔から「かわいそうとは惚れたってことよ」という言葉があるが、惚れたとは違うが哀れとは切実と思う。

私も経済的にも精神的にも自立したんだから、貴方も立派に自立してよと心の中で叫んでいるこのごろだ。三人の子どもも父親の姿に同情して私から離れて行った。利用価値のなくなった親は存在価値もないようだ。

保証人になることを こわがる人妻

「落ちぶれて袖に涙のかかる時人の心の奥ぞ知らるる」という歌の文句を私につけて考えてみると実にこの通りのことがあった。

昨年十一月に家出してすぐのころ弁護

士に頼みに行ったとき、別居の生活費負担をする書類に保証人が必要だった。かなり親しい友人に頼んで見たけれど、その書類の内容が分からなくてこわがって署名してくれなかった。

人妻というものは自分で意志決定ができないものなのだということが分かったので別に友人を恨んだりもしなかった。しかしそれ以来、女の友人は頼みにならないことを知った。

ハンド・イン・ハンドの会でも、子どもがいて働けない人と、私のように住むところがなくて職がない人とが互いに助け合い、ベビーシッターなどのシステムで何とかならないものか、と話し合ったことがあった。Sさんの場合はワンルームでどうにもならなかったが、今でもSさんは、

「実家の父は八十三歳だから一年くらいで父のマンションが空くから、そのときは戻って来てよね」と望みを持っている。わずか半月の同居だったけれど、毎晩

ビールやお酒を飲んで男友達の話や、おしゃレの話で十時半ごろまで喋り、交代で食事を作り、私の友人から「貴女レズじゃないの」と冷やかされたり妬まれたりした。私は運動をするのに市ヶ谷は足場が良く、集会に出かけるにも交通費がかからず最高だった。息子さえ荷物を捨てるといわなければとくやしい。Sさんは未だに、「とても本当とは思えない」という。

Mさんの店に来てしまったのは息子の話がダシのように思えるらしい。

SさんもMさんも共に三十代、私のようなオバンがこんなに若い人に好かれるのは？ 勿論私も若いからと、このごろウキウキしてきて私の電話の声を聞いた友人は、

「貴女このごろウカレテルね。彼氏でもできたんと違う」と冷やかす。

彼氏はとっくにいるんだけど、私が人妻でいたころはスリルがあったから良かったらしいが、私が一人になってしまっ

たら、つまらなくなってしまうように見える。それでも賤が伏家に来て「テレビがないね、買ってあげようか」というてくれる。男と女の仲なんて一緒に住んだらロマンがなくなるような気がする。

この彼にはヤツ当たりや恨み言や、この六カ月の間のせつなさや辛さをぶつけて胸を借りて来た人で、頼もしい人だった。ただ表立って私の保証人になったりはできないから、ときどき余りに冷静な態度に「居酒屋兆治」の高倉健を思い出し、「おさよさん」を地で行くように原宿パーティに出たりして見た。

「わいふ」という言葉で面白いエピソードがある。私が友人に「わいふ」が取り持つ縁で今のところに就職しました」とハガキに書いたら、友人の旦那が私のことを、

「この人は女の名前で書いてよとしたが、文面を見ると、わいふ」がと書いてあるから男だろう」というんです。友人は、とんだところで疑われたものだと言っ

いた。

私の字は自由はん放で男の字のようだから、そんな風に疑われるのも無理はないけど思いがけない反応で、びっくりするやら、面白いやら。「わいふ」ももつと有名にならなければいけませんね。

ところでMさんは私が料理好きなのに目をつけ「飯田さん、私のところの朝夕食を作ってくれないかしら。お手当ても上げるから」というのです。私にしてみれば、人のお財布でおいしいものは食べ放題、食費も助かるしと思うのだけど、Mさんの旦那様、すなわち私の上司の専

務さんは、

「じゃお前は何するんだ。これ幸いと遊ぶんだろう」

という始末。私はもう少し夫婦で話し合ってからにしてくれと断わったが、内心おかしくて仕方なかった。

私も家出する前、夫とやり合ったものだ。俳句をやっていたとき、男の人が多かったから、句会は夜の六時からだった。丁度食事の仕度の時間なので出られず、月にたった一回の句会なのに、句を送るだけで合評の楽しさも味わえない。朝と夜のパートタイマーを雇いたいといって

も夫から、

「お前の道楽に五万も出せるか」といわれた。

男のつきあいだといって二万も三万も飲みに行ったり、セックスツアーに行つて三十万も使ってくるのに、妻が向上する楽しみに、食わしてやつてるだけで良いという腹がミエミエで、そんなこんなが積み重なっていつて別居という次第になったのである。

私にとって「わいふ」は、くやしき悲しさ嬉しさを吐き出すところ、何よりのストレス解消の場です。これからも「わいふ」さん長くおつきあいして下さいね。そしてもっともつと良い友人を広げて行きたいものです。

一人寝を望みし故に別れしに
何故に我、ぬくもりを恋う

うつつにも夢にもにくきかの君の
まどい想いて寝られぬ夜は

(え・カステラネンコ)

わいふと私の十年



一つの出会いがすべてを変えた

田中喜美子

「わいふ」編集長

めぐり合ったが運の尽き

あれは息子のJが小学四年のときだったから、一九七一年のことだと思う。

そのころ私は、Jの通う地元の公立小学校で、PTA広報部の副部長をしていた。（PTAは、当時私の社会活動の第一歩でもあり、すべてでもあった）。

「こんどすごい人が転校してきたわよ」

ある日広報部の部長をしていたAさんがいった。電々公社の社宅に住む彼女は、古くから地元に住んではいても、一戸建のつんばさじきにいる私と違って、いわゆる地獄耳である。

関西の小学校で、PTAを改革し、役員の首を全部すげかえたという経歴の持主が、彼女のクラスに転入してきた、というのだ。

Aさんと私とはPTAの青臭い「改革

派」で、学校や父母の超保守性を嘆きあう仲だったから、この噂には胸をときめかした。頼もしい仲間が一人、ふえるかもしれない。

噂の主に知り合う日が、間もなくやってきた。

「例の人がくるからうちへこない」とAさんに誘われて出かけてみると、もうその人がAさんの居間のイスに腰かけて談笑している。

小柄だが、実に晴れやかな、俊敏な感じのする人で、一目見て私は「こりゃ、いける！」と心が躍った。

それが、今も「わいふ」で苦楽をともしにしている和田さんと私との出会いである。

Aさんと三人で、何を話し合ったのかはすっかり忘れてしまったが、ただ和田さんの、何やらいつも腕まくりをしているような威勢のよさ（今でもそれは変わらない）だけが、はっきり印象に残っている。

この日に始まって、和田さんと私は、地元のPTAをひとしきりかきまわした後、「全国PTA問題研究会」（PTA改革をめざす有志の全国組織）に入会して活動する仲となった。昨年発足した「女性による民間教育審議会」も和田さんと二人で言いだしっぺになったわけ、二人はいわば非行中年、「悪の一味」として気が合うのである。

ともあれこの人に出会ったことが、私

のその後の人生を大きく変えてしまったのだから、人生、いかなる時にいかなる人にめぐり会うかということは、まことに恐るべき神の摂理というほかはない。

盲蛇におじず、で

全P研で活動していた時代、和田さんはときどき私に「わいふ」という奇妙なタイトルの小冊子売りつけていた。厚さ五ミリばかり、A5判の写植の小冊子で、内容は評論あり、随筆あり、作文ありというごった煮だ。私にとっては少しも面白くなかったが、和田さんの「PTA改革の戦略・戦術」が出ているのと、百円玉一個で買える気やすさから、半ば義理で購読していた。和田さんは関西にいたとき、宝塚市で発行されていたこの同人雑誌の会員になっていたのである。

一九七五年の秋のこと。

和田さんがやってきて、「あなた、わいふの編集を引き受けない？」という。

編集長の高木さんが、本業が忙しすぎるのと、投稿者が減ったという理由から、もう「わいふ」の使命は終わった、やめるといっている。しかし十二年も続いた伝統ある投稿誌をやめるのはもったいない、何とか東京に引きとって続けないかというのだった。

「いつかあなた、婦人雑誌やってみたいといってたでしょ」と和田さんはいう。

いわれてみれば、たしかにそう口走ったことがあった。

一九七五年は国際婦人年であった。この「婦人年」が私たち中年女性に与えたインパクトは測りしれない。「国際婦人年をきっかけに行動する女たちの会」が生れたのを初めとして、社会の各層から抑圧されていた女性のエネルギーが噴出して、私のような主婦にまで影響を及ぼしていたのである。

ところがそうした女たちの状況と、願いとを受けとめてくれる女性誌がまった

くない。

「婦人公論」は数年前から、すさまじい変質を示していた。「暮しの手帖」は女性解放にはほとんど縁がない。

そのもの足りなさだが、「自分たちで好きな雑誌をつくれなかなあ」などと私にいわせていたのだ。

「わいふ」というタイトルがいかに泥くさく、そこが何とも氣にくわなかったけれど、私は結局和田さんの申し出を引き受けることにした。

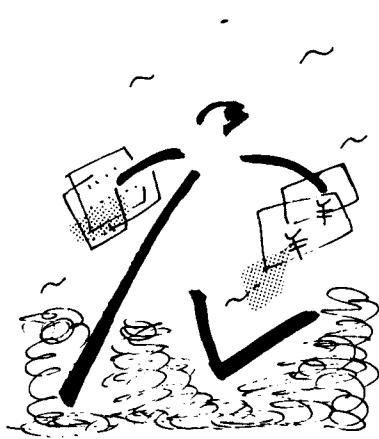
「婦人雑誌をやってみたい」という意欲はたしかにあった。しかしそれよりも、要するに「ヒマ」だったからである。

私は専業主婦であった。

全P研の活動の他に、アルバイトの翻訳の仕事、家庭教師などと多少の収入を伴う仕事をして、退屈とは縁の遠い日常をすごしていたが、基本的には「ヒマ」だったのだ。それらの活動はどれもこれも、自分の気持ち次第でやめようと思えばすぐさまやめられ、やめたとて誰

に迷惑のかかるものでもなかったからである。

「わいふ」を引き受けたのも、これを自分のライフ・ワークにしようなどという大それた望みがあったわけではない。専業主婦の私にとって、それもまた他の活



動と同じように、自分の生活を豊かにしてくれる余暇活動の一つと思われた。

「わいふ」の前途に何が待ち構えているか——盲蛇に怖じず、の私には、そんなことは考えもしなかったし、考えても分からなかったに違いない。

私はただ、新しい仕事をすることの楽しみに溺れていた。

私よりはるかに目はしの利く、慎重派の和田さんさえ、「わいふ」の前途をはっきり予測してはいなかった。

「こんなことになるとは思わなかったねえ……」死ぬほどの忙しさに追われている二人はいま、顔を見合わせてはこぼし合う。

「わいふ」は私たちの生活を、それほど変えてしまったのだ。

止められない自転車

一九七六年の正月、東京に移った編集部は、「わいふ」一一三八号を発行した。

折しも天皇の訪欧に賛否両論かまびすしく、特集は「天皇とわたしたち」とした。

編集部は六人。和田さんと私、はじめに和田さんを私に紹介したAさん、やはり地元のPTAで知り合った、元テレビプロデューサーのHさん、そして宝塚時

代の「わいふ」会員だったTさん。五人とも専業主婦である。職業を持っているのはただ一人、Kさん。今はフリーライターになっている彼女は当時、高校の非常勤教師だった。

誰一人、編集の専門家はいないド素人の集まりの上、自分の金も持っていない。当時「わいふ」の会員は名目二百人いたが、編集部が東京へ移るときいて百人がやめた。関西の編集部から受け取った繰越金が三万円そこそこ。

私たちはすぐさま、第一の難関にぶち当たった。

これまで「わいふ」が、月々わずか百円の会費で発行を続けてこられたのは、編集長の高木由利子さんが、写植のお店を経営しておられたからだった。原稿を写植でタイプし、印刷に出し、製本する、本当なら相当のお金のかかる工程を、高木さんが個人的にカバーしておられたからこそ「わいふ」は月刊で一三七号まで続いたのである。

今回はちがう。誰一人、タイプや印刷の専門家はいない。タイプ屋、印刷屋に払うお金がばっちりかかるのだ。

私は一世一代の「お願い」に狂奔しはじめた。親きょうだいから親戚、小学校から大学時代の友人、全P研での知人にいたるまで、まだ発行もしていない「わいふ」の年間購読をカタに、年間購読料六冊分送料とも二千四十円という金額をたかり取ったのである。あの時ほど友人の多い有難さを感じたことはない。

私の手で約二百人、もう一人Hさんの手で二百人以上の年間購読者が集まった。二人とも、生えぬきの定住族であったことがものをいったのだと思う。転勤族の和田さん、Aさん、Tさん、Kさんの集めた人数は全部合わせても五十人たらず。それでも百万近いお金が手に入って、私たちは一三八号を六百部印刷した。

一三九号の準備中に、毎日新聞がわいふのことを取り上げてくれ、会員がまたしてもふえた。

しかしそのころから、私はこのおそろしさを認識しはじめたのである。

予約購読者から年間購読料として入る金額は、年間印刷費の総額をカバーするにはほど遠い。つぎつぎに新しい読者が入ってこなくては、二、三号で底をつく。いわゆる自転車操業というやつで、会員がふえ続けているかぎり、何とかやっていけるけれど、ある日その増加が止まったら……とくに、一年というサイクルが終って、更新の時期がきたとき、お義理で取っていかれた親戚、知友がいつせいに中止したら、いったいどういうことになるのか……。また、もし彼女らが続けてくれるとしても、綿密に計算すると、読者全体の年間購読料の半額がすべての経費をカバーした上で常時手もとに残っていないかぎり、健全財政とはいえないことがはつきりした。そんなお金がいつ溜まるか、と考えると気が遠くなる。（今でもこのお金は溜まっていない）。
こうなればもう、やめたくともやめら

れないのだ。自転車は永遠に走り続けなければならない。

その一方、「わいふ」の編集という仕事には予想外の面白さがあつた。各地から寄せられる投稿が、まるでこだまのように、心の奥にひびきわたる。私は初めて素人の文章にひそむ力に気がついた。

それにしても、経営的にいつまで続けていけるのだろうか。にっちもさっちもいかないような状況に追いつめられ、それでも尚やめるわけにはいかない日がないともかぎらない。考えただけでも空恐ろしくなる。

主婦として経験したことのない状況に、私はいつの間にかはまりこんでいたのである。

問題は山積する

内部的にも問題が多かった。

一つの雑誌を作り上げていくためには、さまざまな仕事の分担が必要である。

投稿を読み、整理し、わりつけたり校正したりする編集部と、購読者の入・脱会をとりしきり、入金、出金を把握し、記帳する庶務・会計、そして一括発送の肉体労働。

「わいふ」を始めてすぐ、世の中に「事務員」というものがなぜあればたくさん存在するのかを、私は実感として思い知った。

何か一つの仕事を始めれば、それに伴って、必ず処理すべき「事務」が発生するのだ。

組織が小さくて、一人が編集と庶務を兼任できるような状況ならまだいい。しかし会員が千人をこえ、分業でなければ到底処理できないような状況になってくると、事態は異ってくる。誰かが会計や、庶務を専任してくれなければ、ものごとが進んでいかない。

雑誌の編集をやりたくて集ってきた有志の中から、庶務・会計を担当してくれる人を見つけ出すのは基本的に無理があ

る。お金のない団体の事務処理を誰に、どう頼むか——この問題がまず、悩みのタネとなった。

文章を書くことが得手な人と、そうではない人とがごちゃ混ぜになっているのもむづかしいところだった。投稿の数が足りないときは、企画もので埋めるほかはないのだが、毎回、誰がそれを引き受けるかが問題になる。特定の人に書き手としての仕事が集まることには、暗黙の中に大きな抵抗があつた。

しかしどんな素人雑誌といえども、企画ものにPTA広報程度の文章が並んでいるのでは、読者が離れていってしまう。「平等」と「能力」のギャップを誰がどのように調整し、どのように舵とりをしていくのか。

投稿をえらぶときにも、このむづかしさはつきまとった。

一つの投稿をよしとし、悪しとするのに、いったいどんな客観的な基準があるのか。



衆目のみとめるところ、評価の一致するものは安心だ。ある人はよいといい、ある人は悪いといって、議論が分かれた場合はどうしたらよいのだろう。

編集長のいない雑誌というもののむつきさを、私は骨身にしてみて味わった。毎回、投稿をめぐってケンカがおこる。

発足当時のメンバーのうち、TさんとAさんは転勤などで早い時期にやめ、初めから気乗り薄だったKさんは姿を見せなくなり、残ったのは和田さんとHさんと私の三人。

不運なことに、Hさんと和田さんは、正反対の気質の持主だった。

Hさんは、妻が夫を「主人」と呼ぶことさえ怪しからぬと感じる、直情径行のウーマンリブ。和田さんは、コトバだけ直しても現実が変ってなきやうがなっていないか、と「主人」にこだわるのはつまらぬ、というリアリストだ。

Hさんは女性解放姿勢の濃厚な投稿には本能的に肩入れする。和田さんは思想

はともかく、描かれている現実に、主婦の生活をありのままに伝える独自性があり、文章に見どころがあれば評価する。

発足後三十四年して、互いの遠慮がなくなってくるに従い、二人は事あるごとに衝突するようになった。犬と猿よろしく、ちょっとした二人だけにしておくと、必ず騒ぎが持ち上がる。

どっちつかずの私は、二人の間でヨレヨレの毎日を送っていた。それでもノイローゼにもならなかったのは、Hさんにも和田さんにも、並みの女にはないカラリとしたさわやかさが備わっていたからである。

「食える」市民運動

そんな中で一九八〇年、私たちは運動路線を脱皮して、「株式会社グループわいふ」として再出発した。懸案の事務処理も、何とか有給化のメドがつくようになり、交通費支給からはじまって、編集

部のただ働きも少しずつ改善されつつあった。法人化はこうした方向を自己確認し、強化するための一つのけじめだったように思われる。

すべてのメンバーが平等、という組織のありかたも改めた。決定権を持つ人間の存在は、もしキチンとした仕事をしようと思うなら、いわば必要悪なのである。今になってみると、発足当時から「わいふ」の悩みつづけた問題は、あらゆる市民運動共通の問題だということが、よく分かる。

たいていは、金がない。

みなが平等の立場で、活動している。意見が分かれても、誰が正しいのか、決めようがない。その中で、どんな活動のやりかたが、本当に有効なのか、真のいみで多数の人に受け入れられるのかが分からず、内部の力関係だけが決め手になって、ある方向にどんどん流されていってしまふ。

そのうちに、活動が宙に浮いて一人よ

がりになる。またはマンネリになる。でなければ過激になる。

これらはどれも大衆に支持されない。

小は草の根の市民運動から大は政党に至るまで、日本人の集まるところ、何とこの構造がはびこっていることか。

無収入の主婦にはまた、他の危険が待ち構えている。最初は情熱にもえてはじめたのに、二年、三年とたつうちに、必ず他の「収入を伴う」仕事に誘惑を感じるのだ。年が若く、イキがいい人ほどその傾向が強い。

翻訳者として曲りなりにも仕事をしていた私自身、仕事を捨てて金にもならない「わいふ」に入れあげているという矛盾をつねに感じていた。おまけに夫に養われているかぎり、自立した人間とは到底いられない。「わいふ」は「結構なご道楽」と人にいわれても一言もない。

第一次「わいふ」の終えんもそこに一つの原因がある、ときいていた私たちは、かなり早い時期から、「わいふ」を

「食える市民運動」にしよう、とは考えていた。

それは逆にいえば、自分たちの理想を核にして、それを「仕事」として拡げるだけの可能性が、「わいふ」に潜んでいる、ということでもある。

「わいふ」には、どんな観念的な人間の足をも、宙に浮いたままであることを許さない大地のような力が潜んでいる。ここには、与えられた条件の中で懸命に生きている女たちの、生ま身の生活が、思いが反映している。どんな高尚な議論にもまさるリアリティが、「わいふ」にはあるのだ。

元来「わいふ」に備わっているよさをどれだけ効率よく引き出すことができるか——編集部力量は、ただその点だけにかかっている。

しかしこのことはそれほど簡単ではない。

読者というものは動物的な嗅覚で、編集部の体質を嗅ぎわけのだ。そして編

集者はちょっと油断していると、たちまちさまざまな落とし穴にはまってしまふ。

自分たちの気に入る考えが書いてある投稿ばかりのせたくなる。型破りの文を刈りこみ、^{月次}月次の文章にしたくなる。新しい、イキイキした文に古い感覚でケチをつけたくなる。無軌道・不道徳に見える文に眉をひそめたくなる。逆に、やらせんセーションナルな内容の文ばかりを追いかけたくなる。有名な人の、つまらない文章を有難がる。コネのある人の原稿を断れない。編集部や、利害関係のある人を批判する投稿を握りつぶしたくなる。一見稚拙で素朴な文章の奥にひそむ真実を見逃してしまう……。私たちははたしてどこまで、こうした落とし穴にはまらないでやってこれただろうか。

しかしこの一二年、「わいふ」はたしかに、本当の意味で面白くなった。読者の数がふえたから、というばかりでなく、私たちが心から望んでいるような充実した投稿がふえてきたのだ。それは、

主婦の生活が多様化し、体験の幅が広がったことの一つの結果ではあろうけれど、読者がようやく、タテマエの鎧を脱ぎ捨て、ホンネで語りはじめたということなのだろう。

一九八一年、Hさんは本の販促会社ブックパワーの創立メンバーとして「わいふ」を去った。再発足当時のメンバーで残っているのは和田さんと私だけである。

しかしこの間、「わいふ」からは何人ものライターが育ち、ド素人の集団が読売新聞の再就職コラムを二年連続して引受けるほどになった。

「わいふ」の活動の中から生まれた単行本は十指に迫る。マスコミヤ、出版社からの引き合いは応接にいとまがない。

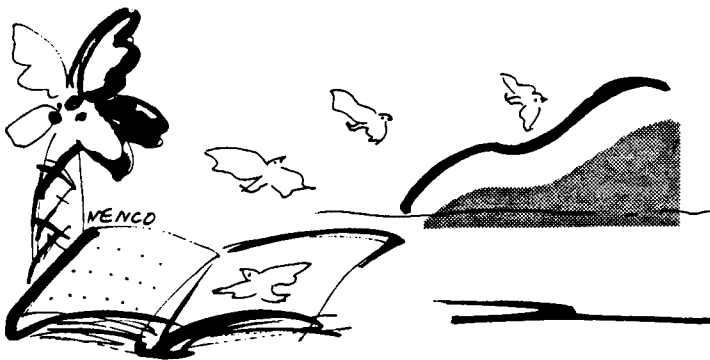
「わいふ」はようやく、一つの力として社会に認知されはじめた、といってもよいのではなからうか。

それを可能にしたのは、「わいふ」に参加している、ひたむきに生きている一人一人の女たちの力である。

いま、「わいふ」の定期購読者は三千五百人。

気がつくとも、十年の歳月が流れていた。

(え・カステラネンコ)



投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶったまげた・頭にきた・ジーンときた

エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

いのち

千葉県習志野市 藤野 宏子

数年前、嵯峨^{あだしの}の化野の念仏寺を訪ねたことがあった。高校卒業後三十周年の

同窓会に出席する途中で、友人と一緒に立ち寄ったのである。念仏寺は、苔むした何百体もの古い小さい無縁仏の立ち並

ぶ寺である。

その奥の一角に、鮮やかな赤いよだれかけをした水子地蔵があり、美しい花や千羽鶴、ベビー服、小さな綿入れ半纏などが供えてあった。グレイ一色の念仏寺

の奥に明るい色彩の供物を捧げられた水子地蔵があるのは、私の目には場違いのように見えた。念仏寺には似合わない、美観をそこなうようでもあり、私はそこからひとりで目をそらしていた。

けれども、私の心はそこにとどまらなかった。今にいたるまで。複雑な思いを抱いて女たちは供物を捧げている。名もない、顔さえわからない亡くした命のために。それらはかわいらしい衣服であるが、悲しい供物である。私は、その寺にしか供物を捧げる場所のない女たちの心を書いて、沈黙していた。

目はそむけることができて、私の心はそむけられない。なぜなら、私も、そのような思いを抱く多くの女たちの、一人であることに違いないのだから。再び苦しい思いはしたくない。沈黙する多くの女たち、私もそういう形を今までとってきていた。私は私の心の痛みを私からの供物として書いてみたい。

昭和三十七年暮れ、私は二人目の子を産んで三カ月目であった。自覚症状はまだなかったがみごもっていた。医師は当然のように、

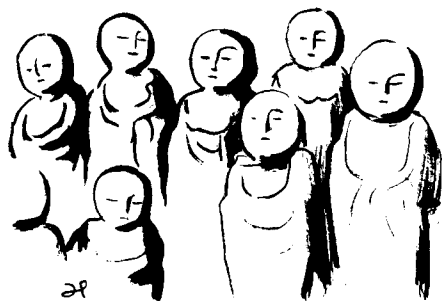
「あなたにはまだ無理ですよ、体がもつ

と元氣になってからお産みなさい、心配ありません、みなさんそうしています、そのほうが楽です」

といった。楽な道と困難な道を目の前にしたとき、多くの人は楽な道を進む。私も、医師の助言どおり、楽な道を選んでしまった。形も整わない小さいのちは、どこへ、どう処理されたのだろうか。年月を重ねてもずっと私はそういう思いから逃がれられない。産むべきだったのである。

終戦後、世論で墮胎や避妊を盛んに否定していても、生きていくためにその道しか選ぶことのできなかった女たちは多い。善悪よりも生きることが先だったのである。その時代に産まれた子どもたちが、その後どのような一生を送ってきたか、産んだあとで捨てざるを得なかった母たち、産む前に捨てる母たち、心の痛む女の歴史があった。

私の場合、ただ、安易というだけだった。



私が生まれたのは昭和十年正月。母が出血多量で危険だったという。だから、私はあとまわしになってかたわらにころがっていた。一刻一刻、時が過ぎる。やっと探しあてた医師がこの母子を助けた。へその緒を切ったとき、赤子は産声を上げなかった。

風前の灯のいのちを持って甦った私は、甦えることの全くできないかの小さいのちを、どうやって愛すればよいのかわからない。この腕に抱くことも背負うことも、できない。

思いつづけると、女の体は不思議な変化をした。私は、想像妊娠をしたのであった。診察に行くつもりでいたとき、生理があった。誰にも言わず心に思っていると、神はまねごとをさせたのかと思う私は産むことでそのいのちをとり返したいと思っていた。

昭和四十一年、私が三十一歳のとき、実家の祖母が入院した。私は二人の子供を連れて看病に帰った。祖母は、チョコ

レート色の血のようなものを吐き、やせ細って、腹水だけが大きく腹をふくらませていた。末期のガン症状であった。

私の体は、二カ月余りの看病のあいだに、五キロくらいやせた。食欲も全くなかった。看病に必死だったのである。祖母の苦しみにくらべれば、私の苦しみはたえられた。死を覚悟している人のそばで、私は我を忘れていられた。

生理はなくてはなかったが少なかった。心の片すみで、もしかしたら、と思ったが、そんなはずはないという思いもあった。

あるとき、祖母にそれとなく質問した。「もう一人子どもが欲しいけど、どう思う？」

「ゼニがかかるから、二人でええ」明治の末、祖母は、はらんだとわかると、誰もいない田のあぜで、石に腹をぶつけて赤子を流したと、元氣なころ言ったことがあった。祖母も、子を捨てる悲しみを胸に秘めていたのだろうか。

お願い

過日首都圏の方たちにお送りした「仕事に関するアンケート」にたくさんの方からお返事があり、すでにお仕事をお世話した方々もあって編集部も喜んでおりますが、最近気がついたことは、思わぬ特技が職業にむすびつくことのできるという面白さです。

一九八号たまき久美さんのわいわいガヤガヤへの投稿、「元“特技”を何とする？」を覚えていらっしゃいますか。日本舞踊というこのどうしようもない（ゴメンナサイ）“特技”が、何と、生きたのです！舞踊の心得のあることが生かせるライターの仕事があること、生きた例もありました。

というわけで、「芸が身を助ける」現代、あなたの特技をぜひ「わいふ」に登録しておきになることをおすすめします。ハガキでも結構ですのであなたの「特技」をお知らせ下さい。住所・氏名・年齢・学歴もお忘れなく。締切はありません。どうぞよろしく、



私は、もし妊娠しているとしたら、祖母が「ゼニがかかるから」と言っただけでも、産むつもりだった。

帰京して診察を受けたときはもう四か月を過ぎていた。体力がおとろえていても、誰がなんといっても、産もうと決心した。

祖母は死んで、私たちはひのえうまの年に女の子を得た。妊娠初期の発育不良

のせいか、その子は弱かった。乳を吐き、体重が毎日十五グラム、二十グラムとへりつづけた。あるとき私は、生かして下さいと、祖母に祈った。

小学校のころ、運動会でも小さくて目立っていた。テストで悪い点ばかりとって、私は責任を感じるだけで叱ることはできなかった。いつも、だまって、ここにこしている子。

中学生のころ、担任の先生に、

「おとなしい子ですから」

と言うと、先生は、

「卓球部の部長をしていますよ、仲間同士のトラブルは顧問の先生が出なくても、部長が上手に解決しています」

と言った。私ははじめて子育てから解放された。

罪の意識から逃れられないでいた私は、今、不思議な気がしている。傍観していられるのである。失ったのちは、静かに、立ち去ったままにしておこう。私はもう私の苦しみにかの人を立ち入

らせることはしない。私は、今、そういう思いをうけいれて生きていける気持ちになった。

その人は私に、これまで学んだどんなことよりも大切な、いのちの貴さ、生きがいを見せてくれた。私は、いのちをかけて人に何かを残すことができるであらうか。人の一生は、長いとか短いとかでその価値がきまるものではない。

私は、誤って、真っ白い画布に赤い絵の具を落とした。私は、その上に何回も白い絵の具をぬり重ね、その赤をかくそうとしていた。

私は今、赤のある意味を知った。その色があるから、白い絵の具をぬり重ねたとき、その画布は不思議な沈黙にも似た深い色を見せるのだろう。それは、かすかに、光りさえ背負うであろうか。

そうやって、未完成の一枚の絵を、私は日々描きつづけていこう。「一本の線も引かざる日とてなかった」ゴッホのよう

ふるさととは静かに

冬の田舎に帰った。山陰の松江である。新幹線を岡山で降り、「やくも」に乗り換えて伯備線を下る。

途中倉敷を出てしばらく行くと、列車は川沿いに進んで行く。車窓に広がる木々の緑の濃さ、水の色深さに目を奪われ、汽車の旅を満喫する。いつの間にか様子が変わるのは新見を過ぎてからである。列車の後方に流れ去っていたはずの川が、進行方向へと流れを変えている。峠を越えたのであろう。そして山々が白くなっているのを発見する。ああ故郷に足を踏み入れたな、としみじみ実感するときである（まだ松江までは特急で一時間以上もあるが）。

遠くの山は薄墨色にけがっている。車

窓近くの木立は細かい梢までびっしりと雪をつけ、白と黒のコントラストを際立たせ、凜冽として立ち並んでいる。山ふところの点々と見える家々の屋根も、雪をかぶって景色の中に沈んでいる。ああ故郷の人々はやはり静かに暮らしていたのだなあ、と胸の中に懐かしさが広がっていく。

表日本に住む人は、雪や寒さに屈託がない。「私、寒さに弱いんですよ——」「裏日本へ転勤するのは、ご免被りたいね」と明るく笑いながら話し合っている。

毎日布団を干せない生活、雪が目の中や首の中にも遠慮なく入ってくる吹雪の日々、雪かきをしないと家から出ていかれないほどの白い朝、そんなことはもう

東京都新宿区 千木 保子



理解を超えているのであろう。

こんな話をする、快適な安全圏にいる人達は「私、耐えられない！」と無邪気に発言する。そして私は彼らと仲良しであるし、今は毎日晴天の続く土地で気楽に暮らしているのである。

でもやはり私は、素直さが無神経に通じるような口調では雪のことを、裏日本の冬のことを語れない。山を越え、白い世界が列車の周りを覆い始め、ときおりサーッと雪片がガラス窓を叩いていくのに接すると、同じ土地で育った友達や、今も住み続けている家族のことが、やさしい心で意識される。

自然が厳しい分だけ、たぶん強く、紛れもなくこの自然を受けて、私達は育ってきたという大きな事実がある。そもそもそれが私達の文化なのだ。

習慣を作り、共有し、伝え続けることになった大きな大きな前提が、こうして目の前に広がってくると、忘れかけていた自分の存在の起点を、久し振りに思い

出すことができたという安堵感が、じわじわと身体の中を染み渡っていく。寡黙な感性の懷に抱き入れられたような気がするのだ。

雪は負のイメージでとらえることが多いし、雪の辛さは私自身がよく知っている。これは片隅に押しやられなかった価値から出発する感覚である。裏日本をそのままの価値として愛しむ心である。

明るく活動的な人達が、声高に自分の風土の過不足を論じ合っている傍で、私達は慎み深く、全てを受け入れてしまっているような感がある。

影があつてこそ光の輝きが美しく、深みが増すように、山陰の陰と陽の対比によって生じる豊かな趣が、いつの間にか人知れず、故郷の人々の心の中に降り積もっているように信じられてくる。

雪景色を眺めながらそんなことを考えているうちに、列車は中海の横を走り抜け、大橋川から穴道湖にまたがる松江の駅に滑り込んだ。



陳さんの君が代

東京都杉並区 海老根紀子

陳さんは流暢な日本語で話している。

「最近日本で電車に乗りましたら、お若い方が、『何とかでさあ』とか、『何とかでよう』などと話していました、大分日本語が乱れてきましたですねえ」などとおっしゃる。私は「はあ、さようでございます」と使いつけぬ言葉で冷汗をかいている。

ここは、台湾の南東部に位置する台東市である。この辺りで手広く商売をしている陳さんは、色浅黒く、金縁めがねで遺手の商人を思わせるが、その口調は穏やかで物腰も柔らかい。戦前、日本が台湾を統治していた時代に教育を受けたので、日本語が上手なのだ。この日、彼は私達夫婦を海鮮料理店へ招待してくれ

た。

私の夫は戦前台湾に生まれ、小学校三年のとき、敗戦を迎えて日本に引き揚げてきた。戦後三十年を経て、夫は私を連れて初めて台湾を訪れたが、そのとき出会ったかの地の人々の、温かくて素朴な人情に触れて以来、私達は台湾を大好きになった。数回訪れるうちに知り合いを増やし、今では三十人ほどもいる。

これらの友人とは当たり障りのない会話をしてきたが、この陳さんには何か別のことを聞いてみたくなった。「経済大国としての日本のありようを、陳さんは如何ご覧になりますか」。陳さんは「私は日本が大好きです。だからこそ言わせていただくならば」と前置きして、

「一時、日本はエコノミック・アニマルと言われましたでしょう。アニマルとは畜生ですよ。精神がないということです。私達は戦前、武士道に基づいた日本精神を叩き込まれました。私の同胞は大和魂を信じて、南の島で日本軍とともに闘ったのですよ。あの精神はどこへ行ってしまったのでしょうか。今の日本はアメリカのほうばかり向いているように思えます。日本に行きまして、商品や看板を見ますと、日本にいるような気がいたしませんですねえ。例えば、チェリーというタバコがごいますでしょう。チェリーは桜のことです。桜は日本を代表する花ではありませんか。なぜ『さくら』と書かないのでしょうか」彼の口調には熱がこ

渡辺恒夫

脱男性の時代

アンドロジナスをめざす文明学
〈男であれ〉という強迫を斥け、
セクシズムに一撃を。2400円 ¥250

上野千鶴子

女は世界を救えるか

フェミニスト神話を拒否し、女と
男の関係を問直す。女性解放の
理論構築をめざして。1600円 ¥250

江原由美子

女性解放という思想

女にとって解放とは何か。リブ運
動、イリイチ思想等の検討を通し
イメージを構想する。1800円 ¥250

国際女性学会編

〈女と仕事〉の本 1

1945-1974 仕事と家庭の両立を
めぐって女たちの苦闘はつきない。
のりこえ進むために。2000円 ¥250

T.ヘラー／矢嶋 仁 訳

リーダーとしての女性 そして男性

女性管理職にまつわる社会的偏見
をやぶり、リーダーシップ研究に
新しい局面を開く。2200円 ¥300

D.ハイデン／野口・藤原他訳

家事大革命

アメリカの住宅、近隣、都市にお
けるフェミニストデザインの歴史
女性たちの挑戦の書。5400円 ¥300

勁草書房

東京文京後楽2-23
☎814-6861 (個)東京5-175253

もっている。

彼はさらに「日本人は『君が代』を歌
いませぬね。どうして自分達の国歌を歌
わないのでしょうか。不思議ですわね」と
続けた。私のほうが不思議だった。植民
地支配者としての日本の国歌「君が代」
こそは陳さんにとって嫌な思い出にちが
いない……と思っていたのだから。

「私は最初に台湾に来る前、危惧してい
たんですよ。昔は支配者だった日本人に、
台湾の方はどんな気持ちをお持ちなのか
と。でも来てみたら皆さん親切で、
親日的なので安心しました」と言う。陳
さんは「私達中国人は、過去のこととは

水に流そうという広い心を持っているの
ですよ」とだけ簡単に答えた。彼の心の
中には過去の日本人に対する思いもある
と思う。だがそれをここでほじくり返す
のは適当でない。私達の会話は他のこと
に流れていった……。

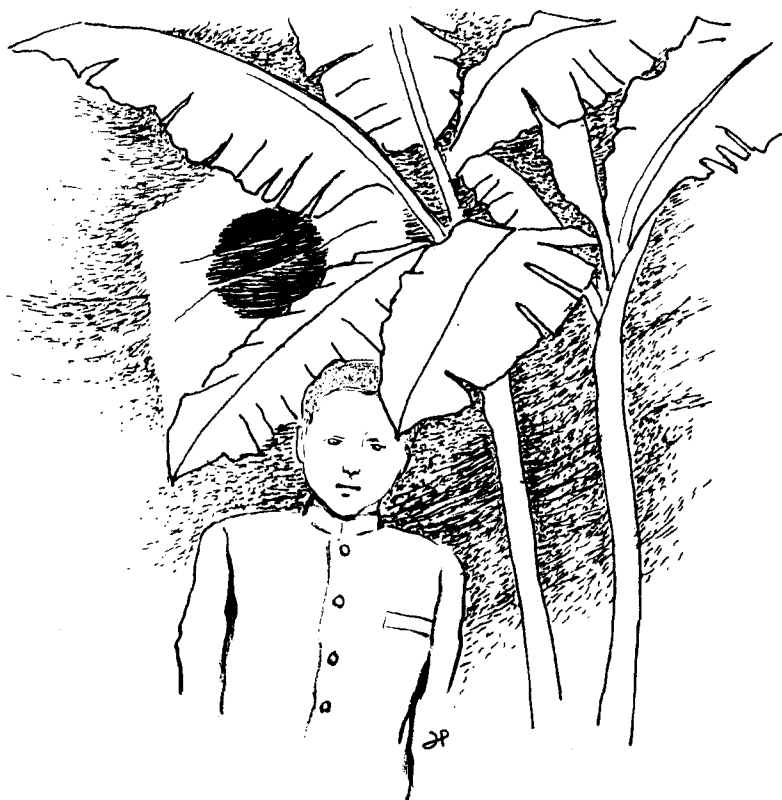
台湾は日本に五十年間支配されてきた。
大戦終了に伴い日本人が引き揚げたとき、
台湾の人々はどんなにほっとしたことだ
ろう。

だがその後、中国大陆での毛沢東軍と
の闘いで逃れてきた蒋介石政権によって、
台湾人は再び支配される側に置かれてし
まった。蒋介石軍とともに大陸から台湾

へ逃れてきた人々は外省人と呼ばれ、現
在は台湾人口の一〇パーセントを占めて
いる。これらの外省人が台湾社会の中枢
を占めることとなったのである。そして
外省人が使用している北京語が公用語と
なった。

北京語と台湾語は同じ漢字を使ってい
るが、読み方が全く異なりお互いに通じ
ない。台湾人は新たに北京語を習わねば
ならなかった。

日本は陳さんに日本語と日本精神を残
して去ってしまった。その後に来たのは
同じ中国人だが異質の人であった。台湾
人、陳さんのアイデンティティーはいつ



になったら得られるのだろう。戦後四十年を経た今、彼が青年期に教え込まれ、素直に信じた「大和魂」と「君が代」は、彼にとってどんな意味を持つのだろうか。

陳さんとの会話は、様々なことを私に思わせた。思想というのはかくも長く人の心に宿っているのだろうか。そして教え込まれれば他所の国の精神でも信じるのだろうか。

私は常日ごろ、自分の頭で考え自立した判断を持つことが大切だ、などと思っているが、これは今だから言えることで、もし私が戦前の教育を受けていたらどうだったろう。お上の言うことをそのまま信じて、国防婦人や軍国の母になっていたかもしれない。このことは、これから考え続けていくことにしよう。

それにしても、日本から遠い南の島で、今でも「君が代」に思いを馳せている人がある、ということが私には不思議でもあり、物哀しくもあった。

(え・早乙女光子)

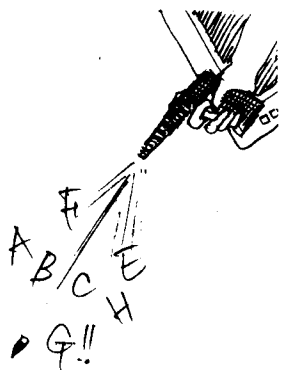
投稿ホットライン——楊枝で重箱の隅をほじくろう！

マスコミむしる

悪ふざけと殺しの すすめ

東京都新宿区 堀内千恵子

英語のリスニングの練習を本格的にやるう、と意気込んで、音声多重テレビを買った。アンテナをふやす工事をしてもらったので、テレビのほうは、特価品をさらに二万円ほど安くしてもらえた。ところが、レギュラー番組は、夕方のニュースが三局と、夜の十一時からもう一度



やるのが一局。あとは、申しわけ程度のものだけ。何だか肩すかしをくわされた感じ。

新聞のテレビ欄を毎日見るようになった。各局とも、一、二週に一度は、映画やシリーズものの二カ国語放送をやっている。昨年十二月から、今年の四月まで

に放送された大部分が、殺しものであった。

最初のうちは、それでも一生懸命に見ていた。簡単に人を殺す場面を見ていると、心が寒々とし、いらいらした気分になる。英語は曖昧音が多くて、ただでさえ聴き取りにくいのに、しゃがれ声の男が、きたない言葉をわめいているのを聴いても、英語の上達にはつながらないと思っ、見るのをやめた。

日本の悪ふざけ番組も、ますますサデイズティックになっていく。作っているほうは、タレントが怪我をしないように、手加減をしているのだから、視聴者にはそれがわからない。子供たちが本気で真似をしたら、いじめられるほうはたまらない、とひやひやする。視聴率がいいから続けたい、というのであれば、悪ふざけついでに、手加減のトリックも、ばらしてもらえれば、いじめられる側の救いになると思う。テレビの影響力の大きさを考えると、テレビ局は一致団結(?)

して、悪ふざけ、殺しのすすめをしているのでは、と疑いたくなる。

もちろん、二カ国語放送にもいい番組はある。「大草原の小さな家」(NHK)、「兼高かおる世界の旅」(TBS)、「野球中継」(日本) など。字幕スーパースーパーの名画は、毎晩でも見たい。

二カ国語放送を聴く人たちは、まだ少数派で、あまり文句を言わないらしい。

国際化が進むにつれて、数は確実にふえていくと思う。時間も夜の八時、九時とか、休日の昼間とかにやってもらいたいし、番組も、欧米の都市のホーム・ドラマ、ビジネス物語など、ごくふつうの番組を英語で聴きたい。日本のホーム・ドラマは、パターン化され、わざとらしくて面白くないが、欧米の家庭生活は、まだ未知である。欧米人の考え方やものの言い方もわかってよいのでは。

それにしても、殺しの場面を見て英語の勉強という、ゾッとする光景が、国際化時代の日本の姿とは。

都合の悪いことは 載せない「新聞」

茨城県北相馬郡 勝浦恵美子



先日のこと。我が家の門も、そこに付いているインタホンも、ささやかなりとはいえ、目に入らぬほどではないと思う

のに、中年の男が、チャイムを鳴らしもせず、門を越え、玄関のドアをノックしざま、ドアを開けた。(一呼吸も待たずに。つまり、ノックしないのと同じ)。そして、いきなり、「奥さんどこ何新聞？」とくる。(彼らはいつも敬語を使わない)。「きゃっ驚いた、急に開けないで下さい」と相手を見つけた私、こんな無作法者に答える筋合いはない、と腹を立てつつも、「A新聞ですよ」と答えると、その男、「あ、そう。よろしく」と、お邪魔しましたでもなく帰っていく。

また、あるときは、景品の洗剤をちらつかせ、「A新聞お願いしますよ」とくる。一体、長年の読者である我が家へ、なんだって同じA新聞から、たびたび、勧誘員がやってくるのかわからない。彼らの顔をいちいち覚えていないが、テリトリーを侵して複数の販売店から来ているのか、はたまた、自分の得意先の確認もせずに、片っ端からドアを開けて、よろしくとやっているのか、いずれにして

もお粗末な話だ。

生憎、我が家は、勧められたとか、景品がついているからという理由で購読紙を替えるようなことはしないのだ。四、五年前、A新聞の取材態度が気に入らなかつたため、夫と私としては抗議のつもりで、別の新聞に替えて数か月暮らしたが、読みごたえがなくて、またA新聞に舞い戻ったことはあつた。いい記事が載つていて面白い新聞をとる。内容がつまらない新聞はとらない。それだけのことだ。

たぶん、読者の大部分は、こうやって購読紙を決めていらっしゃるはずである。だから、読者の獲得合戦は、紙面の内容でこそするのが上策だと思ひ、景品片手に、粗野で無礼な販売員を個別訪問させても、反発を買うだけだと思ひのだが。こんな質の悪いセールス合戦は、仮にも読者の啓蒙を旨とする、天下の全国紙がすべきことではないし、もしするならば、文化人面はおやめになってと言いたい。

一つ の 原稿 から 何冊の本を？

東京都世田谷区 山本 綾子

『風の肉声』遠藤周作著の最初の二、三ページを読んだとき、私は「あれ／＼」と思つた。どこかで読んだ気がする。同じ本を二度買ってしまったのかもしれない。

というのも、そんな経験が何度かあつたからだ。ごていねいに同じ本を本棚の少し離れたところにそれと気づかず並べていたこともあつた。それでもそんな愚かな経験も、大ていは単行本から文庫に入つたときに表題が変わつたとか、単行本が全集に収められていたとか、そう



いった経緯だったので、私は「あーあ、愚か者めが／＼」と自分をなじつた後は、二重払いになつた本代のこととはなるべく早く忘れるようにしている。

この本もその手かなと思ひながら奥付を見ると「初版発行」である。何か「後がき」の如きものでもないかとパラパラと後ろのページをめくつてこの本の「出典一覽」が目にとまつたときには本当に驚いた。

私は遠藤周作氏のエッセイは好きでは

とんど読んでいるのだが、私の読んだ単行本、文庫本名がそこにずらりと並んでいるのだ。つまりこの「風の肉声」という本は八冊の本が一冊になったもので、発行年月日は新しくとも内容は古いものばかりというわけだった。

本気違いを自認し、月一万円以上も本を買いこんでいる私にとってもこんなことは初めてだ。夫は「よくあることだよ」と言うが本当だろうか。

もともになった単行本にだって書きおろしてない限り、新聞や雑誌に書かれたものをまとめたものである。単行本は大抵文庫になる。その上更に細切れにされたものが別のタイトルのもとに新しい本に生まれ変わるなんて、あんまりではないか。一体、著者は一つ of 原稿から何冊の本をものにしようというのか。そのような「新刊本」を出版する大和出版という出版社はどんな神経をしているのだろうか。

「胎教」という強迫

香川県丸亀市 山田 幸子



四月二十一日に、毎日系で放映された三時間ドラマ「天使たちの微笑み」を見た。軽妙なタッチで描く「生命の賛歌」というフレコミであったが、その軽妙さとしゃれたせりふにまぶされた母性讃歌、これこそが制作側の意図であろう。

ドラマ自体は、他愛ないといえはいえある。そして、産婦人科医の森郎（神田正輝）の恋人でキャリア・ウーマンの周子（高橋恵子）が、「子供は欲しいけど、夫のあなたはいらないわ」と、「未婚の母」宣言をしたり、森郎の叔母（富士真奈美）の中年離婚（結局は思いとどまるが）の理由が今ふうの「思秋期の妻」的であったりと、自立願望の女たちを少々揶揄して描いているのはまだしもだ。

問題は、妊娠した女たちの心理状態がそのまま腹の胎児に伝わるという現代の「胎教」である。森郎は、その影響についてホルモンの分泌をはじめ、専門家らしく学問的、科学的な説明を加えるが、

だからといって十か月もの間、心理状態を絶えずベストに保っていられるほど、女たちは仙人や超人であり得るはずがない。

誰しも喜びをもって妊娠を受け入れ、ゆったりとくつろいだ気分で妊娠期間を過ごしたのはヤマヤマだ。だが、望まぬ妊娠にとまどい、中絶しようかと思ひ、悩み、やっと出産に踏み切る女もいれば、仕事を続けていかねばならず、職場の間関係にストレスを感じる女もいるというように、現状は千差万別である。そういう現実を生きている女たちをよそに、母親となる女の心の持ちよう一つで胎児

が健やかに育つのだといわんばかりの「胎教」は、なまじ科学的な説明を背負って登場するだけに、よい女たちの心を重くする。

これまでは、生後一―三年までの母子の絆が大切だと喧伝されてきた。ために、産休明けから職場復帰し、保母など他者の手に我が子を託して働き続けてきた母親たちの中には、一抹のうしろめたい気持ちを含めぬぐいがたかった者もあるだろう。それがさらに、妊娠期間中にまで逆のぼって強調されたのである。「母原病」に続く母親いじめもここまでできたかという思いだ。

もちろん、ドラマでは出産後満一歳までの母子のつながりの大切さも抜かりなく説かれている。だが、本当に女が産みたいときだけ妊娠し、あるいは仕事をしている女も余裕をもって産休に入れ、さらには十分な育児休暇をとって子育てに専念できるほど、この社会は女たちに母性保護の手をさしのべているだろうか？ こうした社会的受け皿もなしに、いい子を産まなければ、いい子に育てなければという強迫観念に母親を迫いたてて、その先に待ち構えているものを想像すると、慄然たる思いがする。

(元・万谷陽子)

からだといのちと 食べものと

定価一五〇〇円
(千二五〇円)

鳥山敏子

子どもたちのからだに生き生きとした鼓動を取り戻させたい。そう願う鳥山先生と子どもたちの学び合いの記録です。

別冊 百姓になるための 手引

定価九五〇円 (千一五〇円)

一足先に農的くらしを始めた人々からのアドバイスや体験談、99人へのアンケート、実習受入れ先の紹介など、「帰農」の流れにこたえる始めての実践書です。

特号 自然食通信27

特価五五〇円

書店で売っています

特集 肉

農場の生きものたちが
みえますか

年間購読料 三三〇〇円(送料込)

ご注文の際は発売元・新泉社で
東京都文京区本郷2-6-10
☎03(816)3857 振替・東京5-78026

自然食通信社

Mr. Max

テクニクの先生、ナウーイ絵を描く。すごい色彩感覚、オレンジのシャツに紫のズボンなんだから。人柄はもうコメディの主演ピッタリ、正気とは思えない。アメリカでは先生は友達。エバッド先生には一人も出会わないけど、Max はその中でもダントツ。でもこの間は、ジョーが授業中に他の授業の宿題をしていたので、出ていけ、と陰悪になった。



マイク
校長先生の息子でマネージャーをしてる
ミュージシャン、こわそうだけど、やっ
ぱり私にはとてもやさしい。※



※だいたい男は女にやさしい。特に私には対等でないので（くやしいけど）やさしい。

お金や（35¢）絵の道具を借りて後日返したら、三人の男性全員が、初めは受けとらなかった。だからアメリカで、ウーマンリブがおこったのだ。

リンダ

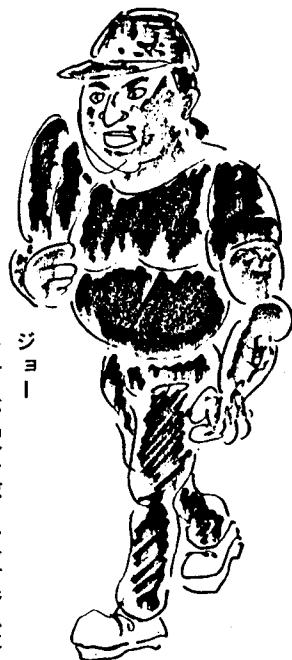
校長先生の娘 受付

顔はすごいけど、私には初めからやさしい。ギョッとするような服ばかり着てる。ツヨい姉ゴタイプ。

ニューヨーク便り⑥

え・文 西田淑子

●アートスクールのフルタイムステューデントになってから、ようやく皆（クラスメイト）から仲間意識をもたれるようになりました。奥さん連中のつきあいの中では会えないような毛色のかかった連中と毎日顔を合わせて、それだけでも結構アメリカを満喫しています。



ジョー

キューバ出身、ボクシングジムに（ヘビ級）通う。いれずみ、ピアス。先生と喧嘩したときは何がおこるかとかわかった。二十歳前後だろうけど、これまでに四回ナイフをつきつけられたことがあるって。ボビーと二人でスポーツカーでやってくる。



ボビー

そりこみ、ピアス三つ（片耳）、部分染め。こわそーだけどやさしい。

投稿ホットライン——物いわぬは腹ふくるるわざ

マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でもの申そう！

子供会は必要だろうか？

埼玉県行田市 小川 由里

昨年度、地区の子供会の役員をした。

何人かのお母さんに「どうもご苦労さまでした」と言ってもらい、ほんにご苦労

だったと自分でも思っていたのに新役員の中の一人、Aさんはこう言ってくれた。

「なんにもしなかったからお金も余っているでしょうって前の役員も言っていたわよ。去年はなんにもやらなかったけど、私達は今年『やろうね』と言っているの

よ」なかなかこうは面と向かって言えないものである。

「あら、私達はつくば科学万博バス旅行を企画して実行したじゃない」と言うところ、Aさんは「あんなの——」と笑った。もちろん、Aさんは行かなかった。

私としては役員の難用だけでもたいしたものだと思っていた。大体、この地区はやはり子供会役員の仕事が多い。

前記のバス旅行以外ざっと振り返っていても、年三度の廃品回収、夏休みのラジオ体操指導、学校へのプール引率。監督、自転車点検といったほかに地区の伝統行事保存会の会費、寄付集め、夜の練習の監督、山車の飾りつけ、後始末、付添いまで引き受けさせられる。自分の子供が保存会にはいつている、いないにかかわらず、である。子供会とは別にして欲しいと何度言っても「前からやってもらっていることだから」。

台風で川が増水して授業が一時間遅れる、などというのも役員に電話がくる。なんでクラスの連絡網を使わないのだ、と腹を立てながら受け持ちの十軒に電話しまくらねばならない。痴漢の立ち番というユニークな仕事もあるが各家庭一回でひと回りするとあとは役員がやることになる。四、五回も役員は立つことになる。

P T Aの各部主催の講演会も参加者割当てが役員にくる。クリスマス会、歓送

迎会は必ずしなければいけない。会長ともなればこのほかにかなりの回数、各種会合に出なければいけないらしい。

ざっと思いつきただけでもこれだけあった。それらを、いやいやでも役員となった以上は、と一生懸命やったのに「なんにもしなかった」と言われるのである。私はこの際、Aさんに私の思っていることを言っておこうと思った。「私はやったのに」という元役員達に伝えてくれるであろう、と確信しながら。

「Aさん、子供会の役員って順番でしょう。やりたくないけど仕方ない、そういう人が多いと思うの。私もそうだった。なにか安くて楽しいことやってみてほしいなんて期待すべきじゃないと思うのよ。その年その年役員のやり方でいいじゃないのかしら。子供が小学校に入学すると自動的に子供会に親ごと加入させられるってことがおかしいと思うわ。私は任意加入にすればいいと前から言っているの。任意加入にして、その中で世話好きの、

リーダーシップのある適役の人を役員に選ぶ仕組みなら期待してもいいと思うんだけど。

大体、今の子供会ってどんな意義があるのかしら。私は上の子のときと今回で二回役員やったけど、やるたび疑問が大きくなるわ。子供を中心に、任せましょうって言ったって子供は踊らないの。なんにも言わない。結局、親が全部おぜん立てして子供に来ていただく、お土産あげて帰っていただくという行事になってしまいうわけ。え？ 子供の親睦？ クラスが違えば隣に住んでたってもう遊ばないじゃない。学年が違えば話もしないわよ。

それでもなんとか遊ばせようとしても、一年から六年という幅のある百人近くが楽しめることなんて普通の主婦じゃ無理なのよ。訓練とか講習を受けていないとね。それに子供達も野球だのソフトだのクラブにはいって日曜ごと練習でしょう。行楽だって家族で行ってるし、私

は、今の時代、子供会っていらんないじゃないかと思っているのよ」

Aさんは思ってもみなかったらしい私の演説にびっくりしたらしく「はあ——、オガワさんて、言える人」だったのね……「とにかく感心してくれてから言った。なるほどねえ、そういう考え方もあるのね。さめてるのね。私なんか子供のためになにかやってあげたいってウズウズするほうだから」「そう、そこなのよね。子供会を任意加入にしてあなたやBさんみたいな人が選ばれて率いていけばいいというのは。がんばって」数日後、Aさんに行き会ったらこう言った。

「むつかしいわね。私が『さあ、今年はなにかやりましょう』と言うと役員の中で『それ面倒じゃない？ 面倒なことやめようよ』とすぐ言われるのよ。だんだん私も意欲失せそうよ」

私はニコニコ聞いているだけ。言いたいことは全部言っているし、下の子の中学入学で子供会とはもう縁切りだもの。

投稿ホットライン——百聞は一見に如かず

観たり聴いたり

映画「ハロー・キッズ」より

神奈川県横須賀市 松本 弘子



三年がかりで宮城まり子さんが製作された映画「Hello Kids!」が「がんばれこどもたち」を観た。まり子さんの「ねむの木学園」はこの四月で十九年目を迎えられるという。

まり子さんの子供たちへのケタ外れの愛情、やさしさ、明るさ、そしてあのファイトは一体どこから生まれてくるのだろうか。まり

子さんの映画を観る度に驚嘆する。「ねむの木の子どもたち」五人を連れて障害者の大会に出席したおり、とにかく子供たちにあちこち見せて、感じ取ってもらえたらと、まり子さんは車イスの子供たちと元氣いっぱいニューヨークの町を歩きまわった。

ハーレムに行くくと、救急車が「どいて、どいて」と音を立ててひっきりなしに走っている。紙クズ、空缶だらけのハーレムには、ケンカと麻薬がいっぱいいるようす。ハーレムの子供たちは劇場前でブレイク・ダンスに一生懸命。アー

ト・スクールで踊る子供たち、ギターを習う子供たちもみんな一生懸命。

セントラル・パークを歩き、ジョン・レノン公園でねころび、大道芸人を見物、野菜市場で買い物、ソーホーの町角に佇み、マジソン・スクエアのスケート場を覗く。歌手に会い、ドラマーに会い、一緒に歌い、叩き、二百五十万人の人でごった返すハロウインのパレードにも参加、そして、ハーレムの汚れきったシャッターをきれいに塗り替え、みんなで楽しい絵を描いて帰国した。

まり子さんは、ブレイク・ダンスを踊るハーレムの子供たちを日本へ招待したいと思い付き、ついにそれを実現させた。

ハーレムの子供たちと「ねむの木の子供たち」が国会議事堂を見物した日、大勢の日本の小学生た

ちに出会う。黄色い帽子の遠足の子供たちを引率する先生は、早く早くとせき立てる一方で、ハーレムの子や車イスの子に関わってはいけないといわんばかり。何の交流も生じぬまま、小学生たちはまるで別世界の異人種を見る如く通り過ぎて行く。どうして一緒に手を取り、おしゃべりしたりしないのだろうか。ただ議事堂を見るだけが目的らしい遠足の大群が次から次へと通過して行く。

ハーレムの子供たちに日本を感じ取ってもらいたいと、まり子さんはお茶席をしつらえたり、新幹線で京都に行き、平安神宮、静かでもみじの葉の美しい寂聴さんの寂庵に連れて行ったり、お能の笛を聞かせたり忙しい。

ある日、障害児たちはみんなで踊ろうと踊りの練習を思い立ち、まず立ち上がることから猛練習に



挑む。まり子さんは一人一人を特別、みんな真剣そのもの、ありったけの力をふりしほって、ついに踊りを完成させる。子供たちみんなが力いっぱい踊る。こうしてみんなが一緒に踊れば

こんな楽しいことはなく、まさに世界は一つ、「平和」そのもの。「平和」はこんなにもたやすく得られるのである。

にも拘らず、世の中には、決して決してみんなと手をつないで一緒に歌おうとも踊ろうとも思わぬ人、相手を憎むことしか考えぬ人、どうしたら相手をやつつけられるかばかり研究している人があまりにも多い。一生懸命生きようとしている「ねむの木の子供たち」やハーレムの子供たちの対極にいて、核の先制攻撃しか考えない大勢の大人たちがなんともしゃくである。どうして彼らは一緒に手をつなこうとしないのだろうか。

この映画をうちの息子たち、何一つ努力せずとも差し当たってたらふく食べていかれる時代において目標がつかめず、無気力、無感動にどうしようもなくなっている

子供たちに見せて、何かを感じ取らせたいと痛切に思った。

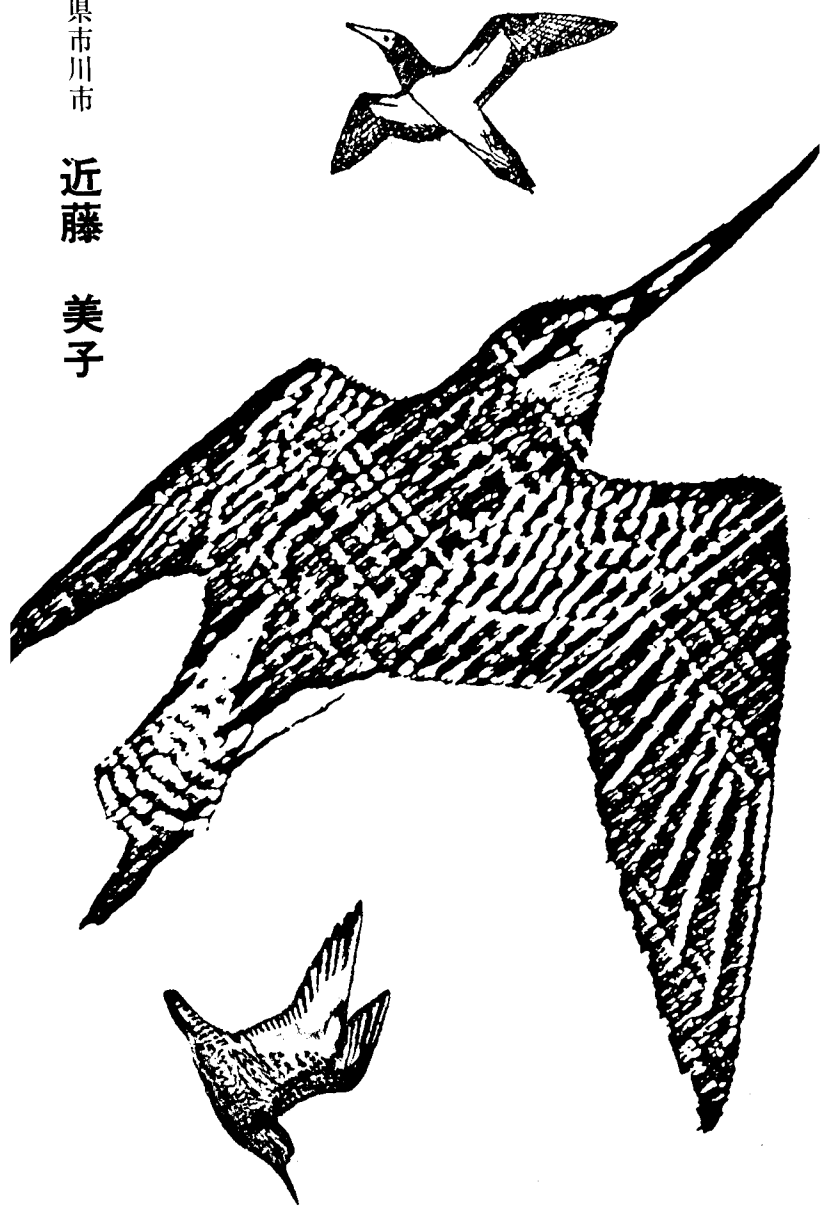
(映画は七月十二日(土)より岩波ホールにて上映、問い合わせTel

〇三—二六二—五二五二)



三宅島の米軍基地

いつも弱い住民が貧乏クジをひく



千葉県市川市

近藤

美子

寝返った自民党村会議員

「村民のみなさん、現在、村会議員の浅沼義人さん、浜島行雄さんに対するリコール請求の署名運動が、再び行われています。」

このリコールはご承知のように、米軍機の夜間訓練場を兼ねる官民共用の新空港建設誘致問題が原因になっています。

しかし皆さん、ここでよく考えただきたいのは、民主主義の否定ともいえる、このようなリコールを強硬にゴリ押ししている人たちは、本当に三宅島の将来を真剣に考えているのだろうかということです。

現在の三宅島は、観光・農業・漁業、どれをとってみてもこれ以上発展する見込みが少なく、若者は島を去り、どんどん人口が減って、さびれていくばかりです。そのうえ、もし島の生命線ともいえるべきYS11の就航廃止といった事態が現実となれば、島はたちまち存亡の危機に

迫いてまれます。

浅沼さんと浜島さんは、このような島の将来に心を痛めて、昨年末のリコール署名運動で苦しい目に会われたときにも敢然として『新空港問題を正しく理解しよう』と皆さんに呼びかけてきました。

三月の定例村議会でも、二人の議員は、村の置かれている現状を考えずに説明会を開くことさえも一切許さないという寺沢村長に対して、島の行政をあげる長としての資格に疑問を投げかけ、島の将来ビジョンを切々と問いたしましたが、その真剣な態度は私たち多くの村民の心をうちました。

現在では、説明会を聞いてから態度を決めようという議員が増え、また、阿古地区につづいて伊ヶ谷、坪田地区にも『考える会』が誕生し、ひきつづいて神着地区・伊豆地区にも『考える会』が誕生間近です。このように新空港問題につ

いて正しい知識を持つ必要があると考える村民は次第に増えつつあります。

正しい情報を知り、自由に意見を表明し、自ら判断を下すことができるということが自由で民主的な社会の基本原則です。説明会を聞いて正しい理解を深め、新空港問題を村民一人ひとりで考えていこうと呼びかける浅沼、浜島両議員を、問答無用の形でクビにしようとするリコールは許されるでしょうか。

皆さん、署名する前にご自分でよく考えのうえ、この署名は差し控えるようお願いします。リコールを少しでも疑問に思ったら、勇気を持って署名を断わってください。

また、ご本人の意志に反して、署名を強制されたり、知らない間に署名させられているようなことも考えられますが、みなさんが署名した名簿は、一週間の縦覧期間を定めて一般に公開されますので、『署名簿縦覧』のときに確認して下さい。

自民党三宅支部

自民党三宅島振興開発推進本部」

これは、私が三宅島滞在中の三月二十九日の夕刊の折り込みである。自民党の宣伝カーがまるで右翼ながら大きな声でリコール反対を叫んでいる。

住民運動でリコールの成功した例では、返子の米軍住宅問題が、記憶に新しい。今、三宅島は米軍の夜間発着訓練飛行場建設で大きく揺れている。

前述したビラの二人の村会議員は、建設反対を唱え、選出されたたん一八〇度身をひるがえして賛成派になってしまった。怒った住民がリコールを請求するのはあたりまえのことなのだ。

小さな村では、議員を選出する際、家族はもちろん親戚や知人が皆で推す。今では両議員の親戚一同怒ってしまっているというから、これからいったいどのような親戚づきあいをしていくのだろう。村民が選んだ議員が村民をうらぎったのだから、今度は村民がリコールして、自分達の議員を選び出すのは、あたりまえ

のことである。外から来た自民党がリコール反対を唱えることこそ本末転倒とい

繁栄をエサに空港建設を

もう少しビラについて見ていくと、観光も農業も漁業もどれをとっても発展する見込みがない。だから米軍基地を作る、と言っている。

発展する見込みをなくしてきた自民党政治に対する自らへの反省は少しもない。それどころか過疎に追いやってから、他所でイヤがられる施設を押しつけるという、いつものマッチポンプ政治をここでも強行しようとしている。

さらに三宅島には数多くの民宿があり（未だに大資本による超高層ホテル街になっていないところがすくわれる）若者や釣り客、家族連れ、女同士ののんびり旅行客があちこちで見られる。アシタバ、フキ、キクラゲ、サトイモは、農業におかされることなく安心して食べることができ、お酒のつまみのクサヤや磯でとれ

うものであろう。

るセ（亀の手）の味噌汁は潮のかおりがたまらない。いったいどこを見て島の現状について言っているのだろう。

大型農機具を畑に入れ莫大な借金をかかえ、農薬まみれの野菜に着色料をつけ、一年中食べられるように太陽に当たることのない野菜をつくるのが、発展なのだろうか。冷凍された魚の目なんてくぼんでしまっ、ひと切れ四五百円もする切り身をスーパーで買ってくるのが発展といえるのだろうか。

潮の引いたときに取ってきたセが次の朝には味噌汁の具となる。朝、裏山で取ったアシタバ（ミツバに似た緑葉色野菜）が夕飯時にはゴマ和えになる。特産のキヌサヤエンドウをはじめ、シイタケ、キクラゲ、フキは食べきれないほど取れるので民宿の宿泊客に配っている。三宅島

には、農業・漁業のこれ以上の発展（＝破壊）が必要なのだろうか。

たまたま乗ったタクシー運転手はこう語る。

「今までだって何度も噴火があり、そのたびに島民は乗り越えてきた。埋まってしまった家の借金は二十年でも三十年でもかけて必ず返す。島に米軍基地は絶対につくらせない。お金を持ってきたってだめだ。いったんつくってしまったらおしまいだ。はずかしい話だが戦争中イモばかり食べていた。それでも生きてこれたんだ。これからだって島でとれるイモだけ食べてがんばる気でやればなんとなかる」

彼はその晩仕事が終わったらリコールの署名集めに回ると言っていた。

「八五パーセントの署名は絶対にとれる。自民党がどんなにリコールを反対したって、ここは彼らの島ではないんだから、勝手なこととは言わせない。ええ、絶対勝って信じてますよ」

彼の語調は力強い。お年寄りの中にはとりあえず説明会を開いてみても良いんじゃないか、と言う人もいるようだ。これはまさしく自民党の思うつぼで、作るかどうかの説明会ではなく、どう作るかの説明会である。島民に説明して反対されればやめましょうという段階ではもうないのである。政府は、三宅島に夜間発

天災から人災へ

三年前の大噴火で家をなくした住民は、二年間ほど仮設住宅に住んだ。その後新しい住宅に移り住み、学校も完成した。

一人の死者も出さなかった島民を苦しめた天災は、今度は全島民を苦しめる人災にとって変わったのである。

民宿を二十年やっている阿古地区のおばあちゃんは、こう語る。

「噴火から三年たってやっと新しく建てた民宿も軌道にのってきたかと思ったら、今度は、基地建設でしょ。ここいら一帯全部立ち退き区域なんだもの、ひどいで

着訓練飛行場をつくるのだ。そのためには島民を、だましましたし既成事実をつくりあげていくしかない。あとは力で立ち退かせるまでだ。

四月九日の厚木訴訟でも明らかのように、できてしまったら、あとはどんな苦痛も、お国のために耐えるしかない。

すよ」

また他の人は、

「なんでも米軍機が飛ぶ音は、トラックが道路走る時の音ぐらいだってテレビで言ってたけど、そんなこともあるもんかね」

軍用機の音がトラックと一緒だとは聞いた誰が言ったのか調べることはできなかった。

私はかつて沖縄で空が割れるような音を出しながら飛んでいく米軍機を何度も見た。その音は旅客機など比べものにならないほどだ。

軍機の姿が見えないうちから爆音がして、頭上を通り越えていく時は、となりの人との会話もできない。それを三宅島一七五〇戸五千人の人を犠牲にがまんしてもらおうというのだ。

三宅島島内をぐるっと回ってみると、空港建設反対派の手書きの看板がたくさん目につく。誘致派のプリントされた看板もあったが、特に飛行場予定地の阿古地区に多く、まゆつばものが多い。島内一周して目についた看板を紹介してみよう。

まず目につくのが各戸の玄関に張ってあるプリントしたもので、雨よけにビニールで包んであるものやガラスの内側から張ってあるものもある。

「防衛庁、自民党関係の方の訪問 おことわり」

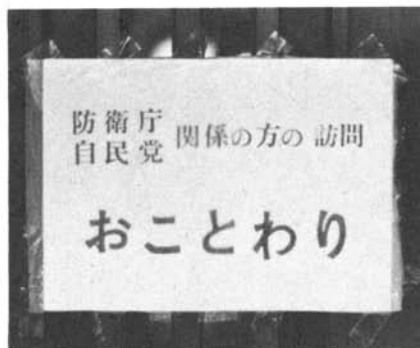
以下、手書きの立てかんである。

「自民党の島ではない

我らの島だ

反対する会」

「大多数の島民は反対なんだ。反対だから説明きく必要ないんだ。これが反対島民の意志である。全国できらいているものを何が三宅島だ！」



爆音、危険、基地の島。

子孫に残すものは、それでいいのか、多数意見を尊重してほしい
基地化絶対反対

反対の会坪田支部」

「三宅は昔から噴火と戦ってきた島
地道な再建をめざそう

防衛庁のアメをもらっても子供は喜ばない！

反対する会」

「真実を知ろう

新空港ではなく

米軍基地だということを

米軍基地反対」

等々、反対派のたて看板は、三宅島の住民の強い意志が感じられる。自民党は、官民共用空港は島を発展させると言っている。しかし地元の人々は、新空港は米軍基地であり、島をおびやかす以外の何ものでもないことを知っているのだ。

現に四月七日、空母ミッドウェーの艦載機部隊「第五空母航空団」の所属機、電子戦機E A 6 B（プラウラー）が墜落した。三宅島から二十キロしか離れていない海上であった。基地ができる前からこの始末である。基地ができてしまったら、いったいどうなるのだろうか。

今回は海上墜落ですんだが、次は民家を襲うかもしれない。乗員は全員、海上自衛隊に救助された。夜間訓練中、民家が襲われた場合、果たして自衛隊は、住民を助けに来るだろうか。昨年の日航機墜落事故のときのように、夜間だから出動できないと言って住民を見殺しにしないだろうか。

苦しむのはいつも弱い人々

前述したスローガンは全部反対派のものである。次に自民党および賛成派の看板を見てみよう。まず、どこにでもある緑のステッカー状の一文。

「まず、新空港の説明会を聞いてみよう」

そして、ほぼ正方形の看板でどこにも見られたものが次にあげるものである。

「新空港の説明会を聞こう」

どちらもとにかく住民に説明会を聞かせようとしている。

次に組織ごとの立てかんを見てみる。

自民党三宅島支部

どうしてこんなに住民を苦しめる基地が、三宅島に必要なのだろうか。どうして、どこもほしくないという米軍基地が、日本に必要なのだろうか。村宮の島内観光バスのアナウンスは、「三宅島は東京のオアシス、観光の島として発展しています」といつていた。オアシスに基地は似合わない。

「飛行コースは波の上

住宅地域は飛びません」

「米軍は常駐しません

年間七十日前後の訓練日数です」

自民党三宅島振興開発推進本部

「島民が定着できる

すばらしいふるさと三宅の建設を」

「新空港・民航ジェット化で

豊かな島を築こう」

三宅村の将来を考える会

「デマにまどわされず 自分の目で耳で

国の説明を受け 確かめてみませんか」

以上五種類の看板が島南部を中心に立てかけてある。基地予定地の阿古や坪田など南部には、すでに自民党の毒牙が伸びているが、神着、伊豆、伊ヶ谷の北部は、ほとんど反対派でかためられている。誰もがイヤがる空港だが、がまんしてほしい、という文はどこにもない。

空港をつくれば三宅島が豊かになり、すばらしい村になるのなら、何も七百亿円の金を用意する必要はないのである。

「デマにまどわされず……」などと言いながら、実際に住民をまどわしているのは、自民党のほうなのだ。

初めにあげたビラの中で、YS11の就航廃止についてふれている。それについてあるタクシーの運転手は、次のように語った。

「飛行機がなくなったら船があるさ。もしプロペラが飛はないっていうんなら、それに替わるものが出てくるよ。今までだってそうだったんだから。今では、滑走路が短くても飛べる飛行機ができたって

いうじゃないか。「飛鳥」のことか? 筆者注) そういうのが来るかもしれない。



おどかしなんて我々には通用しない」

このように伊豆諸島のひとつ三宅島は、米軍基地建設に昼夜、悩まされている。

千葉・市川に住む私にとって三宅島は、おとなり東京都のことなのだ。新聞や雑誌で三宅島のことが報道されるたび、一市民として何かしなくては、と思いがながらも何をしても良いかわからなかった。そこで、とりあえず現地に行つて、見てきたわけだ。

厚木基地から三宅島へ米軍が移ったからと言って、日本からなくなったわけではない。三宅島以前の候補地である千葉県の海上自衛隊下総基地での反対運動が成功したからといって、爆音に悩まされる人がいなくなったわけではない。三宅島の発展のためといって基地をつくろうとしている防衛庁・自民党が、実際三宅島に住んで米軍に苦しまされるのでもない。いつも少人数の力の弱い住民が、貧乏クジをひいてしまうのだ。

市川に住む私にとっても三宅島問題は

他人事ではない。いつ同じような立場に立たされたいとも限らない。知らないうちに、知らないところで、日本じゅう軍事化が進められてしまったら、気がついたときには、とり返しのつかないことになってしまふだろう。三宅島に気をとられていううちに、他の所に米軍基地をつくってしまうかもしれない。常に目を光らせておく必要がある。

一般市民が、特に私には直接関係ないと思っている私を含む主婦たちが、「軍国化ノー」の声を大きく出していかなくてはならないときが来ているように思う。三宅島は、本当に静かですばらしい島だ。

「こないいい島ないよ」と島民が自慢気に言うのを聞くと、ふるさとを持たない私には、うらやましくさえ感じる。いつまでもこの言葉が聞けるように、三宅島米軍基地反対運動を応援していきたい。

投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

わがアルバイト体験記

長野県長野市 岡村 和代

四月からアルバイトとして働いている。

仕事は書店から返品されてきた書籍の仕分けと整理だ。汚れるもので、エプロンをつけ、軍手をしている。まさにワーカ―（労働者）だ。

プライドの高い、そしてお金の苦勞を知らない奥さんには決して務まらない仕事だ。しかし、私は精神的には解放されている。「養われている」という負い目がなくなっただけでも有り難い。

今の職場は、アルバイトという身分もあってか、皆、とくに意地悪でもなければ、とくに親切でもない。私自身、一時間いくらで自分の労働を切り売りしているだけと割り切っているから、気は楽だ。病氣の人や、子供が小さい人、老いた親御さんの面倒を見ている人など、どうしても働けない人は別として、子供がある程度大きくなり、健康な人は、自分の食べる分くらい稼いでくるべきだと、私は思う。

それが足を地につけたまっとうな生活ではなからうか。

確かにパートやアルバイトの労働条件は悪い。それならば、正社員だった二十代のころに結婚退職や出産退職をしなければよいのだ。石にしがみついても仕事を捨てない女性達がふえれば、社会の流れは変わるだろう。

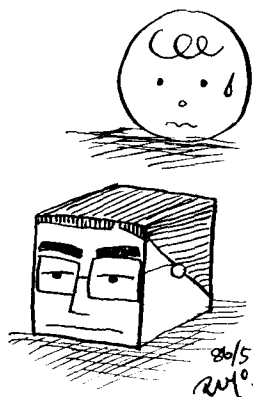
「自立」とは肩ひじ張って求めるものではなく、働き続けた結果、得るものではないだろうか。

マン・ウォッチング

自分の顔に責任を持って泣かせる男の物語

理系の男を 夫に持てば

東京都国分寺市 前田 信子



私は、夫の会社関係の人に妻という資格で接するのは大嫌いだ。挨拶、いや電話の取り次ぎさえおっくうに思っている。ところが、夫と同じ会社に勤める人の奥さん——夫同士が親友であれ、顔はおろか名前さえ知らない間柄であれ——と話すのは、たいそう楽しい。なぜか？ それはもう話が合うからである。

大体、高尚な次元での話は別として、普通のレベルの話で、「そうよ、そうよ、そうなのよ」と、お互い意気投合し、相手の中に自分を発見することは、どんなに楽しく、心安らぐことか……。しかも、

それが人の悪口のようなちよっと他聞を憚られるようなことならなおさらである。

悪口を言いかけて「でも、それはねえ……」などと言われては、こちらも立つ瀬がない。だから、悪口ばかりは「そうよ、そうよ、そうなのよ」という答えが必ず返ってくるという確信を得て、初めて口に出せるのである。そして、彼女らの場合、まずはこの確信を持って大丈夫なのである。夫の悪口を話題にしたときには——。

さて、夫の悪口——というのは、言いかえれば夫に対する不満である。アルトマンで見つけた夫ではないので、理想とはほど遠く、不満は数えあげればきりがない。しかし、それはあちかも同じであろうから、われ鍋にとじぶたということでも問うまい。と、思っではいても、やっぱりどうしても言いたくなことがある。新婚早々、

「ボーナス出るから、何か買ってあげるよ。何がいい？」

「うん、別に。いいよ」

そうは答えたものの、やはりドキドキ、ワクワク。何がもらえるかなと、期待に胸ふくらませる。ところが待てど暮らせど、一向にリボンの包みはお出ましにならない。やがて、しびれを切らせ、しかし遠慮がちに、

「あの……」

ところがその答えたるや、

「え、えっ／＼ そんなあ。あなた『いいよ』って言ったじゃない」

この話に始まり、我が家では飽きもせずこのパターンを繰り返す。

たとえば、約束の帰宅時間に二時間も遅れてTEL。

「悪い／＼ 後、三十分したら帰る」

「もう、いい。お腹すいた。先に食べる／＼」とガチャン。そうは言ったものの

「三十分か」と帰宅を待つ私。ところが一時間過ぎ、二時間過ぎ、今日が昨日になったところ、やっとご帰館。

「えっ。まだ食べてなかったの。ごめん」

先に食べると言ったから……」

と間拔けた顔でのたもつ。馬鹿／＼ 阿呆／＼ 何度同じことをやってるんだ。いい加減気がついたらどうなの／＼ 無論、

「いい加減気がついたらどうなの」とは、私にも言えることなのだが……。

兎にも角にも、我が家のけんかのクライマックスは、

「一体、あなたは、僕にどうしろと言うのか」

と、悲しげに言う夫、それを聞いて、

「あゝあ。全然分かってないな——」

と、ガックリしても言う気力も失せる私——という構図なのです。

とにかく、こういった話が、同じ会社の奥さん方には、よく分かってもらえるのです。

「それはあなたのわがままよ」と諫言されることもなく、「そうよ。そうよ。そうなのよ」と共感してもらえます。

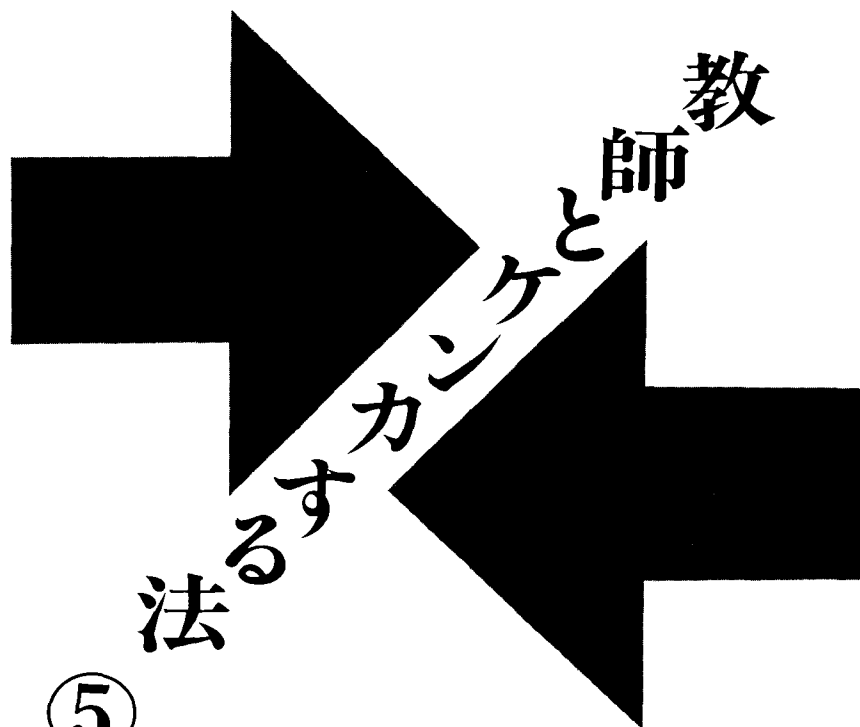
「そうよ。本当に1+1=2の人なんだから」

「心のひだ？ とんでもない。ツルツルテン、一点の曇りもないわよ」そして「理系の男だから仕方ないわね」ととどめを刺す。

理系の男——そう、確かに我々の夫は、物理屋、電気屋、機械屋といった、私など文字式としか見えない数式とやらを、いじっている人間です。 \int を「はら、Sがあくびしている奴」、 Σ を「Mが寝ているの」と表現する人種とは、およそ違う世界に住む人間です。

しかしそのことが人の心を読めない説明になるでしょうか。理系の人間が複雑微妙に屈折した心理を分からないと短絡するのは、寺田寅彦はじめ湯川、朝永氏に申し訳ない。森鷗外、北杜夫はどう解釈したらいいのか。

しかし一方、亭主が同業の細君とこの点においてこうまで共感しあえるという事実も無視できない。理系であることと彼らに対する我々の不満との間に因果関係はあるのだろうか。



⑤

東京都練馬区

門野 晴子

学校タイヤキ工場

「服装の乱れは非行の第一歩です。高校生らしい（『中学生らしい』）正しい服装を絶対に守っていただきたい。靴下は白の無地かワンポイント、制服の下は校章入りのカッターシャツ以外はダメ、その下のＴシャツは文字や絵入りはダメ、カバン・袋も校章入りに限ります。靴は白か黒、色の線入りは認めません。ご家庭で十分に注意してください」

私は担任、副担任に申し上げます。

「先生、いっそのこと、校章入りのブラジャーやパンティも作ったらどうですか」
何ということかを、と男教師どもは絶句したが、私はカゲキに言ったのではない。娘がカッターシャツの下にピンクのブラジャーを彼らに指摘され、ふくれ面で帰宅したからだ。

「何色ならいいって？」「白か肌色だって」「よく見ているよなァ。ドスケベ」
頭のテッペンから足の先まで、何もか

息子が高二のとき、色も形も制服とほぼ同じズボンを、スーパーで半値で見つけて着ていったら、生地の違いで担任が見破ったのだから、スゴイというほかはない。どうしてもその着用を認めないので、私はねじこんだ。

青白いインテリふうの顔に冷やかな笑みを浮かべて、中年の男教師はドスをきかせた。

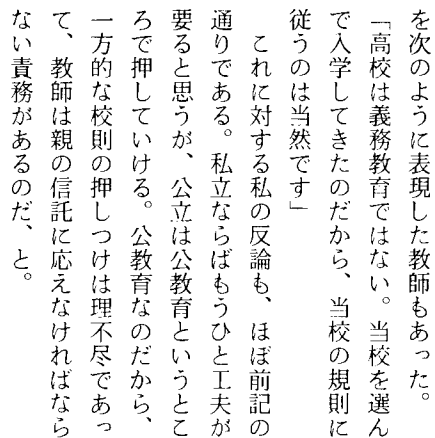
まさにハードボイルド！ 「伝家の宝

「何か間違つてんじゃないの。あんたたちが学校やってて、お願いして入れてもらつてんのじゃないのよ。私たちの税金で学校を建て、教師を雇い、子供たちの教育を信託してるんだ。つまり、教師は公僕なの。子供のために学校があるんで、学校のために子供があるんじゃない。教育の主体は子供なんだ。子供の学ぶ権利を代行するのが親。信託は無条件ではない。親は子供の権利を守つて公教育にモノ言う権利があるの。」

彼は立ち上がり、裁判官のようにおもむろに「判決」を下した。

「お母さんは、人間としてバランスが取れていませんな」

当校の数少ないエリート教師だという彼の、あまりに教養あふれるコトバに接して、私はズッコケた。また、同じこと



例外を許さない世界

校則のあれこれについては回を重ねたので、今回は服装＝制服に関して述べたい。

このころ、大阪で制服論争が再燃してマスコミを賑わしたが、それはかつての制服か私服かの教育論争ではなく、詰衿かブレザーかの、制服を肯定した趣味論争に墮落していた。ブレザー派の主張は「わが校の生徒とすぐわかるから非行防止になる」というもの。斑鳩の高校も紺のブレザーに赤いネクタイで、校長はこの主張と同じことを言ったものだ。

私は朝日新聞の声欄に連日載る詰衿かブレザーかに業を煮やし、大阪本社に投稿した。

「そんなに『わが校の生徒』を見分けたいなら、シマシマの囚人服にしたらよろう」

これはボツになりました。ワハハ。

「細かいところまで規則づくめでいやや

ねえ」と言う母親たちも、制服には何ら疑問を抱かないほど当たり前になってしまった。もし制服を拒否したならば、「義務教育ではない高校」が入学を許可するだろうか。それを試す勇氣は私にはなかった。いまの私自身が高校に行くのなら私服を貫くが、高校に行くのは子供である。格別強くも賢くもないわが子が、親のケンカ好きのために学校で孤立するか、



入学を拒否されるかするのは、迷惑の上もあるまい。

義務教育ならば（高校も地域によっては？）やろうと思えばできる。わが子の東京時代は小学校は私服、中学校は制服だったが、娘が小五の終わりに転校した斑鳩は制服だった。あと一年ちょっとだからと私服で通い出すと、私は校長に呼び出されたのだ。

「公立の小学校で制服ですか？」

「制服ではありません。標準服です」

「あら、担任は制服と言いましたよ」

「どうも徹底してなくて困ります」

「標準服って何ですか」

「モデルがあって、それに準ずならその通りでなくてもいいのです」(ウソコケン)「どういうモデルですか」

「上着とスカートかズボン、色は紺です」

「紺に準ずる色は無数にあるし、上着とスカートに準ずる形ってほとんどそうでしょう」

「それがややこしいので、親ごさんたちか

「統一してほしいと要望がありました」「アンケートでもお取りになって？」

「いえ、そこまでは」

「すると、校長先生の要望に合った親の要望ですね。でも制服は、教育基本法の『自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成』という教育の目的に反すると思いますか？」

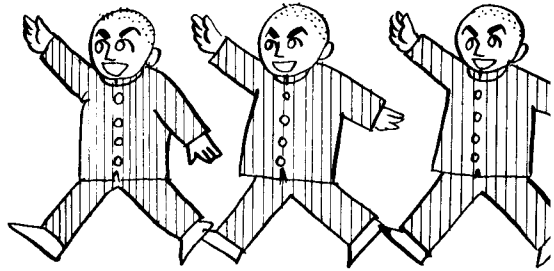
「単なる服装の問題ですよ」

「同法には『教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならぬ』とありますけどね」

「例外を認めます」

例外を許さないのは、子供の世界のほうだった。娘は私服で闘い続けたが、中学進学に際しては、これ以上目立つのはイヤだからと制服にしたにもかかわらず、私服と東京弁の「前科」により、リンチであざだらけになって帰宅した。

育ち盛りの子供たちを、詰衿やネクタイで首をしめつけたがるのは、しめつけ教育の象徴であろう。さまざまな規則、



2014/5

さまざまな指導が子供たちへの憎悪をにじませていて、私はゾッとして教育者の顔を見つめてしまう。教育者の狙いが統制された軍隊であるのは、千葉や愛知の「先進県」の例が語る。それに向かって少しずつ巧妙に、画一化の美学を推進するミニ・ヒットラーども。

斑鳩の親友Kさんが、小学校PTAで

の校長の話にのけぞって拙宅にかけこんできた日。

「制服の細部まで統一して、まだ満足しないんやね。帽子をふたつ、いきなり出して、どっちにしますか、だって。帽子が必要かどうかの話し合いはあらへん。

私、たまりかねてね、帽子を決めてもかまいませんが、買う買わないは自由にしてください、と言ったの。そしたら校長、何て言ったと思う？『そんなことしたら帽子屋さんが困ります』だって」

「ワハハ、ワイロもらってますって白状したようなもんじゃないか」

女ザカリふたりは笑い転げ、そして、深く沈黙してしまった。親が子育てにオトシマエをつけれられない大きな力の介入とうろろの斧にすぎないモノ言いに無力感が襲いかかる。

（思春期カウンセラー）

（え・田井亮子）

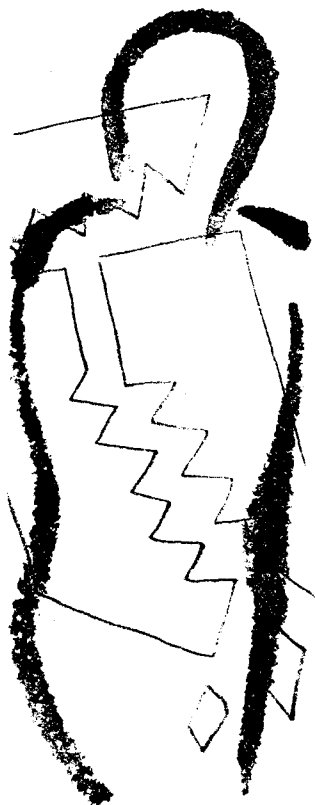
投稿ホットライン——笑う門には福来たる

ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば——ああしんど!

家庭内離婚はここにも

神奈川県 K・N



昨日久しぶりに婦人科の病院へ行って避妊リングをとってきました。三十歳で二人目を生んでからずっとお世話になってきたリングです。二、三年目ごとに新しいのと交換して四十四歳の今日まできました。でももう必要がないのです。リングを入れていない理由がないのです。

私達夫婦はただの同居人、主人は私には一言もクチをききませんし、最低必要なのはメモにかいて渡すだけです。もちろん性交渉ありません。こういう状態がこれこれ三年ちかくになります。どうにか生活費は入れてくれますし、帰宅は十二時すぎですが、毎日帰ってきます。私はただの同居人というか、洗濯婦というか雑役婦というか、外見だけではどうにか夫婦という体裁をとっていますが、中味は、まったくの他人です。

こういうのが昨今はやりの家庭内離婚というのでしょうか。我ながら陰惨なことでと、寒気するような気がします。どうしてこんなことになってしまったのか、

理由はいろいろあります。実家の父の死、主人の仕事のこと、そしておさだまりのお金のこと、主人の母とのこと、その他もろもろ……結果として無言の夫婦になりました。人間っていったんいやになると、相手のすることなすこと、なにもかもがいやになるものですね。いうならばアバタもエクボの反対——。

避妊リングをとった、ということは、もう私達が夫婦としてもとに戻ることはありえない、男と女としてはもう終わり、ということなのです。

強制されたり命令されたりして結婚したわけではないのです。それでも恋愛結婚です。それでもこのザマです。一言もクチをきかず、黙って帰り、黙って家を出て行く主人を見るとアンタンたる思いがします。真剣に離婚を考えることもあります。しかし、中学生、小学生の子供のことを考えると、やはりためらいいます。私に意気地がないのでしょうか。子供二人かかえて四十四歳の中年のオバサン

にどれほどのことができるか……。それでも別れる人は別れます。要するに私に勇気がないのです。今のこのムナシイ生活をなんとかしなければと思っても、もう一步ふみだして行く勇気がないのです。いかにムナシイ日々であろうとも、がまんしていれば夫婦という外見だけは保てる、衣食住にはことかかない、そういうずるい打算が私にあるのでしょうか。要するに私が意気地がないのですね。

ファミリー・イン・ブルー アフター・グリーン

——四月一日の二本の電話——

東京都 K・T

何の話から、こうなったのか思い出せない。とにかく、一本めの電話は姑とのやりとり。「……私もあなたも、夫の収入だけで生活しているんですから、ねえ。健康にも気を配って、気持ちよく仕事してもらえように心がけなきゃ、ねえ」その言葉を聞いた途端、姑には決して

実家の母に言わせると、競輪、競馬をやるわけでなし、他に女の人がいるわけなし、サラ金に手を出すわけなし、飲んで暴力をふるうわけなし、そういうひどい亭主と比較したら、どれだけましか、といえます。しかし一言の会話もなく、一片の愛情もなくひとつ屋根の下に暮らしているのもこれもまた救いようのない地獄なのです。

言えない反論がワツと胸の中で大きくなる。(したくしてしている専業主婦じゃないこと、よくご存知でしょうに。それに、私がちょっと主婦の仕事以外のこともしようものなら「私は子育てに手抜きはしませんでしたよ」と、私に妻・母以外の部分を持たせたくないのは、どのど



なただけでしたっけ)

(私は、あなたの息子さんの給料袋には
れて結婚したわけでも《大体、そんなに
部厚い袋じゃないでしょう》、給料袋の
ために、私は彼と楽しく暮らしているわ
けでもありません)

反論を手短かに言えば、こんなところ。
「ハア……ハイ……」と生返事をして受
話器をおいたあと、一挙に「ファミリー
・イン・ブルー」の気分。

この気分、何とかしなくちゃ。
そうそう、今日はエイプリルフル。

(このごろ、何だか四月一日も騒がれな
くなっただけ、娘時代は家族でバカなこ
と、したっけ)

そして私は、かねてからの計画を、実
行に移す。

「もしもし、あ、ボク? (弟のこと) お
かあちゃんいてない? 今日は四月一日
やから、チョッとひっかけよか、と思って。
何て言うつもりかわかるウ?」

「おかあちゃんに、『三人め、できた』
って言うんか」

「えっ、なんでそんなんわかるン。もう
離れて五、六年もたつのに、あかんア。
ボクに見透かされるようでは」

「おかあちゃん、言うでエ。『ええっ、
アンタ、どないするん』って」

「そうかなア、言うかなア (と私、うれ
しげ) もうちょっとしたら、またかける
わ。ほんなら、ネ」

約三十分後、再び電話をする。

「もしもし、あ、おかあちゃん。あのね
え……実はねえ……。私、三人め、でき
たんやけど (困惑の余韻) ……」

「三人め? 生んだらええがな」

「生んだらええがなって、そんなア」

「電話もかけてこんと……。生んだらえ
えがな三人ぐらい」

「(これはマズイ!) エへへ、今日は四
月一日。エイプリルフル。うそ!」

「何やあ。そやけど、あんた三人ぐらい
生んだらどうや」

「それは、もうええの! 私も彼も、そ
れだけは一致してるんやから。絶対、二
人って。さっき電話して、ボクに、おか
あちゃんひっかけるねんけど、何て言う
と思う、ってきいたら、あの子『三人め、
できた』って言うんかっていうてたわ。

おかあちゃんが『あんた、どないするん』
ってきつと言うで、って言うてたけど、
そこははずれたわ」

「まあ、電話もかけてこんと、そんなと
きだけ何か言うてもろても、こっちはし

ようないから、と思て」

私は再びコレハイカンと話をそらし、先日あった、何十年ぶりの母の同窓会の様子をきく。「私が一番若かった」だの「男の子が三人も四人も私のこと好きやってんて」と母は調子にのり、私もソーデショ、ソーデショと相槌打つうちに「音沙汰なし」への怒りもとけ、そこはそれ母娘。

電話を置いてから、主人の実家へごきげん伺いは忘れないのに、「ウチのほうは、わかってくれてるから」と何週間か放って置くとの有り様。

ごきげん伺い、と言えば他人行儀すぎるけれど、もう私は、時折は自分の父母のことも気になければならなくなつたのかナ、という感慨一つ。

そして、姑との電話の口直しが母との楽しい電話であるとは、という感慨も一つ。

古い形の「嫁」や「娘」を私の中に、もう一度発見して……。

しかし、四月一日、私の天気図。
ファミリー・イン・ブルー

ローン地獄

今朝、息子が「ちょっと、昼めし代貸してほしいねん」という。給料日まで、

まだ半月もあるというのに、早くも借金の申し込みか、と腹が立つ。「借金をすこしも返してくれへん人に、もう貸されへん。一万円は無理や、三千円だけやったら貸せるけど」「なんぼでもええ、一錢も金がないねん」と、三千円を拝むようなしぐさで受取る姿をみて、私は親子ともども地獄やな、とため息をつく。

「貨幣価値が、さがっているから」とのうたい文句に、気の遠くなるような金額にも目をつぶって購入したこのマンション。

月々十万円近い返済金額に、地方公務員の夫の給料だけでは生活できず、私は

アフター・グリーン

兵庫県姫路市 窪田 潤子(46歳)

百貨店の婦人衣料の販売員として働きに出た。

大学教職員住宅に住んでいた十六年間は、ボーナス込みの家計で、それでも年間残った分は貯金にまわしていた。しか



し、手持ちの貯金は、購入のときの頭金として全額支払い、あとは住宅金融公庫の最大貸付額九百万円を最高の返済期間三十五年ローンで組み、その返済は、年二回のボーナスの月割りで、支払っている。その他は、学校からの借金と、借りられるところから、小分けにして、借り受けた借金の返済に、頭の痛い毎日である。

その上追い討ちをかけるように、昨年十月末に舅の入院、意識不明の病人には、当然付き添い婦を要求される。人工呼吸器で、生命を長らえている病人の入院期間の長さは、何か月、何年もときく。「長男の嫁」としての私の立場は、微妙であった。舅に年金はおりにるにしても、特別医療室に支払う費用と、一日一万円の家政婦にいたる費用は、ざっと見積もっても、一か月五十万円近くになる。

私は、二年間働いた仕事を辞めた。月々のアルバイト程度の仕事でも、すこし貯金も出来ていたことが、自分の心を安

定させていた。七十六歳の姑が「おじいちゃんは、生きとってのかぎり、十万なにがしの年金はもらえる」といった言葉に、私は「月に、三十万円もいる付き添い婦さんのかわりに働く私に、おこづかいを下さい。私には十万円もいりません。せめて今まで働いていた給料に近い金額を」といってしまった。

翌日、姑は糖尿病を理由に、舅と同じ病棟に入院してしまった。「長男の嫁」という立場に、私は言葉を失ってしまった。

老親看護のため、二世帯暮らせるようにと購入したマンションのローンは、どの部屋より高額であったし、舅、姑の病院暮らしの付き添いのため自分の仕事を犠牲にすると、皮肉なめぐり合わせはある。

しかし、近い将来、姑との同居が目前にある私達夫婦は、いくらローン地獄が苦しくても、四LDKで庭つきのこの部屋を手離すことはできない。

★わいふバックナンバー

- 176号 わたしの恋愛体験
- 177号 肉親の老いをみつめる
- 184号 私の災害体験
- 185号 私の親ばなれ闘争記
- 186号 お医者さんを診断する
- 189号 知的内職の落し穴
- 190号 わが家の夫婦ゲンカ
- 191号 集合住宅で生きる
- 193号 学校教育への疑問
- 197号 親があなたに伝えたもの
- 199号 変わってしまった子どもの遊び

四五〇円 以下同じ

送料は一冊二〇〇円、二冊一三冊二五〇円、四冊一六冊三〇〇円、七冊一九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。

Tel (〇三) 二六〇一四七七

二か月後舅は亡くなり、今は、姑一人入院している。舅の死後三か月たって、姑の退院の日も近づいている。私の貯金も半年近く、金額の上昇はない。日課のように姑を見舞おうとした決心も、過去の涙のにじむような、姑からの修羅を思い出すと、何かと理由をつけては足が遠のく。隔日が隔々日になっていく。

夜、仕事から疲れて帰ってきた息子に「二百万円もする新車を買うから毎月のローン返すと、昼飯代も出んようになるねん。売ってしまいな。中古車と買い換えて、もっと気楽になれへんか」と言う。息子は「二年乗ったら、百万円でし

か売れへん、損や。俺、この車は乗り潰す心算や」と答える。

夕食後、子ども達もそれぞれ部屋に引き揚げて、夫と二人、渋い日本茶をすすりながら、「マンションを売って、ローン地獄から這い出したい」と言う。夫は「二年前から、売りに出とる部屋が、まだ売れとらへん。その間、借りた借家の家賃、どないすんねん」と答える。

私は、蟻地獄のようにもがけばもがくほど、足許の砂が崩れ落ち、深みにはまり込んでいくローン地獄の底から、小さな空を見上げて考えてみる。

自分の生き方は「結婚」「育児、教育」

性・妻たちのメッセージ

この一冊は、回数や強さだけを重要視する男たちの思いこみを打ちくだく。心の問題を無視して性を語ることはできない。261人の妻たちの赤裸な声をきこう。

●どんな夫が愛されているか●経済力のある妻ほど夫ばなれが激しい●妻の婚前交渉は結婚後の幸福と無関係●夫の帰宅時間は性生活に影響しない●三十代の妻は反逆の世代●六人に一人の妻が婚外交渉の体験者●マザコン亭主は五人に一人

発行・グループわいふ
発売・径 書 房
☎ 234-4608

「老親看護」すべて「多分こうなるだろう」と見当買い、見込み買いの連続であったと……。途中で失敗だったと分かっても、その引き返す手間の煩雑さを考えるときに、なんとなく目をつぶって妥協してきた。「世間の目」ということもいつも心のどこかに意識していたし。自分はじっとして、時間がたつとで周囲の景色が変わってからそっと動き出す狡さも身につけてきた。しかし今度のローン地獄は、三十五年という長さでもって、私は生命の果てる日まで続くような気がする。地獄とは正にこういう状態をいうのであろう。

誰一人気にしない私の力ぜ

京都市南区 向井かおり

週末から風邪気味で、とうとう日曜日は、寝込んでしまいました。夫は休みで家におり他人とは言え、親と名の付く人も階下に住んでいるというのに、日ごろの私の行ないの悪さのためか、誰ひとり気にもとめず、なんだか悲しい一日でした。朝起きてこないのは例のごとくで、昨夜から無口なのは虫の居所の悪いためとも思われていたようで、息子の「おなかすいたよお」のシュプレヒコールも夫を動かさずでした。

仕方なく息子に食事を取らせていると、当然のように夫もテーブルにつき、終わるとまた、当然のように趣味に没頭する有様。折しも掛かってきた友人からの電話に、まさか不機嫌でいるわけにもいかず「風邪でねえ……」と話しているのを横目で見て「風邪か」と問うたのか否か。洗たくの山を片付け食器を洗い、やは

りダメダとばかりまた床につく。忘れたところに夫がやって来た、と思ったら、息子と二人で外出しても良いかと聞く。三歳になったばかりの息子は「お外に行くんだって。お願いだから留守番していてね」と喜々として私のほほにキスをして出て行った。

それっきり、誰も何とも言っていない。風邪薬は切れており、仕方なく鎮痛薬を飲み少し眠った。体の至る所が痛い。食事を取らず夕方まで一人で寝ていた。

夫に言えば、洗たくも、食器洗いも、そして薬も買ってくれるだろう。私のために何か作ってくれることだろう。だけど、言えなかったのです。三十歳にもなった大の大人が、あれこれと妻に指図され、お願いされなければ動けないとは余りに情けなく、ただ、ただ悲しかった。夕方、夫が戻り、夕食を実家で摂るよう



にとの姑の伝言を伝え、行かないという私の返事を受け取ると、またもや出て行った。これが私の夫であり家族と呼べるものだとは余りだと、悲しくて腹が立つてそして、やっと反省した。やはり私の日ごろの行ないが悪いのだ、と。

そして、今三十歳の夫には死ぬまで「人情」を説き聞かせようと、我が心をふり立たせたが、はて、三歳の息子は、どうしたものか。それにつけても、結婚の意味を、家族のあり方を、子育ての難しさを、じっくりと考えさせられた一日でした。

皆さんは、どう思われますか？

(え・岡田正子)

投稿ホットライン——あちらを立てればこちらが立たず

対話のページ

あわれな夫たちへ
思いやりを

東京都三鷹市 中野 昌子

「寒椿」一九九号を読んでジーンとこみ上げてきました。「夫婦とは」というテーマが、雑誌などを賑わしているこのごろ、永い人生を共に生きてきた妻の、夫への息をつめるような愛の見守りというのでしょうか、胸を打たれます。

「実年とは失年なり」とか、この時期の夫たちの多くは疲れ果て、やるせない気持ちでいるに違いありません。特に今、五十代ぐらいの人たちは無我夢中で高度成長期を支え、ふと気がついたときには、企業は新しい時代に

向けて、生き残りのための体質改善に余念がありません。情け容赦は無用。当然ながら老兵は消え去るのみとなります。会社人間であったのがいけなかったと非難したとしても、彼らにその外の生き方が出来たでしょうか。あの時代にはあの生き方しかありませんでした。「わいふ」の読者の大方は、どちらかというと理性に富んでいて、そういう男たちを批判する目はあっても、その立場や、その身になって考えてあげる優しさに欠けるのでは——。というのは私自身がそういう妻だったからです。

夫は定年後勤めた会社に一年余りいて、あっけなくこの世を去りました。私は自立を叫んでいて、夫の悩みなどこれっぽっちも思い至らぬ、デクノボーの妻だったのです。

第二の人生にさしかかるころのご主人の苦悩を細やかな愛情で支え、のり越えられた藤野さんに、心から祝福を送りたいと思います。折から、男女雇用機会均等法施行など、ますます盛んな女房族の赤い気焰やエネルギーが、憐れな夫たちを削ぎ落すようなことにならないよう、女らしいデリカシーで対応してあげ、ともに豊かな晩年を作り上げるよう努力を注ぐべきだと、反省をこめて思うのです。



タンポン使っています

山梨県北巨摩郡 古池けい子

上原さんの投稿、面白く読みました。そこで、私の体験と目ごろ感じていることを書きます。

初潮は、小五の夏、暗いイメージはなく、特に感動することはありませんでしたが、お転婆な私は、走り回ってばかりいたので、とにかく動きが制約されるのには閉口しました。今から、約二十年前の話です。そのころ、

おとなの女性は、生理中は「お客さんが来た」などと言って、自転車に乗ることも控え、まして、ハイキングなどもってのほか、静かに数日間をすごしていたようです。級友も、体育は見学したり、なかには、学校を休んだ人もいました。しかし、私は、不便は感じながらも、いつも通り、水泳以外は何でもやっています。

中学時代は、バスケット部に入ったので、

一か月のうち、五日間も、ズレたり、モレたりを気にしながらの練習は、何とかならないものかと、いつも思っていました。そんな折、陸上部の級友が、先輩が、タンポンというものを使っていて、とても便利なものらしい、



という話を聞いてきて、二人で研究し、三年のときから使い始めました。

抵抗は全くなく、快適そのもの。なぜもっと早く……と思い、単純に、良いものは皆に教えてあげようと、クラスやクラブの友人に勧めたものでした。皆、熱心に話は聞きましたが、さあ、となると、二の足を踏む人が多く、母親や姉さんに相談したり、保健室の先生に聞きに行った人もいました。確か、私の記憶では、全員が反対されたようで、誰ひとり、タンポン派にはならなかったと思います。そのときの保健室の先生の話が、今考えると、とてもおかしいのです。「使用中にヒモが切れると、出せなくなるので、医者へ行かなければならず、大変なことになる。とくに独身女性は絶対やめたほうがいい」と言ったとか。まさか、この先生、ヒモが切れたタンポンは、奥へ奥へと進んで、子宮内に入ってしまうとも思っていたわけではありますまい。こんな話を聞いた中学生なら誰でも、やめてしまうでしょう。

しかし、上原さんの投稿を読んで気付いた

のですが、当時より少し昔は、ナブキンなどなくて当然とか、ましてや、タンボンなどはプロのスポーツ選手でもない限り、使用する人もなく、一般にも出回っていなかったのでしょうか。娘や、生徒から、相談を受けたとしても、自分が使用したことのないものを、人に勧めるわけにはいかなかった、という事情もあったのだと、今はわかる気がします。

高校時代も、たいていの人は、結婚前の女の子が使うものではないと考えていたようです。

大学時代には、同じ下宿の友人が、どうしても使いたいと言うので、手ほどき(?)したこともありました。トイレの外で、私「どう、うまくいった」中の彼女、「どこに入れるのかよくわかんない」外の野次馬が大爆笑、といった一幕もみられました。

思うに、腔にものを入れたくないと考えているのは、男性ばかりではなく、女性自身なのではないでしょうか。

上原さんも、二人目の子供さんを生んでから、初めて使用なさったようですが、今、タ



ンボン派という人も、子供を生んでから、あるいは、結婚してから、という人が多いようです。

これは、私の独断と偏見からの類推ですが、

たぶん、結婚前に使いたくないという人は、快適さよりも、処女性を大切にしたいという気持ちが大きいのではないかと思います。

ここで、女性の処女性について論じるつもりはありませんし、また、タンボンで処女膜が喪失するとも思えませんが、もしかに、タンボンの使用によって、処女膜の一部が欠損したとしても、このように物理的に失われたものには、全く、何の重大性も認められないではありませんか。

上原さんの表現「小さなタンボンから、大きな世界が広がる」これいいですね、ほんとにピッタリ、タンボンのキャッチフレーズみたいです。以前、私が夫に、「タンボンの発明は、女性の解放の第一歩だ」と言ったら、「そりゃ、便利かもしれないが、たかがタンボンごときに、言うことが大げさなんだよ、アホか」と、一笑に付されました。そうでしょうか。

皆さん、もっとたくさん感想や、体験を聞かせて下さい。蛇足ながら、我が家の夫婦関係は、いたって円満です。

むだだった改革

東京都新宿区 三井早穂子

一九九号の堀場さんへ

七年前の、私の経験を報告させていただき
ます。当時、私も役員をしていましたが、そ
の小学校PTAの場合、学校の諸行事に対し
て、一般役員達は一人当たり六百円徴収され
半端の金額は会長、副会長達がさらに上乗せ
して、ちょうどきりのよい金額にして「PT
A一同」として学校に差し出す慣例になっ
ていました。

副会長依頼のため推薦委員が再三訪れて来
たとき、私は最後に、それならばこの慣例を
改革させてくれるなら、と条件を出したので
す。（このときのいきさつはいささか古くな
りますが、一七四号の「私の視点」に詳しく
書いたことがあります）

改革を申し入れるには、私なりの二つの理
由がありました。



①はPTA役員の仕事は、一般会員とその
子ども達のために引き受けるのであるから、
それに伴う出費はPTA会費でまかなわれる
のが当然という考え方です。

②は過去に何度か役員としてPTA委員会
に出席していたころ、そうした習慣に対する
不満や疑問を、他の役員たちが裏に回ってブ
ツツ言い合っているのを聞いていたからで
す。

私自身も、①の理由で馬鹿らしいと思って
いましたし、これを改革すれば一般役員たち
の不満が、いくらかでも緩和されるのでは、

と単純に考えたのでした。

そして、後に続く人達に、少しでもよいP
TAとして残るなら、自分が少々悪者になる
くらい我慢できると思っていました。

幸いなことに、私と同時に就任した男性会
長が、若くて前向きにことを進める、実行力
のある人だったので、私の条件は採択された
のですが、前期から残ってる会計係にはどう
しても納得がいかならしく、新たに就任し
た他の役員も、先生方への受けや、人の中傷
が何よりも怖いらしくて、その会計係のほう
になびいていったのでした。

私は早くから社会に出た関係でか、PTA
の仕事も、仕事として割り切って進めたいほ
うでしたが、会計係は「おつき合い」の場と
してPTAを考えたく、仕事を何かと家に持
ち帰りがたり、私達を家に招いてそこで作業
を進めたいので、他の二人は次第にその家に
出入りするようになったのです。

さて、運動会の御祝儀の行き先ですが、当
日は受け付けや接待等PTA役員たちが分担
して当たる関係でか、学校側からは寿司折が

配られます。これは御祝儀を持って来られた来賓たちにも配ります。もちろんその「御招待」者の中にはPTAの前役員たちも含まれますから、疑問に思いながらも世間体で縛られて御祝儀を届ける人、名譽なことだと御祝儀を差し出す人、様々登場して来ます。

こうして集まった御祝儀は、先の寿司代を差し引いてもかなりの額に達しているわけですが、その使途については、憶測で物事をいうべきではないので触れないでおきます。

ただこういう事実はありました。運動会の翌日だったか、日曜参観日の翌日だったか振替休日を利用して、一泊の慰労旅行が行なわれることになっていました。そしてこれは後で分かったことですが、その慰労旅行に上層部の役員だけで金一封とお酒を届けるのが慣わしであったとか、つまりその年の金一封は、役員一同でなく、三名の役員の連名で学校に差し出されたそうです。

いつの間にか、会長と私はつんば棧敷に置かれていたのです。

しかし表向きの御祝儀こそ改革され、役員

負担は減ったものの、上層部役員の負担する費用は、例えばPTA規約に該当しない慶弔費等、何かと要したものです。

ところで、現在この小学校のPTAはどう行なわれているのでしょうか？ 校長も変わり、会長も三交替し、御祝儀は以前のように逆戻りしたようです。

昨年、百十周年の祝賀パーティが近くの一流ホテルで会費九千円で行なわれました。もちろん私は欠席でしたが、私が副会長当時の百五周年の祝賀会は、校長初め会長達も派手に来てもらい料理、盛花他一切をまかせ、一般会員も参加しやすいように会費は三千五百円でした。

結局人間一人一人の心の中から、先生方からよく思われていたとか、「世間並み」のことをしなければ恥だとか思う見栄を捨てられない限り、こうした御祝儀は引き継がれていくことでしょう。

(え・万谷陽子)

DBシリーズ

もっとステキに暮らしませんか 服部たま

豊富な海外生活の中から生まれた、暮らしのための
実用エッセイ集。100のアイデアがあなたの暮らしを
バックアップ。今日からホーム・デザイナー!! 定価980円

東京都品川区東品川2-21 ☎(03)233-0595
大阪市東成区深江北2-1-1 ☎(06)974-2461

大阪書籍



家にいては出来ない仕事

トレース

訓練校からの出発

私のトレース講座入会の動機は、結婚を機に、会社を退職したことから始まります。

失業保険の手続きをしに、職業安定所に行ったとき、職業訓練校の訓練生募集のポスターが目にとまりました。

それは洋裁のもので、一般事務というトレーストペーパー的な使い捨て業務の末路や、一見つぶしがきくようで、つぶしの効かない宿命を、短大卒業後四年の

OL生活で身に沁みていた私は、何か手に職をつけて家でやれる仕事、そして年齢にかかわらずやれる仕事を身につけたということと、手はじめに、新居に一番近い大塚にある訓練校の洋裁科を受験しようと思いました。

授業料もかからず、訓練中は失業保険のお金ももらえ、学割もあり、一方で技能も身につくという、無収入の専業主婦である私にとって、まさに一石数鳥の旨い話、ピッタリだと思いました。

お茶ノ水の訓練校を見に行ってみると、

東京都北区

栗本 幸代

訓練校の暗いイメージを払拭するような近代的で窓の多い校舎や、女工さんのイメージがあるものの清潔な作業衣姿の訓練生を目のあたりにして、もう入学してしまった気分、あれこれと想像を膨らませていました。

しかし日を違えて大塚の訓練校に行き、卒業生の進路をきいたとき、洋裁のあまりの低賃金にいや気がさしてしまいました。改めて管轄の王子職業安定所に行き、職員の方に相談したところ、「トレースをやってみたら」という返事です。いろ

いろトレースの将来に対する見通しの説明をうけ、実際に王子の訓練校の職員さんに話をきいて、トレース科に変更して志願書を提出しました。

トレース科をえらんだ理由は、次の点です。

一、比較的、他の科目にくらべると、賃金が高い。

二、就職先は豊富にある。

三、経験を積めば、下請けとして、自宅作業ができる見通しがある。——子供が生まれたら、家で仕事をしたい。

しかし、私は試験に不合格でした。理由は、

一、主婦であること。

——中途落伍者、遅刻、欠席者が多い。

二、子供が出来るかもしれない。

——妊娠による中途落伍者が毎年何人か出ている。それは困る。

私は、修得中は子供はつくらない予定と答えたのですが……。

三、専業主婦のカルチャーセンターでは

ない。

——遊びではない。

こういう点が、面接からうけた私のマインাস点だったと思われます。面接担当者の、そう決めてかかったような態度をはね返すだけのやる気を、言葉や態度で示すことができなかったのでしょうか。

というわけで、二次募集で、トレース科を再受験しようとした私を、職安の人は、相手にしてくれず、私はわけもわからないうちに断念し、トレース科は、半年毎の募集なので、秋を待つことにしました。

子育てが一段落して

ところが、毎日の退屈さに勝てず、妊娠し、即入退院を繰り返しているうちに、秋の募集もすぎ、お腹が目立ってしまい、添削などにトライしたのですが、妊娠を理由に断わられてしまいました。

「この子が幼稚園に入るころになったらまたトレースに挑戦しよう」と思いつつ、

出産後一年はあっという間に過ぎ、実際、体も弱く、持病を持つ子供の病院通いで育児以外は手が回らないどころか、自分も体を何回か悪くして寝込む始末でした。子供も一歳になり、持病も完治したので、少し精神的にも肉体的にも楽になり、育児だけの自分の生活にハリを持たせたいと思いました。そんなとき建設会社勤務の夫がトレースを外注した図面の高料金を愚痴っているのを耳にして、トレースの仕事について尋ねてみました。

一、先細り気味ではあるが、建築会社があるかぎり、建築図面のトレーサーは必要である。

二、家でできる仕事である。

三、内職の割には、一枚に対する図面単価は高い。

などというのを聞きました。

すぐやる気になってしまう私のこと、夫は一級建築士でもあり、従って大学で製図をしていたので、用具を持っていること、心得も多少あることから、夫を教

師にして通信教育でもできるのではない
かと思っただです。

早速新聞の広告欄でみつけた中央工
校のパンフレットをとり寄せてみました。
パンフレットの魔力はすごいものです。

もう一氣にトレーサー気分で、小さな子
供がいても、在宅作業でドンドン収入を
ふやす知的な自分が心の中にふくらみま
した。夫は、

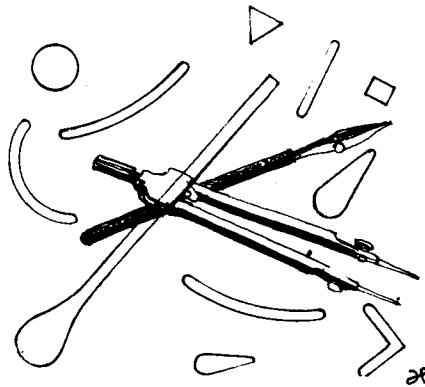
- 子供が小さく、まだ時間的に充分練
習できる時間がとれないこと。

- 費用が通信教育のわりに高いと思え
ること。

- 終了後、永続的に学校が仕事を斡旋
してくれるか不安なこと。

- 他の講座のパンフレットもとり寄せ
て、比較検討してみたほうがよいこと。
などを理由に、熟考を促し、子供が幼稚園
に入ってから始めたほうがよいことを
助言してくれました。

今から考えてみると、本当にその通り
になったのですが、そのころは、何か打



やってみたら むづかしい

さて、受講を開始してみると、内容は
基礎から応用まで、一々ステップまで
ありました。先生役を夫に頼み、夜十時
から十一時までを授業してもらうことに
しました。教科書を読み、用具のCheck
をし、基礎知識を頭に入れて、まず線の
引き方からです。

一本の線を引くにも、鉛筆の芯をけず
っていたり、カラス口の刃を砥いでいた
のでは、時間がかかりすぎるということ
で、鉛筆のかわりにシャープペンシル、
カラス口のかわりに一本二千元くらいす
るロットリングを十二〜十三本セットで
プレゼントされて、私はもう引くに引け
ない気持ちになりました。(しかし夫の温
情が、後であたとなってくるとは……)

トレーサーでは芯削りや、刃を砥いだり
ペンを砥いだりの用具の整備が大変重要
です。それで勝負が決まるといっても過

ち込むものが欲しいという心の焦りで、
「やりたい、やります」の意気込みで入
会してしまったのです。
肝心の学費は、そのころ実家の経理を
記帳から申告まで引き受け、結婚後は一
月に一万円ほどもらっていたので、分割
払いにしてそれを充当しました。

言ではありません。ましてこれらは、何回でも使えるかわりに、線の太さを変え

るのは、指先一つの経験によるのです。トレースでは、線の太さによるコントラストでいかに図面を見栄えよくするか

の技術ですから、シャープやロットリングのように線の太さがあらかじめ決まっているものは、いかに便利であるかはわかりでしょう。

それでも、一本の線が、うまく引けないのです。何度も注意され、単調な作業と、朝型人間の私の習性とは、眠気をよんで、何度も顔を洗います。

三日もすると、夜の一時間の練習だけでは足りないことがわかり、朝、早起きして、一〜二時間、昼、子供の昼寝時間の一時間を練習に当て、作業表を作った内容と時間を記入して自分の励みとしました。しかし第一回目の提出までに二か月弱を要しました。評価はABCでB。練習量の絶対量の少なさは、いなめません。やはり、コマ切れでない、まとめた時間での練習の必要を痛感したのです

が、私には無理でした。

次のステップはガラス棒をころがしなからのペンによる文字書きです。頼りの夫は、技術的にもうわからないということとで、本を読んでペン先を自分で削って

みましたが、これは、スクーリングを受けるまで、わかりませんでした。簡単なことなのですが、やはり実際に目で見ないとわからないということがあります。私のような自他共に認める不器用者は、なかなか技術を向上させることができません。

このスクーリングは、通信教育のデメリットをカバーするために、ほぼ月一回日曜日に行なわれる定期のものと、夏期（七月）に連続三日間軽井沢で合宿形式で行なわれるものがあります。夫の出張が続いて、私が受けたのは、受講開始後七か月もたっていました。

ペンの整備の仕方と、シングルコンタの整備の仕方を教わり、同じような環境

で頑張っている人々と話をしたり、用具の不足の購入をしたりと、三千円の講習費用分を得ようと必死でした。

しかし、このスクーリング一回を受講するために前日に費した私のエネルギーは大で、幼児を持った主婦の動きは鈍いものです。我が家では買物物は週末しかしません、前日の土曜日は、朝から、子供をベビーカーに乗せ、スーパーと自宅を何往復もしました。日曜日は、夫が休みなで、食事以外の家事と子供の世話を頼みました。

それでもシングルコンタは、自分でうまく砥げず、電話して、王子まで子供を背負い、菓子折もって、教わりに行きました。それまでもわからない点は電話質問していたのですが、電話では、どうしても理解できず、押しかけて行ってしまったのです。

質問は電話でも、手紙でもできるのですが、手紙は返事を受けとるまでに一か月以上かかり、非能率的でした。

また受講中最も気をつかったのは、紙の保存です。紙は、湿度により伸びたり縮んだりするので、一枚書き上げるのに時間がかかる場合、中断すると、次に書きたいとき、紙がたわんで、仕事にならなくなることがありました。また中断するときは、中途半端に中断してしまうと、紙の状態によっては、ちぐはぐにならざるをえない場合もあり、そのため、徹夜で書き上げたり、乾燥剤を用いるなど、紙の保存には、気をつかいました。

主婦がまとまった時間を作るには、睡眠時間を削るのが一番手っとり早い方法です。そんなこんなで、当初半年期限の講座を一年かかるつもりでいましたが、約十か月間で終了しました。全部で十一枚の提出課題のうち、Aがとれたのは、テクニカルイラスト（立体図）のみでした。

このテクニカルイラストも、教科書だけでは手に負えず、図書館で参考書を借りてきて勉強しました。

職探しの苦勞

さて、いよいよ、職探しです。夫にも相談に乗ってもらい、家でできる仕事があれば、やりたいということになりました。しかし世の中は甘くない、まさにこの言葉通りの結果で、今もって、先の見通しが、立っていません。リビング新聞に出ていたトレース内職者募集の記事を読み、電話したところ、学校を出たからといって経験がないのだから、一―二か月は、見習いとして出社して欲しいとのことです。（子供の預け先を、確保していなかったのです、すぐには外に出られない）

職業安定所やパートバンクでは、トレース求人はいくさんあるが、家でできる形はありませんとのこと。（福祉事務所に行ってみただけで、保育園の四月入園者はすでに内定していて、あきがなければ入れないこと、いつ入れるかわからないこと、現実には、就職していなければ、入

る見込みがないことがわかりました。またスーパ―の伝言板に、ベビーシッター募集の貼紙をしてみたけれど、今のところ応募はありません。内職相談所に行き、登録して紹介してもらったところも、前述のリビング新聞の会社と同じ答えです。そんなとき、雑誌クロワッサンで、「わいふ」の原田静枝さんが、資格とそれに伴う再就職の電話相談をしていることを知り、該当日でないにもかかわらず、思い切って電話したのです。

結果は、やはり私を感じていたことと同じで、子供を預けて外に出ていかなくは、また、出ていくというほどのやる気がないと、自分のトレース技能を生かす道はないということでした。それをするには、準備が万全でないのです。子供を手放すことに対する周囲の反対は目に見えているし、そうまでするほど自分の技術力があるとは思えないし。

中央工学校からも会社を紹介されたのですが、「カラス口と丸ペンを使って仕

上げた図面を送って欲しい」とのことです。

一度も使ったことのない道具を使いこなすには、相当の月日が必要です。最初は最低五時間是一日のうちで確保しないと納期に間に合わないとのことです。一日三〜四時間、時間を作るのが精一杯の私には、大変不安が残りましたが、だめでもともと、ロットリングで書いた自分の作品を郵送してみたのです。一週間後、電話があり、私の実力が今一つ掴めないで、再度「カラス口と丸ペン」で書いた学校の課題ではないもの、(例えば新聞に載っているグラフなど)を持って、都合の良い日に来社して欲しいとのことでした。

新聞に載っているグラフなどが、トレースの対象になるのか、おかしいなと思いましたが、カラス口と丸ペンを使ってみようと決心し、夫の製図用具からカラス口を取り出して、教科書を何回も読みながら、刃の整備をしてみました。しか

し、本当にこれで良いのか不安だったので、中央工学校に電話して、指導してもらう約束を取りつけ、夫に会社を休んでもらって出掛けました。

カラス口には独式と英式があって、英式カラス口でないとだめなこと、インクも製図用でないとうまく文字が書けないことを、初めてそこで知り、他にもいろいろ用具の不備を指摘されて、トレースにおいていかにそれ用の道具がないと仕事にならないかを悟りました。

しかし、そんな私がよくもトレース講座を終了させてもらえたものだ。終了できたのが不思議で、専門家が見たら、一目でロットリングで書いたか、カラス口で書いたかわかるというのに、それも指摘されなかったことで、中央工学校の通信講座自体に疑問を禁じ得ません。

カラス口やペンの整備は万全とのお墨付きをいただいて、早速自宅で練習、そして練習課題を少しアレンジして書き上げました。そして、前述の会社に前日に

アポイントをとっておいたのですが、その晩に、女性の声で、約束の日には急用で会えないとの電話を受けました。先方からは子供連れでは困るということ、実際に子供連れで仕事の受け渡しをしている人は皆無ということを申し渡されていた



ので、それも社会の常識と思い、預け先を予約しておいたので、先方の無責任さには腹が立ちました。

たかが内職者を一人雇うことにすぎないかもしれないけれど、ビジネス社会でこんな約束不履行が行がまかり通ってよいのでしょうか。事前にこの週はいつでもある、前日にアポイントをとってくれば会える、といっておいての約束破りには、悪意が感じられます。

中央工学校では、こと就業に関しては、あまり積極的に世話していかないこと、本音は、自分で積極的に捜して欲しいことが、担当者との何回かの電話のやりとりでわかりました。また、学校自体、学校のネームバリューでいくらでも生徒は集まってくるので、アフターケアまで手は回りかねるということでしょうか。

明日にでも前述の会社には、先に送った私の作品を返送してくれるよう頼むつもりです。そして一年間添削の内職でもして、子供が来年幼稚園に入ったら、も

う一度今度をもっとしつかりしたところで、トレースを学び直し、仕事を始めようと思っています。

片手間では仕事は出来ない

そのつもりで今、他のトレース講座や担当者から資料を送ってもらったり、話を聞いたりしています。その結果、中央工学校の通信講座は、本当に勉強主体で、就業に力を入れていないことがよくわかりました。また、前述の会社の担当者が他のトレース講座のパンフレットに「プロ意識をもって云々……」といった記事掲げているのには驚きました。

トレースという言葉はあるけれど、その実態が、掴みきれない人が多いようです。この手記を読んで、私のように安易にパンフレットにのせられて、失敗する人が、一人でも少なくなることを祈ります。

パンフレットに載るような人は、幸運

な一握りの人のように思います。今、私にアドバイスできることは、

- 主に、新宿、池袋、神田方面に住んでいないかぎり、自宅近くの会社はまずありません。
 - 子供連れで行ける会社はまずありません。
 - 内職といえども、正業に就くつもりで、家事の合間や小さな子供の育児の片間にやれる仕事ではありません。
 - 子供の預け先を確保しておかないとできません。
 - 通信講座のみでは、技術力は向上しません。また、有料のスクーリング以外では、実際の指導はあまりしてくれません（高名な人ほどそうです）。
 - スクーリングその他のために出かけられる時間を確保している人でないと、容易ではありません。
- などということです。

（え・早乙女光子）

投稿ホットライン——可愛さ余って憎さ百倍

うちの悪ガキ

うちの子に限って！の大集合。汝の敵を愛すべからず……

企業に息子を取られた

埼玉県所沢市 法村香音子

「ママはボクにいい加減なことを言ったね。ずっと前、ボクが赤ちゃんはどうやって生まれるのって聞いたら、お腹を切って生まれる、だからお母さんのお腹には線があるって言っただろ。全部が嘘じゃないけど、嘘ばっかり」とヤツが言い、「分かればいい。あんたもおとなになったのね」と私が言ったのは中学二年のころだった。

ちょうど私の彼氏が来ていたときにテレビを話題にしている、「すげえなあ精子って、目がないのにこうやって（と両手首を合わせ、膨らませた形を作ってくねくねさせながら）、ピラピラピラと子宮の中を泳いで一番良い卵を探し当てるんだよ」と言い、「高校生にもなって、お前馬鹿じゃないか……」と彼がひっくり返って大笑いしたのも懐かしい。

確かに私は奴の面倒を見なかった。毎度の受験のころも夜食なんて一度も作らなかった。むしろ、「おっかさんコーヒー入れようか」と、一服をすすめに自分の部屋から下りてくるのは奴のほうだった。

たまには弁当作ってあげようか、と言えば、変わったことをされると調子が狂うからとことわって、大学受験の朝、早起きしておにぎりを作りそっと出て行った。窓から見つめて「よし、もっと稼いでやるぞ!」と思った私。

奴が中学一年のとき、三人の子を引き取って育てる道を選んだのは私だ。だから稼いで食わせて学校に行かせてやるぞと頑張った。が、それ以上は確かになんにもしなかった。

でも、でもですよ……。

奴は去年の春、無理して通えば通えぬ距離ではない埼玉県行田市（ウチだってサイタマだ）のさる会社に就職したが、帰って来たのは七月三日の一日だけ。黙

っていたらそれっきり。

「……そりゃそうだよ、今までは仕送りしてもらって都合があったけど、これから逆だからね、テキも考えてるさ」と職場の連中は言う。けど、そりゃないですよ。

というわけで、怒り心頭に発した私は、「前略、生かすも殺すも親次第。だったところを生かし食わせてやったのに恩を忘れた憎い奴……、借金（四年間の送金は貸したことになる）即刻返せ、



正月はどうする？」と言ってやった。

そしたら慌ててこんな手紙が返ってきた。

「前略、おふくろ様

私も薄情なものです。ポストに入っていたおふくろ様からの手紙を見て、ずい分長い間連絡をとっていないことにあらためて気付きました。家にも二、三度電話を入れたのですが、まだ帰っていないようでした。（もっとも通じなくて良かったと半分思っています。恥ずかしながら

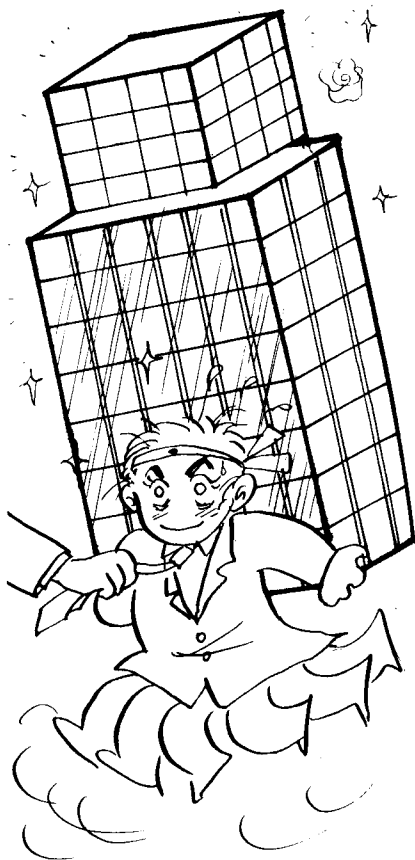
Buyo 4/5

私にとって今でも一番おつとろしいのは、おふくろ様、あなたであります。電話でとはいえ、何かの件でおこられるとキンタマが、いや失礼、身が縮みあがるほどです。

ところで私の仕事のほうですが、想像通り超多忙の中頑張っています。相変わらず帰宅が十二時、一時となり、文字通り帰ったら寝るだけの生活を続けています。でも朝七時起ききの規則正しい生活だし、土、日はサッカー部でしっかり体を動かしているので、風邪をひくこともなく、胸板の厚いがっしりとした体を維持しています（当然のことながら腹も出てないよ）。

ただ一つだけ体に重大な異変が起きて困っています。円形脱毛です。後頭部に直径三・五センチほどの巨大なハゲができてしまいました。とにかく毛が一本も残っていないのです。

通院することはできないので薬局に相談に行ったところ、美しい薬剤師のお姉



さんがにっこり笑って、『薬はいろいろあるけど高価だし、効果はあまり期待できないわよ、ほっておいても必ず治るからね』などと言うので私もにっこりして店から出てきましたが、流石にショックでした。家に帰ったら見せてあげます。現在の仕事を担当しているのが私一人であることと、問題処理の遅れが新製品のリリース・スケジュールに影響を与える可能性があったことなどが重圧になっていたのかも知れません。

同僚が驚くほど上から責任を持たされ

ていましたし、問題が多くて予想外に長びいてしまった仕事でしたが、ようやく終わりそうです。次の仕事はすでに決まっています、これが面白そうなのです。今までは実験室に閉じこもり切りの仕事でしたが、今度の仕事はリサーチ、つまり研究の類に属するものです。

デスクワークや、学会、展示会への出席、他の企業の研究所への出張も多くなりそうです。内容は磁気バルブ・メモリ・ダイオードの研究です。プロジェクト・マネージャーからも早く始めるように言

われているので、帰宅後少しづつ勉強を始めているのですが、電気のみならず物理の知識も強く要求されるので、私はうれし！でも大変だ！（大きな字）

思わずでか文字で書いてしまいました。そんなこんなで、まあ元気にやっております。家のことや、父ちゃん母ちゃん（私の父母のこと）のことなど知らん振りをして申し訳ありません。

十二月の土、日はサッカーの試合や、課、部の忘年会、それと会社内での引越（行田で一番高い七階建てビルが完成します）などがあり、正月休み前に帰るのは少し難しいようです。来週中に電話します。ではそのときに」

何をほざくか青二才、調子良すぎるぞ。でも、こりゃ駄目だ……。せっかく育てた息子を企業に取られてしまった。

私の子育て成功だったか失敗だったか……。

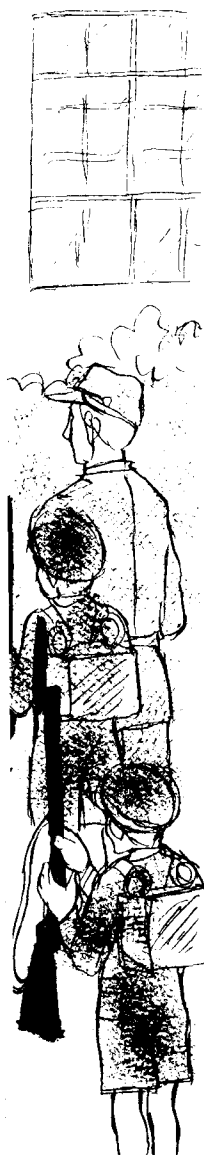
ヤツはまたまた、それっきり。頃合いを見てまた借金返せと言ってやろう。

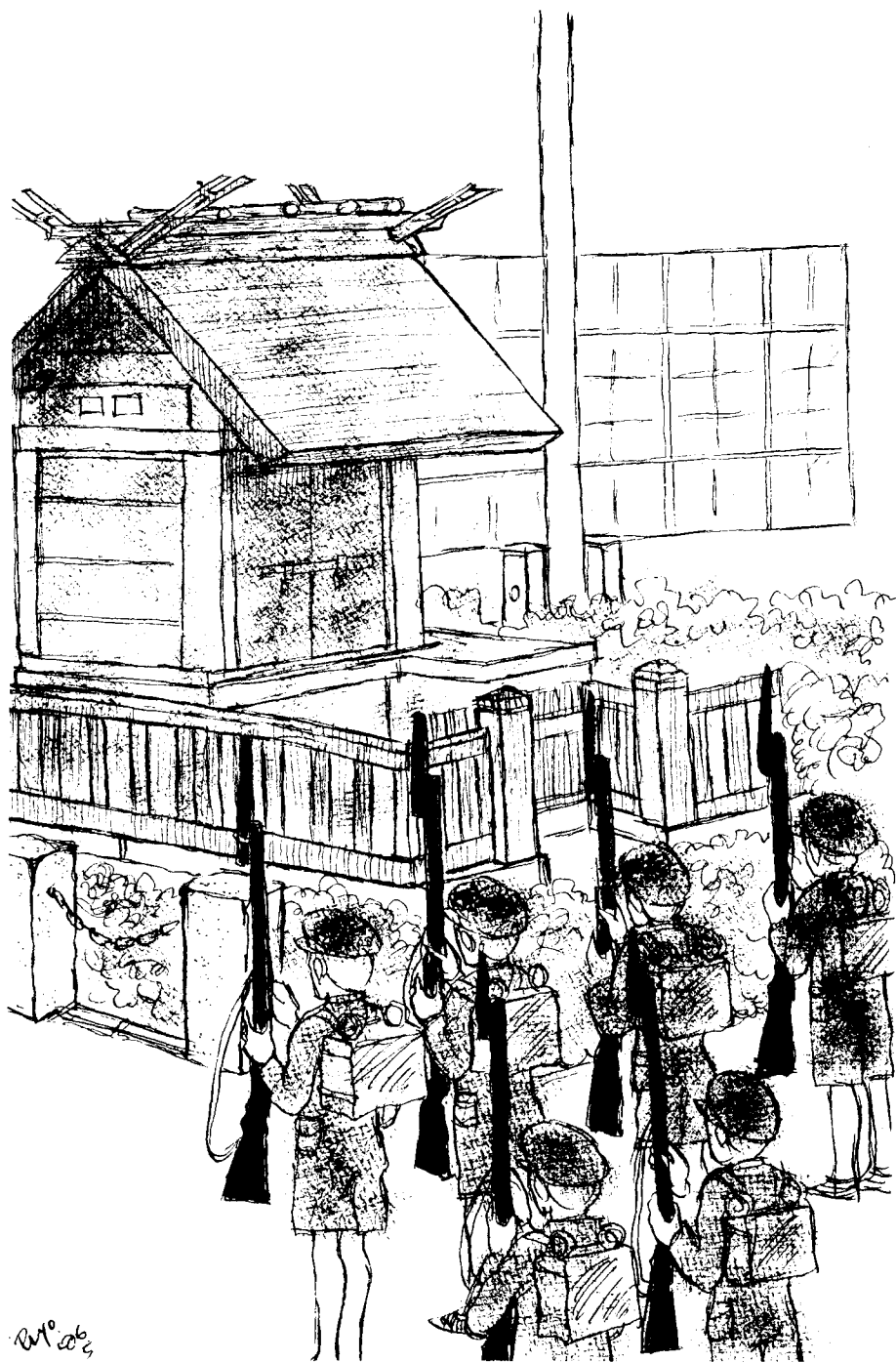
（元・田井亮子）

私の昭和史 ⑥

桜井淳子

欲しがりません勝つまでは





戦局は日本に有利かに見えたが、空襲必至という政策に従い、町会から血液型を調べるよう、達しがあった。

隣組単位で一団となり、町会の前の広場に集まった。初夏の夕暮れである。

広場には、白衣を着た医者や看護婦や、助手の如き人が数人いて、細長いテーブルに白い布をかぶせ、その上にたくさんの小さなガラスの板が並べてあった。

受付で住所氏名年齢を告げて、それを書いた紙片を渡され、医者の前に立つ。医者は小さなピカピカ光る金属の槍のような器具で、耳たぶに傷をつけ、血をしぼりとる。しぼられた血はガラスの板の上にぼとりと落とされる。紙片とガラス板をいっしょにして、検査は終わる。

後日、判明した血液型は隣組を通して知らされるとのこと。

結果が判明した。我が家は四つの血液型が全部揃っていた。

父	AB型
母	O型
上の姉	B型
下の姉	A型
私	A型
妹	A型



早速判明した血液型は、胸につけるおもち（切り餅の形をしている白い布なので、そう誰かが名付けた）に住所氏名年齢とともに書き加えた。

当時、英語は敵国語として使用することは禁じられていたが、血液型に限っては使用していた。ほかに変えようがなかったのだろう。

学校からは、女の子はスカートの代わりにもんぺかズボンをはくようにと指示が出た。母は、古着をほどき娘達にもんぺとズボンを混合したようなものを作った。もんぺは子供にとって使いづらくかつこうが悪い。ズボンのようなものに、ウエスト部分と、足首にゴムひもを入れて脱いだ

り着たりするのに便利なように作った。

防空頭巾も作らなければならなかった。救急袋といって、三角巾や、油紙、包帯、傷薬等を入れる袋も作った。母は、一人一人の救急袋に大豆の炒ったのをビンに入れて、しっかりと蓋をし、非常用として袋の中に入れた。しかし、非常用の大豆はすぐになくなっては詰め替えを要求した。

子供達の世界にも、きびしい軍国主義の波が押しよせ、全体主義に包まれていくのだった。登校、下校には、地区毎に班を組み、列を作り、軍歌を歌いながら通った。

昭和十八年五月にアッツ島玉砕が伝わると全校生は集められ、当時、学校に配属されていた軍事教官から戦局のきびしさを伝えられ、少国民として国のために尽くすよう叱咤激励された。不思議なことに、国民学校にも軍事教練専門の教師がいたのである。高学年の男子は、教官から教練を教わっていた。竹槍の使い方。行軍の仕方。大きくて強い者が正義であった。小さくて弱いものは邪魔な存在であった。それは女子にも当てはまるのである。勉強よりも体力であり、秀れた面があるよりも腕力が先じていた。背が高く、体格の良いものが善であり、小さくて貧弱なものは悪であった。

私は耐える以外に道はなかった。だんだんに内向的になっていく自分をどうしようもなかった。

進学の問題も話題になった。私は、いくら努力しても、体格的に一流校へ入れないのは分かっていた。小学四年並みの体格であったからだ。だんだんに勉強に対する意欲もなくなっていく毎日であった。

そのとき、クラスの中に、家が廃品回収業をしている友がいた。家も近くだったので友達になり、毎日のようにあそびにいった。私はその友とお義理にあそぶと、あとは、仕切り場に山と積まれた、古雑誌や古本の中に埋れて、思う存分、少年倶楽部、少女倶楽部、少女の友、キングや婦人画報等の雑誌類を読みふけた。古本も好きなだけ読むことが出来た。

小春日和のとりんとした仕切り場で、物語の世界に身を置くことは、何んと幸いだったことか。

押しつぶされそうな、身をひそめなければ生きていけないような時代に、私は読むことによって自分を救うことを発見した。

進学も具体的に決めなければならないときがきた。母が学校へ行き教師と相談した。

結局、青年学校令で作られた都立目黒第一実践女学校へ行くことにした。予科二年本科三年の五年制の女学校で、体格の劣った子や、病弱な子でも入学出来るという。家庭の事情で進学をあきらめるような子でも、費用が普通の女

学校よりも安いので極力入学を勧めているとのこと。そこでは成績優秀な子は卒業後、青年師範学校へ推薦入学出来るという。

母はすっかり乗り気であった。私が一時、学校ごっこにうつつを抜かしたり、養護学園時代の教師や保母の先生にあてがれたりしていたのを知っていたからである。

私は気が楽になった。誰でも入れる学校なんだから、特別に勉強しなくても良いのだと。

昭和十八年十二月 学徒出陣。

学生は、学びの園から修羅の巷へとかり出されていった。

冬休みであった。私は探し物をするために押し入れの中に首を突っこんだ。大きな茶箱があった。蓋をあけると、本、本、本がぎっしりと入っていた。私の心は高鳴った。自分が探している目的の物はすっかり忘れて、本を一冊一冊取り出して並べた。*“大地”*、*“放浪記”*、*“初恋”*、*“ナナ”*、*“モンテクリスト伯”*等々、ついに私は宝の山を発見したのだ。それも我が家の押し入れの中で……。

私は林芙美子の*“放浪記”*を読み始めた。

私は本の中に自分がぐいぐいと引きこまれるのを感じた。力強い文章が私を虜にした。どんな境遇にいてもくじけない主人公の強さ、明るさ、このように生きていくことも出

来るのだ。暗く落ちこんでいじけていた私の目の前が、ぱあっと明るく展げた気持ちであった。

雑誌類や、子供向けの小説には見られなかった本当の人間の姿を私は学んだ。一冊の本がこんなにも私に烈しい感動を与えてくれたのは初めてであった。

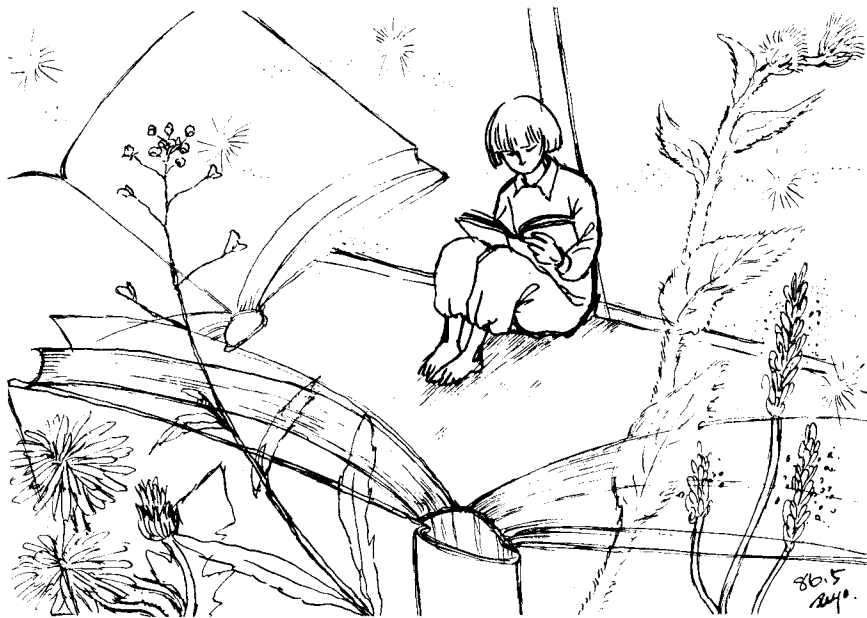
悲しい小説に涙したこともあった。素晴らしい小説や物語に笑い泣いたこともあった。

*“放浪記”*の感動に比べればものの数ではなかった。

私は、大人になったらこの主人公のように力強く生きて行こう、自分の思うように生きようと秘かに心に誓った。それからの私は、周りのものにこだわらなくなり、気にしなくなった。

全体主義の学校生活も、ちゃんばらんと受け流していた。表面は何事も素直に従い、チビで貧弱な体でついていった。どんな境遇にも負けないで、そのときは、へらへらと追従していけばよい。どんなつまらない雑草の花でも時がくれば花開くのだから。

パールバックの*“大地”*も読んだ。雄大な支那大陸の農民の物語である。これも一気に読み通してしまった。三部作の大作であったが、第一部の*“大地”*が何んといっても面白い。*“息子たち”*や*“分裂せる家”*は、一部に比べると散漫になったようで二度三度と読む気にならなかった。



ワンと妻のオーランが老人や子供達を連れて、生きるために南の国へ行き、主人公は車夫に、家族は乞食になって生活する場面が好きであった。何回も何回も暗記出来るほどに読み返した。

二番目の息子が、肉屋から肉の塊をかって帰ってくる。妻がそれを煮る。かっぱらった肉とも知らず主人公が食べようとすると、息子は得意になって自分がかっぱらってきたことを話す。

とたんに、主人公は、その肉を外に投げ出し、息子連れ出し、思い切りぶんなぐる。妻は落ち着いて捨てた肉を拾うと、水で洗い再びなべの中に入れる。

「肉は肉です」

盗んだものであれ、自分で買ったものであれ、「肉は肉です」といったべる妻の態度に私は考えた。きれいごとを言って、理想を求めて清く正しく生きるだけが人生ではない。

生きるために、盗みをするかも知あろう。悪と分かっている人も人を裏切ることあろう。たべなければ死んでしまう状況に追いつめられれば人は誰でも盗むにちがいない。殺されるか殺すかの立場になれば、殺すだろう。

私はこの「肉は肉です」という言葉を人生の教訓の一つにした。後年、英語の原本を手に入れると、むさぼるよう

にして読んだ。

そして「Meat is meat」という言葉に深い感動を再び味わった。

デューマの「モンテクリスト伯」も面白かった。子供向けの「岩窟王」と違って本格的な大人の小説であった。読めば読むほど面白く、人間の欲望や愛情、恩義、復讐が渦巻く大長編小説である。私は、五十余年の生涯の中で面白さにおいては、この本が最高だと信じている。今までに何回読んだことか。復讐のために生きる主人公の波乱に富んだ人生を。

最後には、「復讐とは虚しきもの」と悟り新しい生活に再出発する夢と希望のある結びであった。

あの当時に読破した本は、幼かった私の心の血となり肉となり私を精神的に豊かにしてくれた。小学校六年の知力では理解出来ない難解な文章も多くあったが、自分なりに咀嚼していった。

時局は、しだいに暗くなっていった。それでも、お正月には、お餅をたべ、最低ではあったが、おせち料理も並べられ、晴れ着を着たりした。

近所の子供達が集まり、百人一首やトランプあそびに時のたつのも忘れた。

小倉百人一首の他に、愛国百人一首というものが発売され、それを買うように奨励された。長い間、親しまれ愛されていた小倉百人一首の雅やかさに比べれば、万葉集から選んだ歌がほとんどで、防人の歌や、天皇のために尽くすような歌が多かった。

一応は国策に従って、愛国百人一首でもあそんだが、すぐに昔からの小倉に戻ってしまう。

何年も前からお正月になれば、我が家に集まって百人一首するのが恒例になっているので、普段は口もきかない男の子達も集まってきた。

この日ばかりは、暗幕を張りめぐらした部屋の中に電灯をこうこうともし、火鉢に赤々と炭火を熾し、大なべにいっぱいのおしるこを作った。みかんも山と積んでおせんの上に置いてある。

それぞれがおはこの札を人に取らせまいと必死であった。源平に分かれて競うのも愉快であった。男女入り乱れてかるたに興じる。日本の良き習慣の一つでもあった。

おしるこをお腹いっぱい食べたべ、乾いたのどを冷たいみかんでうるおす。

戦時下のお正月風景である。

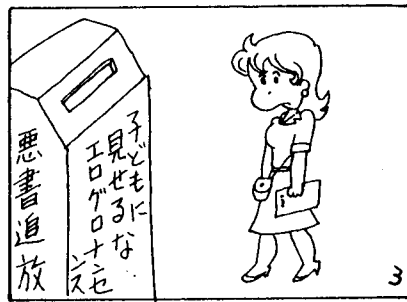
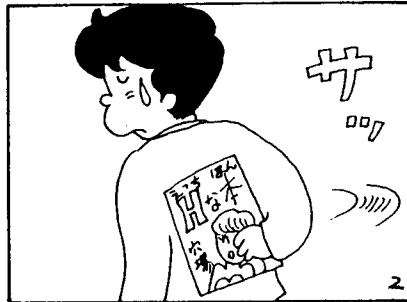
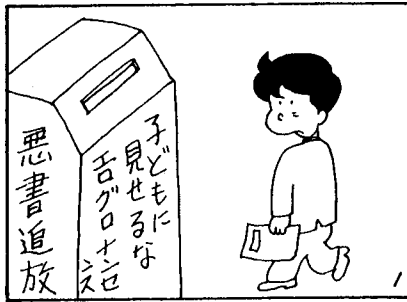
そのころ、「欲しがりません勝つまでは」の標語が日本全国津々浦々まで浸透していた。

(え・田井亮子)

禁止禁止

♥ 根性

♥ エログロヤンセンス



情報 コーナー

●仕事に直結した

ワープロスクール

ワープロホットライン

生徒募集

ワープロホットラインは、学習成果をむだにしません。

仕事に直結した、新システムのワープロスクールです。

ワープロ本科コース修了後、

ワープロの腕を磨きながら、能力に見合った

仕事を始めることができます。

ワープロの勉強をしながらアルバイトをとる方は是非。

◆ワープロ本科コース 毎月開講

二〇時間 三四〇〇円

◆申し込み先 151渋谷区代々木

一三八一 ミヤタビル八F

(財)企業経営通信学院 教育事業課

Tel 〇三―三七九―二六七一

●「子供のテレビの会」

お手伝い下さる方

いませんか

子どもが熱中して見ているテレビの番組をなんとなくつきあって見ているうちにだんだん腹が立ってイライラしてくる、そんな思いをした経験がある母親は多いのではないのでしょうか。

「こんなひどい番組は放っておけない」という疑念をそのままにしておかないで、何とかしよう、出来ることからやりはじめよう」と集まったのが「子どものテレビの会」の市民活動です。

父親も母親も、その立場をふまえた研究者、テレビ関係者、社会教育関係者さまざまな職種の会員が一五〇名近くいます。中心になって働いているのは子育て中の母親たちで、月に二、三回の集まりで

いろいろな仕事をしています。十周年めの活動に入るにあたりぜひお手伝い下さる方を求めています。

◆連絡先 世田谷区奥沢五―三七

―二竹内希衣子 Tel 〇三―七二

八六九四

●本探しています

一九七〇年代に朝日新聞社から発刊された

「ワシブンゴ」ホルヘ・イカサ著を探しています。

ゆずっていただければうれしいのですが、貸してくださるだけでも結構です。

●連絡先 大阪府泉南郡阪南町和泉鳥取一―三七ノ八 山崎佳寿子

●「自然食料理教室」

開きました!!

第二子出産のおり、身体をこわしまして、すっかり寝こんでしまい

情報 コーナー

ました。そのひどい状態を、玄米菜食でとても元気になるしました。ひょんなことから、昨年七月から自然食料理教室を、自宅で開いてしまいました。

私のように小さいころ

から扁桃腺炎にな

りやすく弱い

体質や、最

近の花粉

症など

のアレ

ルギー疾

患、または

糖尿病、ガン

などの慢性病も、

元凶は食べ物にあるこ

とを体験しました。白米、肉、白

砂糖に代表される美食を控えたら、

子供も熱を出さなくなりました。

玄米菜食で健康になりたい方、ま

た、玄米はかたくてまずいものと

思いこんでいらっしやる方、まずは試食のつもりでいらっしやいませんか。

◆自然食料理教室

◆日時 毎月第二、第四金曜日

AM 一〇時

◆場所 233 横浜市港南区野庭町

六一四、三—三九五

Tel 〇四五—八四三—九五五〇

岡田恭子宅

◆会費 一回千五百円 入会金千

五百円

●ヨーロッパアンフラワー

フェスティバルご案内

六月二十日より二十五日までの一

週間 (AM 一〇時〜PM 六時)、渋谷

の東急デパート東横店で一〇階の

イベントホールの新装開店を祝し

て、毎日新聞社、毎日企画の主催

による毎日文化センターのフェス

ティバルが開かれます。

文化センター開講いらい初めての

ことで、他の講座の作品と一しょに、私の仕事も披露できることになりました。

あわただしい都会生活の中の一と

ときを、美しいものと向かい合っ

てみるのもいいものです。

●私たちのために

あなたの力を貸して下さい

ボストンの女のグループが編集した女の体の本を和訳するため仲間を募っています。

すばらしい本なのですが全体が電話帳ぐらいの厚さ、私はその

一部分を担当しているのですが、その部分をみなで分担したら、

仕事は楽になるし、新しい仲間もふえて楽しいと考えていま

す。監修者は今のところ藤枝渚子さんを予定しています。

原題は The New Our

よろしかったらお出掛け下さい。

(入場無料)

◆問い合わせ先 Tel 〇四二—四

七—六三九〇 (夜かけて下さい)

フラワーコーディネーター

高橋美智子

Bodies: Ourselves.

分担していただきたいのは Sur-

viving the system: choo-

sing and using medical care

の部分で、お一人当りのページ

数などはお話し合いで決めたい

と思います。東京へはよく日帰

り出張するのでそのときお目

にかかってご相談したいと思ひ

ます。お気持ちのある方はぜひ

お声をかけて下さい。

573 枚方市山之上五丁目

四〇—五

国信潤子

電話 〇七二〇(四四)三〇四五

連載⑤

ただ一枚の チラシ から



ポーラ化粧品と私

東京都日野市 山口洋子

インターホンの難しさ

顔を合わせて目を見ながら話をするのはとってもしやすいが、最近はインターホンが増えて、「ポーラ化粧品から参りました山口ですが……」と言い終わらないうちに「結構です」と断わられてしまうことが多い。

どうしたらこの壁を越えられるかいろいろ考えた時期があった。

化粧品のイメージって明るく素敵なものというのを相手に素早く伝えられればいいのでは？ と思った。

あるとき、お客様のご主人で多摩動物公園の飼育係をしている方から話を伺ったのだが、動物に接するときは、自分の心を穏やかにしてから世話をするそうだ。どんな動物でも言葉はともかくとして、感情を敏感に感じとられてしまうという。どんな好物を差し出しても、こちら側の気持ちがいらだっているときなど、食

べないし、また動物園の中での事故というのはこういうときに起きるそうだ。

「ですから家では朝の夫婦喧嘩は絶対禁物なんです」とてれくさそうに笑いながらおっしゃった。

この言葉を聞いて、インターホンと結びつく大ヒントのような気がした。

明るく爽やかなイメージをインターホンを通して分かってもらうためには、こちら側がかなり心して話さねばと思い知らされた。カセットに自分の声を何回となく吹き込んで、どんな響きの声がふさわしいか、練習した。

我が家の場合、夫、二人の息子が朝七時までに家を出るので、大急ぎで後かたづけをし、姑に手伝ってもらいながら洗濯物を広げ終わるとホッとして、NHK FMの朝の名曲を聴きながら、仕事としての顔作りが始まるのです。そして今日も一日穏やかな気持ちでいられますようにと言ひ聞かせながら……。

お客様に支えられて

初めは招かれざる客としてドアをくぐった私なのに、心温かく見守ってくださる方々によって仕事をさせていだいてる。

どう見ても化粧品セールスという雰囲気ではなかった私を受け入れて下さったOさん。ずっと以前に化粧品を使ったことはあったが、二人の子供が私立の高校、大学と進んで教育費の山を迎え、良品とは思っても使いきれなくなってしまう。そして中断していたのだが、上の息子さんが社会人になり、下の娘さん一人分の教育費になり、やれやれと思ったところで私と出逢った、という。

ご主人は都立高校の校長先生をしておられ、家族もそれぞれの立場で一所懸命、精神的に高いものを求めて生活している方々だ。Oさん曰く、ポーラ化粧品は欲しくて、強烈なメーカーキャップをしたセ

ールスは何人か見えたがそれが嫌だった。というわけで、素顔に近いような私を受け入れて下さったとのこと。

私も仕事に出だして間もないころだったので「ウワー、私を迎え入れて下さる人がいる」と本当に嬉しかった。高額の化粧品をお買い上げいただくのだから、アフターをしっかりして、それ以上の喜びを味わっていただかねばと一所懸命マッサージが上手になるように練習もしたし、化粧品のことを聞かれたらどんなことでも答えられるようになろう、と自分の心に言い聞かせた。

アフターで伺うときは、ホット情報と季節美容の話を中心に楽しんでいただく。またこのOさんは手先がとっても器用で、「山口さん、今、貴女にできないものの」といつも手作りの心のこもった帽子やベスト、カーディガンなどの品物を下さったり、私が息子のことで悩みを話したりすると、教育者の妻としていろいろなアドバイスを下さったり、素敵な人

生の先輩として、いろいろな面で学ばせていただいている。

営業所の責任者になってまもなくのころ、あれもこれもとあせりが先に立ち、五反田にある本社ビルでの会議に出かけて、その中で捻挫してしまった。歩けないくらいに痛みだったので、すぐ診療所でレントゲンをとってもらったら「骨に異常はないから湿布をしていなさい」と言われたので、安心して一日中椅子に座って話を聞いていた。すると内出血があったのか、右足首を傷めたのだが、膝から指の爪先まで真黒に腫れ上がってしまった、歩くことができなくなってしまった。右側の足だったので車のアクセルも踏むことができず、タクシーで事務所に出てはみたものの、仕事にならず落ち込んでいた。

そんなある日、お客さまのFさんから電話が入った。「山口さんそろそろ連絡が来るかと思って待っているのにどうしたの？ ポーラ化粧品セールスが六人



も来たけど、私は貴女が来るのを待っているから」と言って下さった。

これはいけない！ 私那不都合なのは右の足だけで他は正常なのだ。Fさんのことが嬉しくて、日野から杉並まで往復タクシーを利用して会いに行った。谷底から這い上がる勇気を与えられたような気がした。

Fさんは、ボーイスカウトのリーダー

のトップにたち、忙しいなかにも自分というものをしっかりと持っている。そして暇を見出しては山登りをし、雄大な自然に接することによって己には厳しく、他人にはとても温かい大らかな気持ちで迎えて下さる。動物、植物、山を愛する心の広い方である。また私に逢うまでは全く化粧っ気もなく、白髪が増え始めたのは気になっていたが、顔のほうは全然気にもならなかったそうだ。

私と同じように美容の第一歩から知っていただし、自分の変貌ぶりに満足していたら、友人に「貴女、最近とってもきれいになったけどどうかしたの？」と言われ、益々自信が出たようだった。

こんなに元気なFさんが家の建て替えるのころから、ぐんぐん痩せ出した。私も何年か前に味わった家の建て替えの大変さは知っていたのでそのせいだろうと思っていたら、バセドー氏病になっていた。私がポーラを続けてこられたのもこのFさんからの励ましが大きかったのだ、

私からは何をしたらいいのかと祈る毎日だった。体調がよいというときに伺ってマッサージをしてあげること、電話で話をするくらいしかできなかったが、病状に合った薬と量が決まり治療を始めたら、二年くらいで健康な人と変わらないうほになった。

ここまでくれば意欲的なFさん、身体を考えるとヨガを始めた。ヨガの精神的肉体的なものを深く求め続けて、体調の悪い人に少しでも役に立てればと、指導者コースに進み頑張っている。

二十八歳でご主人を亡くされ、四歳の女の子と二歳の男の子を抱えて途方にくれていたKさん。

ご主人が嫌いで許してくれなかった生命保険に内緒で入り、三回ほど掛金を入金したところでご主人が、くも膜下出血で突然亡くなってしまったという。

さし当たっての生活は保険金のお陰でなり立っていたが、いつまで悔んでいても仕方がないと、二人の子供を保育園

に入園させて、自分が電話の交換手の資格をとるために、オペレーター学院で学び出した。

六か月で資格をとり、就職先が卸売りセンターだった。仕事から朝が早いために、子供の保育園が始まるまでの時間をどうすることもできないので、長く続けられなかった。

Kさん親子に幸せになってもらおうと、新聞の求人広告に目を通し、二人の子供さんにおやつを買っては何回となく伺った。

近くの市の小学校で事務員を募集しているというので応募したら採用となった。でも通勤時間がかかるので子供より先に家を出なければならぬ。まだ子供に鍵をあずけては先に出られないので、住居を職場の近くに移して何とか軌道に乗り出した。

やれやれ安心と思っていたころ、Kさんの妹がN化粧品品のセールスを始めたので、「お姉さん協力してよ」と頼まれた

そうだ。「山口さんには本当に悪いし、ポーラの商品も私は気に入っているのが……」と話しくそうに言い出した。

「何言っているのよ、かわいい妹さんでしょ？ そちらの商品の使用感など私のほうにも教えてネ。幸せになったKさんを見て私もしばらくご無沙汰ができる」と言って三年ほど失礼していた。

ある朝、私が事務所に入ると同時に電話が鳴った。明るい声で、「ずっと以前に世話になったKと言います。山口さんはいらっしゃいますか？」と言う。「あら懐かしい、お元気ですか？ 下の勇ちゃんも大きくなったでしょうネ」とのやりとりの後、「やっぱり私の肌はポーラでないとダメなので、〇〇小学校に昼休みの時間中に来て欲しい」ということだった。

三年振りにお会いしたKさんは気持ち少しも変わっていないが、眩しいほどにテキパキと行動するキャリアウーマンに変わっていた。

(え・万谷陽子)

日本男性論

樋口恵子・渥美雅子
加藤富子・木村 栄

日本男子という世界に例のない珍しい生物に、四人の著者がそれぞれのアプローチでそれに切り込んでいる、痛快な読物である。

樋口さんはワークホリックの日本男子を切る。歯切れのよい樋口節に胸がすく。

渥美さんは自分の扱ったケースから、日本男子の男としてのだらしなさを。これを要するに、マザコ

ン男性が大発生しているという現状分析である。

歴史的、民俗的、社会学的にアプローチしているのが加藤富子さん。学者としての立場から、女性中心に家の血統が継承された日本の長い伝統の中で、男たちがどんな無責任体質を身につけていったかがよく分かる。

私はこの本を読んで、これまでに

ま一つはつきりしなかった日本男性の男としてのふがいなさの正体をはっきりつかめたように思った。要するに彼らは未成熟なのである。イキのいい女が外国人にさらわれてしまうのも無理はない。

最後に木村さんの、新しい男性族出現を描く一章。未来は明るい、こんな男たちも生まれているのだ。

学陽書房 二二〇〇円 (T)

もっとステキに暮らしませんか

服部たまゐ



女なら、家にいる主婦だって、家の外にいる？主婦だって、楽しい暮らし、夢のある暮らしを心のどこかで夢みています。これは、その夢をゆすぶられる本なんです。ちょっとした心配りで生活が楽しくなる、ゆたかになる。

たとえば買ってきたクレソンの水栽培。窓側の日の当たたる場所にお

いて水を始終取りかえれば青々と育ちます。

たとえばアボガドの木。食べたあとのアボガドの実を発芽させる法。(やり方は本を見て下さい)それから木になって実がなれば――夢が拡がります。

忙しい毎日を過ごしている兼業主婦にもできそうなことがいっぱい。

おくりものをいただいたとき、お礼のことはを送る楽しいサンキューカード。たくさんベルトを便利にするせるレージスーズン。旅先から日ごろごぶさたの人に出す手紙。お金や手をかけるだけが可能でない、楽しい心配りのアイデアがつまっている本でした。

大阪書籍 九八〇円 (K)



ふたりは女
娘と母のたたかいとエロス
門野晴子

いまわいふに、「教師とケンカする法」を連載している門野さんの今日に至る道筋と、娘との関係を書きこんだ一冊。
門野さんは、私はインテリじゃないのよ、と誇らしげに自称する。つまりそれは、自分が体を張って学んだこと、実践したこと以外は語らない、ということだ。
手に取ったら、読むのをやめられ

なくなることに受けあい。はじめは大人しいおヨメさん、PTA夫人、おけいことマダムだった彼女が、一人の男とのめぐりあいから、さなぎが蝶になるように、どんなふうに脱皮し、育っていったか。
門野さんの家に、娘の友人たちが出入りするようになり、そのうち娘の恋人が（すばらしい青年だ）住みついてしまふ。

ふつうの親からみれば、言語道断の話。しかしその実践が、どんな親子関係に支えられているか、そこが決め手なのである。
いま著者は、別れた夫（いやがるのをムリに判をつかせた——とて面白い人なんです）の父親、モト舅と暮している。八十ウン歳の彼はいま家事をマスターしつつある、

学陽書房 二〇〇円 (M)



危ない
インフルエンザ予防接種
薬害列島ニッポン
谷合規子

一人でも多くの人に、こういう本を読んでもらいたいです。
タイトルには、インフルエンザ予防接種のことしかでていませんが、第二部の「薬に目を奪われた人々」には、効果はなく、副作用のみという毒薬のようなクロロキン剤の薬害が取り上げられています。
インフルエンザ予防のワクチンを

注射しても、患者の発生率は変わらない。その一方で、下半身マヒなどという事故が発生する。そういう事実がありながら、まるで軍隊のように一律に、注射が強制されつづける学校現場。
クロロキンの薬害は、かなり早くから分かっていたにもかかわらず、企業や厚生省の役人が、その毒性

を一般に知らせようとしなかった犯罪的行為。サリドマイドをはじめ、日本だけに薬害が大規模に発生し続けている現実の裏に何がひそむのか、この一冊を読むと身にしみて分かります。あなたも、薬に頼りすぎてはいませんか？
「潮」ノンフィクション賞受賞作品。
社会評論社 一六〇〇円 (N)

迷ってること悩んでること怒ってること
知りたいことどんなことでも大歓迎です

読者のための相談室

気の合わない

隣人に囲まれていきます

相 談

田 口 和 子

アドバイス（カウンセラー） 河野貴代美

隣人とのつきあいで悩んでいます。

社宅に住んでいます。周囲の人たちとの
つきあいがうまくいきません。

考えることも、価値観もバラバラで、私を
理解してくれる人がなく、思っていることを
率直に話し合える友人ができません。

子どもを通じての友人づくりもうまくいか
ず、孤立感に悩んでいます。

ものいえば唇さむしという感じです。

私は専業主婦で、

主人 三十八歳

私 三十八歳

子ども男 十歳

子ども女 七歳

自分の教養活動として、市政モニター、電
電のモニター、市民会館の講座などに参加し
ています。

今年はフリーな立場でじっくり何かに挑戦
してみようと、PTA委員は引受けませんで
した。

子どもの送り迎えからくい違いが

編集部 トラブルの内容を、具体的にきかせていただけませんか。

田口 まずはじめは、幼稚園の送り迎えの問題でした。

同じ棟のAさん、Bさんと私の三人に、幼稚園に通う同い年の子供がいます。子どもを通じての交際ですが、それなりに楽しくやっています。

田舎ですから子どもをバスで通園させます。どのバスにのせるかということが、食い違いのもとになったんです。

編集部 幼稚園バスじゃなくて？

田口 ええ、ふつうの私鉄のバス。八時前のバスにのせると早く着きすぎてしまうんですね。園からは再三、余り早くこさせないでくれ、といわれているんです。

私は園のルールは守りたいですから、バス停で待っていても、バスが早くきてしまうとそれには乗せないで、一台待つようにしています。

たんです。

Aさん、Bさんは、私がいるときはそうして下さるんですが、二人だけのときはさっさと早いバスにも乗っちゃうんですね。どうしたらいいか、私もしばらく迷いましたが、一緒に行動することは却ってよくないと思い、二人の人たちとバス停で一緒にならないように時間をずらして家を出ることにしたんです。

あとの二人に「私は遅くなりますから、どうぞ気にせずに早いバスでかまわずいつて下さい」といいまして……。主人にも相談しましたら、「それでいいだろう、君のやり方は正しい」といつてくれました。

編集部 いいじゃないですか、それで。

田口 ところが子どもにいわせがきたんです。一人だけ遅れて行きますから、あとの二人の子の間へ入りこめないですよ。一種の情緒不安定になって、「何でボクだけが遅いのか」と私にいうようになりました。

編集部 ウーン。

田口 二人の人たち、バス待ってる間もベチャクチャしゃべるんですよ。絶え間なく。

私もおしゃべりは好きですけど、しゃべらないでいることもできるんです。でもその二人はもう絶え間なくしゃべる。私はまるで入りこめないんです。

で、そんな調子で一年近く、送り迎えする間に、私は体の調子がおかしくなって、声が出なくなりました……。

地域の子供会も大変なんです。日曜日、休日、夜も会議があります。それとお姑さんとのトラブルが重なって、とうとう胃に孔があきそうにまでなっていました。

編集部 ものすごく思いつめてしまったわけですね。

田口 その他に雪のこともあるんです。

今年も大雪が降りましたが、三年ぐらい前にも降って、とてもつまったことがあるんです。そのとき、うちの主人が夜九時ごろ三日間かけて社宅の敷地内の通路の雪かきをしたんです。ところが他の人は誰も出てこ

ないんです。

今年ものすごく降りましたでしょ。その時も、子どもが学校へ行けなくなるからって、朝六時すぎに主人を起こして、すっかり雪かきしてもらったんです。それでも誰も、

複雑な寄り合い世帯の社宅

田口 大体私のとこの社宅はとても複雑なんです。うちの主人は親会社からの出向で、その出向先の、いつてみれば子会社の社員たち、その又下請け会社の社員なんかがごたまぜに住んでいる社宅なんです。うんと若い人もいれば単身赴任者もありで。

何かにつけては「あら、お宅なんか給料がいいからそんなこといいじゃない」って二言目にはいわれる。そんな雰囲気ですから、私は誰にでも丁寧に、腰低く、一人だけにいい顔を見せないように、まんべんなくつき合う、ようにしているんですけれど……。うちの主人は上に立つ立場の人間なわけですから。

その人間が、夜おそく雪かきしていても、朝早く雪かきしていても、誰も出てきて手伝

一人も、ほんとに一人も出てきて手伝わない。

「私通る人、あなた雪かきする人」なんですよ。

今の社会がそうなのか、うちの社宅だけ特別なのか分かりませんけど。

わない。今の若い人って、こんなものなんですよか。

編集部 当番はないんですか？

田口 組長というのが年一回の交代制でいることはいるんですけど、何もしていません。その他にゴミの問題もあるんです。

生ゴミの袋を一カ所に集めるところがあるんですけど、犬や猫がゴミ袋を食いやぶったりして散らかることがあるんですね。私は気になって、ときどき軍手はめて掃除するんですけれど、誰もが知らん顔。

この間、家庭訪問がありましたね、先生が車でいらっしゃるから、そのゴミ収集場の前を通る。当然そこが汚れていれば目につきますよね。ともかくきれいにしておかなくては

と、私は当番でもないのにそこを何度も掃除したんです。

編集部 田口さんは生まれつき、とてもきれ

い好きなんですか？

田口 いえ家の中をそんなにみがき立てるほうではないんです。

でもゴミ置き場が散らかっていたら、これは社宅全体の恥というか、問題でしょ？ 先生にも失礼だし……。

私がそういうことに気がつくようになったのは、島根県の社宅にいたとき、軍手をはめてまわりのゴミを拾っている人がいましたね、それを見たとき、ああ私も見習おう、とくに子どもにはそうしてまわりをきれいにすることを教習させたい、と思ったんです。で、今



でも子どもに軍手はめて、ビニール袋持たせてゴミ拾いの手伝いをさせます。小さいとき

何をやっても誠意が通じない

田口 それから社宅を出たところにミゾがあって、そのフタがよく外れているんですよ。車のタイヤが落ちそうで危険なんです。それを主人がいつも直すんです。主人が直さなければ、いつまでたってもそのまま。

外で使う水道の蛇口が三つあるんですが、雨が降るとその排水口に雨水でゴミが流れてこんで、つまって水ハケが悪くなるんですね。そのつまったゴミを取るのも主人なんです。三カ所あるけれど三カ所とも主人が……。いつまでもゴミをためておくと水が溢れてきて大変なことになりますから。

そんなふうに自分が責任をもってやっているのに、その誠意が社宅の人にはちっとも通じないって感じなんです。

あまり気にして体こわしてもつまらないと思いますから、なるだけこだわらないように

からそういうことはしつけておきたいと思て……。子どももいやがらないでやっています。

はしていますが、何とも社宅の中ではつき合いがうまくいかない感じなんです。

編集部 社宅の外にお友だちは？

田口 外には意気投合する人が何人かいます。市政モニターをしていて知りあった人とか、市民会館に出席していて友だちになった人とか、自分を高めあうというか、いろんな話のできる人たちはいるんです。でもその人たちに、社宅の話をして、誰一人分かってもらえませんか。

編集部 昔のような共同体でのつきあいのパターンが崩れて、みんながテンデンバラバラでしょ。新しいつきあい方、住まい方のルールができていないのよね。ところで幼稚園の送り迎えの食い違いの問題は、どうなりました？

田口 もう子どもも小学校ですから、過去の

話、といえはいえるんですけど、相変らず声をかけてはきません。うちの子とあちらの子とも遊ばないし……。でもそんな状態でいても、何も感じていないみたい。あの人たちは編集部 故意に無視しているとか、意地悪してるとかではないわけですね。

田口 と思うんです。でもね、あの時の辛さは毎朝のことだったでしょ。何しろ口を利かないんですから。ことばの暴力ってよくいわれますけど、無言でいることの暴力ですよね。私自身、本当にあのやりかたには傷ついたんです。やっている本人は大したことは思っていないのに、他人を傷つけている、ということがあるわけですよ。

Bさんは私たちの住まいの真上に住んでいるので、「子どもがうるさくてすみません」って、郷里のおみやげや旅行のときのおみやげを持ってときどきあいさつに見えます。それ以外にはほとんどおつあいはいしていません。

私は心理カウンセラーですから、あくまで一つの問題を心理的に扱う立場を取っています。このことをまずお断りしておきたいと思えます。

人間は誰でも、他人と関わりを持ちたいと思っていますよね。しかしそう思っている他者へのアプローチが、必ずしも望ましい結果を生まないのはなぜでしょうか。

一般に、自分を取り巻く世界が自分に対して否定的・嘲笑的で扉を閉ざして中に入れてくれない、と感じる、田口さんのようなケースは女性に多いのです。

こういう方は一見そうでなく見えても、内面は引っこみ思案です。そして真面目で、義務感、責任感のつよい人が多いんです。自分自身、〇〇をしなけばいけない、

××をするべきだ、という考えが先行して、そうした役割や「べき」論の中で対人関係が柔軟性を失っている場合が多いのです。

田口さんのいうことのなかには、自分がどうしたいのか、何を望んでいるのかということがほとんど

で、自分は本当に何をしたい・思っているのか、ということが意識されていないのが問題なんです。何を望んでいるか、何をしたいか、で人間をとらえるのではなく、何をすべきか、でとらえる姿勢は人間を「役割」としてとらえる態度といえます。でもこの姿勢から

河野貴代美 カウンセラー

私のアドバイス



出てきませんよね。幼稚園から何時より早く子どもをよこさないように、といわれれば、それはルールだから守らなければいけない、社宅のゴミ捨て場が汚れていて先生に不快感を与えてはいけない、そういう「べき」論が先行してい

て、自分は本当に何をしたい・思っているのか、ということが意識されていないのが問題なんです。何を望んでいるか、何をしたいか、で人間をとらえるのではなく、何をすべきか、でとらえる姿勢は人間を「役割」としてとらえる態度といえます。でもこの姿勢から人間が分かりにくい。人間を千差万別の個人としてでなく、十把一からげに「役割」で括ってしまう危険がひそんでいます。

同じ団地の奥さんに「お宅なん

か給料がいいから……」っていわれたら黙っていないで「そんなことないのよ」ってすらすらといってみたらどうでしょう。向こうは意外にごく軽い気持ちでいっているだけかもしれないのです。

「役割」の中に閉じこもっていると、柔軟な対応ができにくくなり、素直に他人の中に入っていくにつけて肯定しつつ、やはり内面は苦しい、ということになりがちなんです。自分の周囲の状況を責める前に、自分というものに帰って、他人とどういう関係を持ちたいのか、自分は何を望んでいるのかを見つめ直してみる。そこから新しい人間関係が開かれてくる可能性があります。

山の 彼方の 空遠く



声楽に憑かれた私のヨーロッパ留学記

連載 ③

高木 梢

うしろめたい話

アカデミーの事務員氏の忠告に従って、国立と市立の入学試験を受け、両方合格した私は、どちらの学校に行くべきかと迷いぬいた。声楽の授業は体験してみる以外、判断の基準が持てないところに、難しさがある。

二つの学校に同時に在席できたら一番良いけれど、これは厳禁されている。

二つの学校を合法的に体験する方法はないものか？

私はある日、国立と市立の両方の事務所を訪れ、自分の取らねばいけない授業や、レッスン時間、ドイツ語の特別授業等について、具体的に調べてみた。何と、二つの学校とも、個人レッスンの時間が週九十分もある。一週九十分もの授業があれば、一か月も一人の先生に接するとおおむねその人のやり方が理解できそうだ。

全く初めて声楽のレッスンを取る人に

はむずかしいだろうけれど、少なくとも私は、自分が師に対して何を求めているか、かなり具体的なイメージを持っている。

感覚を最大限に磨ぎ澄まし、集中したら一か月で結論が出せるのではないか？
ここまで考えた私は、ある日コンセルヴァトリウムの学生課を訪れた。

「大変むずかしい質問があります。私のドイツ語が理解できなかったら、すぐおっしゃって下さい。私も貴女の話が通じなかったら、何回でも尋ねます。貴女の時間を少しばかり、私にくださいませんか？」

ブルーのガラス玉のような眼を持った学生課の女性は、私のただならぬ様子に、身体中を緊張させ、私の口もとを見つめている。

「日本にいる母が病気で倒れ、私にひどく会いたがっているのです。試験は合格したけれど、病院の母のことを考えると、落ちついて勉強できないのです。一か月

もしくは、三週間で良いのです。休学、または学籍保留、何か方法はありませんか？ ご存知のように日本は遠く、二日や、三日では時間がたりないのです。約束します。必ず連絡をとり、一か月以内に帰ります。事務手続としてこれが出来ますか？」

私は母を病気に仕立てた上で、一方を休学にし、その間にもう一方を体験した上で納得できたら国立に留まり、不満ならば市立のほうに引き返す合法的な方法を考えたのだった。

「手続きとしては可能です。特別な例として休学手続きを取ってもらいます。但し、貴女の主任教授と話し合い、教授がこれを認めるか否か、それは貴女と教授との問題です。教授が他の人に席を譲りたい……と申し出たら、我々はそれを拒むことはできません。一度教授と話しあった後、もう一度ここにきて下さい。私がこの問題に当たりましょう」

おお神よ、たとえ合法的であるにして

も、これが決して感心した方法ではないことを、私は充分知っています。といって他にどんな方法がある？

私はその足ですぐA教授の教室を訪れた。

「よろしい。お母さんを見舞っていらっしやい。一か月でなく、いつそ四か月、

一学期間にしなさい。そしたら、その間あなたの席を他の人にまわせます。次の学期初め、貴女が帰ってきたら席は再び貴女のものになります。しかし、五か月後に帰ってきて、再び席が欲しいといってもだめですよ。わかりますか？ また、あなたの留守中何か別の事情が生じることもありますから、十割の保証はできません。でも八割の約束はしましょう。早く準備して一日も早く出発しなさい。学生課には私からも話をしておきましょう。良い旅を！」

これが私とA教授との第一回目の出会いであった。話しあいを通じて、彼女の決断力や、身ごなし、人格全体からくる

強い個性は、強く私の心を動かした。

具体的には何一つ彼女のことを知らないのに、私の内部で大きく頷くものがあった。にもかかわらず、私の好奇心や欲望は果てしなく、勉強のチャンスを最大限に利用したいという思いが抑えられなかった。

巷の噂や評判が正しいかどうか、私の眼と耳で確かめたい。アカデミーというのが、どれほど素晴らしいところか、体験してみたい。

神よ、罪深き我を許したまえ……。

という次第で、合法的ではあるけれど、親切な事務の女性と、魅力的なA教授に内緒で、一学期間だけアカデミーで試験期間を持つことにした。

コンセルヴァトリウムと、アカデミーは、徒歩で五分ほどの距離にある。

母の病気を口実に休学した手前、コンセルヴァトリウム関係者からこの期間だけは姿を隠さなければいけない。

特にA教授と事務員さんには、私の影さえも見られないような注意が必要になる。違法行為ではないにしろ、自分の勉強のために、他人の善意を利用し、さらにその善意を裏切っている。精神的背信行為に私は強い良心の呵責を感じた。

うしろめたさは、自然に私の顔をうつむかせ、人の顔を正視しにくくさせた。交通整理のお巡りさんを見ても、ドキンと心臓が音をたてて鳴る。

警察が良心の問題にまで関与するわけがないと理性ではわかっていても、一歩でも早く彼等から遠ざかることを考え、安全地帯まで来るとホーとため息が出た。コンセルヴァトリウムに引き返す場合もあることを考えると、アカデミーでも強い印象を残してはいけない。

日本人の群れはいうまでもなく、人なつこいアメリカ人あたりが接近する気配を示すと、「今日は先約があるから、またいつか！」とことさら多忙そうに振る舞う。

四か月間はどこにいても控え目にして、出来るだけ友人や知人を作らないように駆け足で、横を向いて歩き、他人を接近させないような雰囲気而努力して作っていた。上目使いで人を見る犯罪人や、渡世人の心境が理解できるように思えた。

精神衛生上よろしくない数か月だったけれど、かわりに私は独自の貴重な体験をした。自分の人生を方向転換してしまっただけ、納得のゆくものに出あうまで探す以外ない。

前進あるのみ……私は自分自身に号令をかけ、空元氣をつけながら、枯葉が舞い、焼栗の匂いの立ちこめるウィーンの街で、新しい学生生活を始めた。

アカデミーの現実

アカデミーで私を拾ってくれた教授は、発声についての博士号を持つ親日家の女性で、六十二歳。

彼女の夫も作曲とピアノの教授として同校に働いており、二人は日本の関西方

面の学校との交流があり、数回渡日したことがある。そんなわけで、弟子の大半が日本人で占められ、母国人のほうが少ないというクラス編成。他にスペイン人、ルーマニヤ人が少数混じり、合計で十六人。

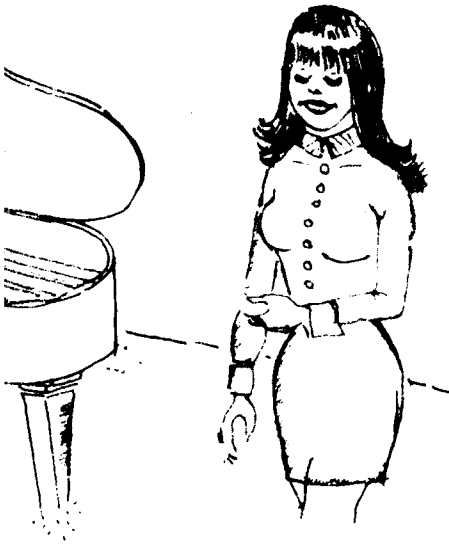
朝九時、一番早いレッスンが始まる。

眼はさめていても、身体のはうはまだ半分くらい眠っている。普通の先生ならば用心深く、下の音から順を追って声を出させ、のどに負担をかけないように導い

てゆく。ところが彼女は、プロの歌手でも悲鳴をあげそうなむずかしい技術や、高い音をいきなり要求する。

「起きて間もないので、高いほうの音は出ません」と言う、「いつならば出ますか？」とジロリと弟子を眺め、「勤勉、勤勉、もっと早く起きなさい」と言う。

どんな歌手でも、午前中は完全な調子が出てこない。本格的に声が出てくるのは、起床後、五、六時間後になる。彼女の要求する勤勉さを守ろうとするならば、



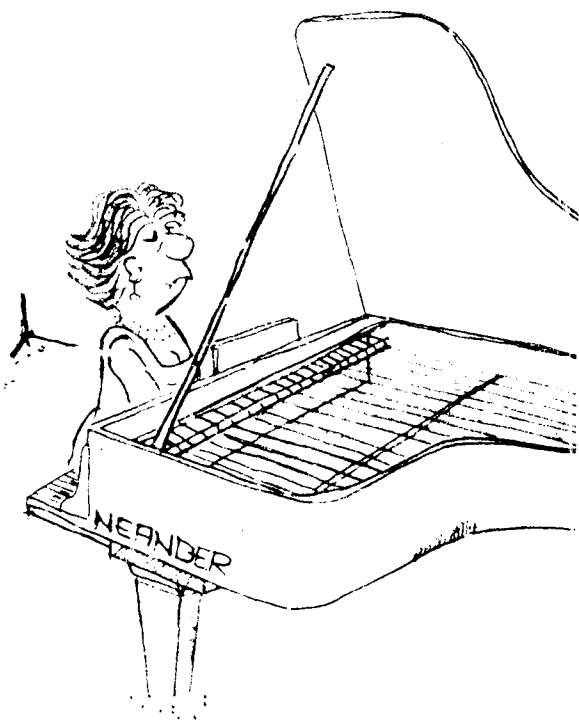
朝の四時か、五時に起きねばいけない。

いかなる理由があつて朝の九時に高い音を練習する必要があるのかは、聞きそびれてしまったけれど……。

さらに困ってしまうのは、弟子の水準と恐ろしくかけ離れた途方もなくむずかしい技術を一律に全員に要求することである。

チャッカリしている私は、出来ないことは早くことわり、別な練習を自分から教授に提案して、自己防衛につとめたけれど、従順な生徒は顔をゆがめ、身をよじり、苦悶のかぎりをつくしながら、要求に応えようとする。怠慢でやらないのか、理解できなくて行動に移せないのか、身体条件が整わないのか、見たらわかりそうなものだけれど、自分の論理に人体のほうを当てはめてゆこうとする方針の彼女は、絶対に譲歩しない。

「どうぞ、どうぞ、一体どうしてこれが出来ないの？ どこがわからないの？」胸に両手を組みあわせ、祈りでもあげるよう



な仕草で、怒りとも嘆きともつかないイライラした口調で、生徒をおおりたてる。真面目な人であればあるほど、彼女の声と仕草に興奮し、あがってしまう。

一か月もすると、弟子の九割以上が彼女の要求する水準に応えられないのがわかってきた。

弟子の出来が悪いと、彼女も面白くないらしくムツツリしてしまう。

九割以上の弟子が彼女の要求に応えられないとすると、彼女はほとんどの時間、不機嫌でいることになる。

まぐれで良い声が出ると「ブラボー、ブラボー、今に劇場からあんたをスカウ

トに来るよ」と叫び、キスしたり、抱きしめたりの大騒ぎをするけれど、調子はずれの上機嫌は、却って普段の不機嫌を際立たせ、心はいっこうに弾まない。

六十二歳といえば人生の実りの季節にある。育てた弟子が舞台で活躍し、学問上の後輩がいても不思議はないが、それらしき人を見たことも、噂で聞いたこともない。

教授はウィーンの旧家の出身とか。娘時代パリに留学し、自宅では仏語で話す家庭に育った一人娘。我儘いっぱい育てられ、他の人の気持ちや、迷惑を気にする必要がなく、結婚後も子供がなく、夫に甘やかされ、未だに大人になりきっていない。

ある日、彼女を車で迎えに来る夫が約束より半時間ほど遅れて現われたときのこと。

「あんた一体どこで何をしていたの？ 約束の時間を忘れてしまうほど年だったの？ それとも、いつものように眠り

こけて遅くなったの？ どっちなのよ！ 返事できないの？ どういう理由なのよ？ 言えないの？」

彼女は生徒の前で、眼を怒らせ、両足を踏みならし、歯がみしながら夫にどなり散らした。夫はいっこうに逆らうふうもなく、恥じる様子もなく、ニヤリと挨拶がわりの笑顔を、顔見知りの生徒に送り、ウインクすると、無言のまま彼女の腕をとり、車のほうに連れてゆく。こんなことは、日常茶飯事。

自己中心で他人の迷惑を気にしないという長い間の習慣は、忍耐力、洞察力を総動員して、他人の身体の状態を観察し、長い間努力を重ねてゆく声楽の授業には不向きといえる。わずかな時間しかレッスンを受けてないから断言はできないけれど、彼女には、人体を見ずして、自分の論理を全ての人体に当てはめてゆくこととする強引さと、乱暴さがあった。

おとなしい人はこのレッスンを真剣に受けとめてのどを壊したり、八年間も彼

女の下で勉強したのに「卒業資格をあげるだけの技術が身についてない」と教授会で判定される人が出たり、悪い噂だけが耳に入る。

二十年は昔に作ったと思われる古い型のくたびれたスーツ。ふいたら却って汚れそうなハンカチをゴソゴソとポケットから出し、息を吹きかけ吹きかけ眼鏡の掃除をし、その同じハンカチでブリンと鼻をかみ、「さて、誰のレッスン？」と虚ろな表情で生徒を見渡す。レッスンの時間割は自分で作ったのに、誰がレッスンに来るのか、まるで覚えていない。こんなレッスンの接していると、意気消沈してしまう。

どこぞにもっと良い先生はいないものか。私はせっせと聴講に出かけることにした。

あてにならない有名教授

まず足に向けたのは、往年の有名なテノールD教授の教室。

折しもモーツァルトのタミーノのアリア（魔笛の中の主人公のアリア）の指導中。「この人が世界のオペラファンに知られているD氏か……」と私の顔は多分、あからさまな好奇心と賛美を表わしていたことと思う。

「ダメダメ、汝はまた何か考えている。

もっと歌う、歌う。技術のことを忘れて、思いきって声を出す……そこ、そこ、支え。今だ……そう、前よりよい。その調子。あーまた何か考えている。カンタービレ、カンタービレ……」情熱的に指導しているのは、気に入った。

ところが他にも聴講者が三、四人いたせいか、途中から自分が昔偉大な指揮者と共に仕事をしたときの思い出話に移ってしまった。同じ指揮者でも、舞台と録音とはかなり音楽づくりがちがうこと。歌では特にフレーズの作り方、息つぎの場所が大きくちがってくると、具体的にタミーノのアリアで歌ってみせてくれた。

経験者の話だけに面白いけれど、ふつ

と時計を見たら、この話に二十分もかけている。生徒が歌った時間より、D氏の話していた時間のほうが多い。それにこの生徒、まだまだ舞台上に立ったり、録音に出むいたりするほどの実力はない。

聴講者のために、特別公演してくれたのか？ 教室を出た後、D氏に師事して三年目というアメリカ青年に様子を尋ねた。

「良い人で、熱心に教えてくれるよ。でも見ただろう？ 彼は思い出話をするのが好きでねー。あれが始まると、五十分を彼が話し、十分だけ生徒が歌うなんてことになるのさ。メモワールは聞きたくないなんて言えないしね。あれが困りもの。特別満足しているわけでもないけれど、移ってゆくほど良い先生が他に見当たらないんであそこにいるというわけさ」

なんだか日本と似ていないか……。

薄グレーのスーツに紫色のブラウスと高い靴。老人の多いアカデミー校内でひとときわ目につくS教授。彼女はD教授ほど有名ではないけれど、可憐な娘役と歌曲で音楽ファンを魅了した往年のソプラノ歌手である。日本で彼女のレコードを聴いた記憶があり、訪れてみようと思った。それに何と彼女の容姿の美しいこと、上品なこと。

二度にわけて、半日以上聴講した結果。建物で例えると、汗を流して全力をあげて基礎工事が必要な時期に、土台も、骨組もないところで、花をどこに置こうか、カーテンの色は何色が似合うかと話している。

生徒も（九割五分まで女性）この美しい指導者と気があうらしく、一緒に頑張って装飾品の心配や、コーヒークップの銘柄の選択に余念がない。

サヨナラ、私には声楽の基礎工事が必要なのだ。名前と、美しい容姿に惑わさ

れた私がバカだった。

生徒を甘やかす無名教授

有名人を訪れるから、期待が大き過ぎて、失望するのかと方針を変え、無名の仏人を訪れた。年のころ四十代半ば、働きざかり。白いワンピースに白いブーツの一見歌手風に装ったオーストリアの娘とレッスン中。聴講の申し出をすると、「もちろんです。どうぞ、ゆっくり聴いて下さい」と下にも置かぬ。

愛想の良い顔を弟子にも向けて「今日はお客様があります。良いレッスンになると良いですね」と弟子にも愛想が良い。歌い出した娘の声はコロラ・チオラ・ソプラノ。例の人間離れた高い声である。扱っている曲はホフマン物語の中の人形の歌。高い声は出ているけれど、音階を歌っていて音が正確にとれていない。注意するかなと思いつながら見ていると、「素晴らしいよ、そう力まないで、軽く、軽く……力をぬいて、もっと軽く」と

発声に関する注意だけ。でも娘のほうは「力まないで」と言われたところは満身の力を込めて、「軽く、軽く」と言われても、上から押しつけるように重苦しく歌い、彼の注意は一つも受け入れていない。一番良かったのは、曲の終わりの最高音Es^ミの音。この音は普通のソプラノの出す高い音C^ドの音よりも三音高く、まさに人間離れた音の典型的な例。

聴講者の前で最高音を鳴らし、二人共満足そうにうなずき、音程の正確なことには触れずに次の曲に移ってしまった。曲目はラ・ボエームの中のムゼッタのワルツ。人形の歌に比べると中声音も混じり、作曲者ブッチーニの独特の音楽の流れがあり、機械的には歌えない曲である。

一回通して歌わせられたところを見ると、まだ譜面が正確に読めていない。三回ほど同じところを直され「ええ……あ……そう」などと娘のほうは馬耳東風、恥じるけはいもない。中声部は全くのス

カ、スカで肉声としてあるべき姿には遠く、ただ高い音だけが笛のようにピエー、ピエーと鳴り響く。

先生、さすがに困り果て「愛するヴェラ、我々は少し中声部の練習が必要です。アリアは置いて、少し発声の練習をしましょう」歌い出した声はバリトン。中声部はこの人が充分教えられるはずなのに……。

練習を始めたのは良いけれど、娘の中声部は、弱音ペダルを使ったときのピアノのように鳴らないし、響かない。

良いところを見せたいと思っている二人は次第にあせりだし、ことに娘のほうは自分の苦手なところをバカみたいに繰り返させられ、面白くないらしく、ついに怒りだした。

「あのねー、私はねー、コロラ・チオラなの。どんな一流の人でも若いうちには中声部は歌えないんです。グルベローバ（若手の売り出し中のコロラ・チオラ・ソプラノ。ウィーンその他、世界の一流劇場で

歌っている) だって中声は鳴ってないんです。でも一体誰が、誰が高い音を歌えるんです？ 誰もいません。中声部なんて年をとれば自然に出てくるんです。それに今日は技術テクニクの練習日でないんですから、私はアリアが歌いたいんです！

「OK、OK、アリアを歌いましょう。」

でも知っておいて下さい。中声がないと歌曲は歌えないし、いつもEsの音だけではアリアも曲として不可能ですよ。もっと練習しないと」

「どんなふうに？ 先生と一緒に練習しても音がすわってないのに、私が一人でどうして探せるんですか？」

「だから私の言うように、一音一音注意深く……」

「あなたの言うことを三年も繰り返ししましたけれど、成功しなかったではありませんか？」

「お嬢さん、お嬢さん、ま、そう興奮しないで、初めからもう一度、やり直してみましょう」

彼はもみ手をせんばかりに生徒をなだめ、中声部の練習をするのかと思ったら、予想に反してアリアを歌い出した。

お嬢さんオモイガルとムッシュのレッスンは、一番の問題点を避けて続けられてゆく。

次には日本女性があらわれた。譜読や音の正確さはないけれど、声にビブラート(一つの音が上下に必要以上に振動する)がかかっている。

持参の曲は仏歌曲。ムッシュは母国語だから、かんで含めるような発音指導をし、一見優等生ふう日本女性を恥じ入らせ、辟易させている。二曲の練習をするのに二十分。

熱中して指導しているのは発音だけ。曲想も、発声のビブラートについても注意がない。三曲目、道化師の中のネッダのアリア。曲がイタリヤものになり、朗々と豪快？に歌いあげるようなところになると、欠点が如実に見えてくる。

のどと口先だけで歌い、身体が使えていないから声が細く、いかにも素人くさい。

い。かなりむずかしい技術を駆使しなければ歌えない曲を、技術もないのに歌うから、メリハリがなく、劇的効果や迫力が感じられない。童謡を歌っているところ、ようどいい人に、いきなり大人の歌を与えたようなもの。

私にも具体的に身体を使って歌う方法や、技術は理解されていなかったけれど、他の人が出来ているか否かはすぐ判断できた。この基礎が学びたいために、これを実体的に勉強したくてヨーロッパまで来たのに、何かこれに近いヒントか注意が与えられるか、かたずをのんで待ち受けていたのに、ムッシュは上機嫌にレッスンの成功を喜び、ビブラートのことも、技術のことも触れてこない。やはり一番の問題点を避けている。

善良で親切この上ないけれど、平凡な上、生徒の一番の弱点を避けて通るムッシュに自分の身柄を預けたら、半年もしないうちに毎日ヒステリーを起こすだろうと想像して、この教室を後にした。

レッスンは金につながる

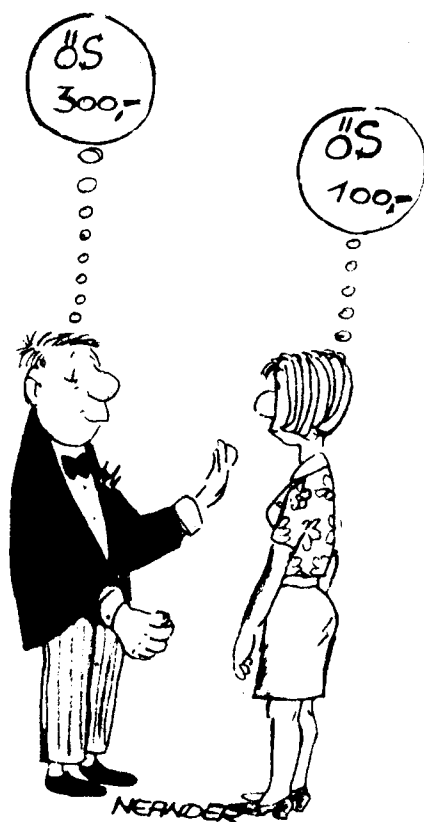
アカデミーの音楽科は二十五クラスあり、そのうち十五クラス聴講した。どうも面白くない。私の求めている決定的なものに出あわないのだ。

アカデミーの教授で一人だけ六割くらい納得のゆく技術を教えていたオーストリア人がいた。他の人に比べると、無理な発声法をとらないこと、教師稼業に徹底し、ムダ話、バカ話（オーストリア人はこれが大好き）が少なく、時間内は誠実に教える。

ただ教育者としての品位や、芸術創造にたずさわる人の豊かさや、感覚の新鮮さが無い。

これが心貧しく思われ、いま一つ魅力に欠ける。さらにもう一つ気になることは、「機会あらば、一シリングでも多く稼ぎたい」という即物的な金銭に対する執着を、はっきりと態度に出すこと。

クラスの三分の二が日本人で占められ



ているのがめずらしくないアカデミー校内で、花嫁修業の一つとしてウィーン留学している日本人女子学生が気前よくお金を使うのは、ウィーン中に知られている。こういう人をつかまえては、学校の正規のレッスン以外にも、自分のレッスンを取るように上手にすすめる。毎日欠かさずテクニクのレッスンを取れば早く上達し、短時間で集中的に学べる。せ

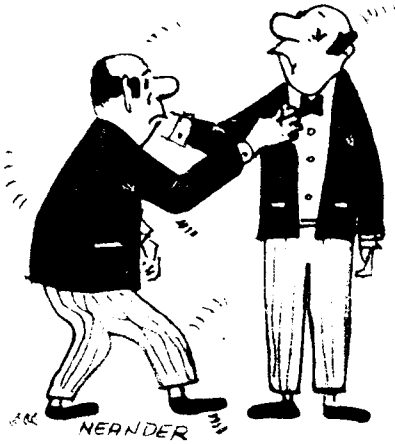
つかくの留学期間は有効に使うべきだと誘いかけ、生徒のほうから個人レッスンの申し出をするよう計画的に導いてゆく。

これが彼の常套手段。私にも個人レッスンならば与える用意があると申し出てくれた。彼のクラスに入り無料でレッスンが受けられたら考えてもいいけれど、別口月に謝を支払うほど魅力のあるレッ

スンでもない。第一私にはそれほどの経済的余裕もない。

彼だけではない。聴講してまわったクラスの教授達が、男女を問わず、しかもかなり多数の人が、金銭に対する執着を露骨に表現し、行動に移す。何かとチャンスを作っては、かき集めて、懐に入りたい素振りを見せる。

盗みをするわけでないから、非難はで



きないけれど、五シリング、十シリングのことで口角泡をとばして（ドイツ語は破裂音が多いせいかな本当によくつばがとぶ）争っている姿を見ると、人間の尊厳が地に落ちたようで、氣落ちしてしまう。こういう争いは、有名教授と無名教授の間で、生徒の個人レッスンを取ったの、取られたの、学籍を無名から有名に移したときなどにあちこちで見られた。

驚いてしまったのは、廊下を歩いていて無名氏が、有名氏の衿首をむんずとつかまえて、取っ組み合いを始めてしまったとき。

無名氏のほうが先に有名氏につかみかかり、「お前が俺の生徒を盗む……」というふうな言葉をきれぎれに叫んでいたけれど、興奮しているのと、両方がどなるから正確には聞きとれなかった。

びっくりして大声で叫んだら、あちこちの教室から他の教授がとび出して来て、二人を引き離していた。

ヨーロッパに來たら、毎日が三段飛のように前進につぐ前進が出来る空想していた私の夢はここで終わり、覚悟を決めてコンセルヴァトリウムに復帰することを考え始めた。コンセルヴァトリウムのA教授が自分とうまくあうか否かの保証はないけれど、十五クラスも聴講して、しんから納得する相手に出あわなかったことに失望してしまった。

レッスンは受けなかったが、ただ一度あって話をしてみて、私の内部で深く頷くものがあつたA教授の人格に全てを賭けてみようと思心した。

不幸にしてアカデミーの欠点だけを拡大して眺めたのかも知れないし、言葉の不自由な私の誤解や、習慣のちがいもあったと思う。他にも良い人がいたのに、私が見のがしたのかも知れない。

一学期の終わり、再び母を病気に仕立て、今度は帰国すると事務所に申し出て手続きをとり、私はアカデミーに別れを告げたのであつた。（え・NEANDER）

投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

生きてます 活字人間

目の鱗、落としてますか？

もしかしたら小さいなじゅくはユートピア
私塾霞国語教室風景

武田 秀夫 著

青梅の郷に風変わりな国語塾がある。主の武田秀夫さんは、中学校の教師を二十一年、教員組合の闘士でもあった人。四年前の三月、その仕事にピリオドを打ち、六月、自宅に小さな塾を開いた。

東京都調布市 半田たつ子

奥多摩の山々に沈む夕日を眺めるその部屋を、武田さんは、まるで針穴写真機という。小さな箱舟という。

紅茶など飲みながら、子どもたちと、グリム童話、ギリシャ神話、

誰も知らない小さな国……を読む。大人たちと、宮沢賢治、漱石、独歩……を読む。

テーブルに向きあった子どもたちを横に見る位置で本を読み始めると、ブランクブランクとゆれる足、貧乏ゆすりの足……。教師をしていたころ、上から見おろす形の授業では気がつかなかった机の下の子。子どもたちの一見平靜で明るい外見の奥にひそむ不安な心、本人も意識していない心の焦燥、それを武田さんは足の動きにみて

とる。

それは「勉強ができないということをおぼろけがらずに認めるようにならない限り、前へ進めないよ」というような、正しすぎるお説教によっては、そう簡単にいやされないものなのだ。

「そんないい塾があるの？ でも、青梅では遠いわねえ」。教育ママはつぶやくだろう。「武田さんほどの人が、なぜ教師をやめたのか。学校がこんなに荒れている今、良心的な教師に廃業を誘い出しはしまいか」。学校に残る教師は数くかもしれない。

二つの声の中に、武田さんの当惑した顔が浮かぶ。霞国語教室とは、もしかしたら小さなユートピア。虚実皮膜の間に存在するはかないイメージなのに、と。

でも、これだけは確かなのだ。霞国語教室からの通信は「新しい

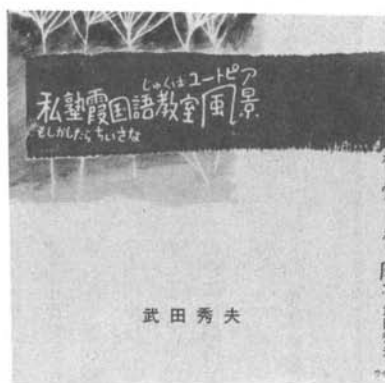
家庭科「We」というささやかな雑誌に三年間連載され、多くの読者を魅了した。「私は『雪と犬とフルート』」「あら、それより『倦怠』よ」「ぼくは『満月とブラハ』」「絶対に『すすきの穂の打擲』よ」。みながお気に入りの文章を競い合ったということ。

武田さんがまた、その月の原稿をポストに投函したあと、いつも「ああせいせいした。どうもから

だにちょうど合うほど書いているくらい、いいことはありません」とつぶやいて、ひとりおもしろがったということ。

編集者みよりに尽きる思いを三年間味わってきた私。いましゅうしゃな本にまとめて、あなたに呼びかける。武田さんのみずみずしい世界に、どうぞ憩って下さいますように、と。

(ウイ書房 一七〇〇円)



武田 秀夫

例えば地球を転がしてみたり

奥津さちよ著

この本は、父と母とで開墾したという山の上の畑で暮す一人の年若い農婦の、いわば生活詩といっ

てよいでしょう。

鉄道の支線を延ばすために、山が割られ、谷が埋められ、畑がひつかきまわされている東京近郊の地。昆虫や草木など、生きものの循環が断ち切られていく——。「あばら骨や心臓まで掘りおこされる畑の身にもなつてごらん」と嘆く彼女の心の震えが、読む者の胸を鋭くつき刺します。

自分の子も他人の子も、ひっくりめて「地球の子」と呼ぶ著者。キャベツもキュウリもカマキリも、

東京都大田区 柴田 知子

すずめも犬も、それに人間様だって、みんな自然の一部、地球の一部です。人間の欲望のためだけに地球が削られ、削られていくにつれて人間自身の心までも削られていくのだとしたら——、恐いことです。

昨日まで一緒にプレーしていたスポーツ仲間の一人(著者)が、プレー中に負傷したことによって、それぞれの心が閉ざされてしまう「ピンと豆」「二月のその日」は、優しさを削りとられた人間の心もようを、せつなく、ときにはユーモラスに描いています。実は、そうした事件が起こる以前から、彼

女らには、いざとなれば夫や子ども
の背後に逃げこむ保身の構えが、
ちゃあんと用意されていたのでは
ないか。

しかし、著者である奥津さんの
住む地域から、さして遠くないと
思われる神奈川県逗子市では、主
婦層を中心にした『緑』（池子の

森・米軍弾薬庫跡地）を守ろうと
する市民勢力が、中央の政治さえ
も大きく揺り動かしつつあります。
三十代半ばの著者の今後はむろん
のこと、イキのいい多くの女たち
の将来に期待せずにはいられませ
ん。

（冬至書房新社 一五〇〇円）

ワンニャン探偵団

上村 英明著

東京都武蔵村山市 大沢 陽子

『ワンニャン探偵団』という本を
読みました。「戦争中に、家庭で
飼っているイヌが警察へ連れてい
かれて殺された」ということを知
った探偵団の面々が、「イヌを献
納しよう」と書いてある本物の回
覧板を捜し出し、これがなんのた
めに、どこで、どのようにして作

られたか調べていきます。はがさ
れたイヌの皮が何に使われたのか
も。子供むきに作ってありますけ
ど、大人にとっても、興味深い事
柄を扱っています。

回覧板を出したのは民間の団体
でした。なぜそういう回覧板を出
したのか、そのところがはっき

りしません。回覧板を受け取った
人の悲しみはよくわかりました。
イヌを供出した人の文が載ってい
たからです。イヌを家族の一員と
思って暮らしてきた人にとって、
殺されるとわかっていて、イヌを
さし出すのは、身を切られるよう
につらいことでした。乏しい食物
を分け合い、いたわり合って暮ら
している人たちから、イヌをとり
あげる権利なんか誰にもないのに、
戦争中は、こんなこともスナリ
行なわれてしまうようです。

「ネ、ちょっと読んでもいい？」
近くでテレビを見ていた夫に聞く
と、「いいよ」といつてくれたの
で、私は、クロを供出した人の手
紙と、メリーが殺されたときのこ
とが書いてある手紙を読みました。
かわいがっていたイヌを供出する
人や頼りにしていた飼い主に助け
てもらえず殺されていくイヌの悲

しみが手にとるようにわかって、
涙がポロポロこぼれました。その
うち声も泣き声になり読めなくな
って、「あ、だめ、かわいそうで」
と、涙を拭きに台所に立つたら、

「おかしいネ。チーコ」と、夫は
そのひざにまあるくくなって眠っ
ているチーコに話しかけ笑っていま
した。そういう夫も、水につけら
れて殺されたまあるい目のネコや、
殺されて皮をはがれたイヌたちが
かわいそうでならないのです。
雨もようの、土曜の午後のこと
でした。



今、戦争中のいろいろのことが掘り起こされ、記録されています。これもその一つです。嫌なことを、なぜ、嫌といえな

主婦作家として成功する方法

エレーヌ・ファントル・シンバーグ著
赤尾 秀子訳

神奈川県大和市 野路あゆむ

「主婦作家として成功する方法」だなんて、「わいふ」の読者諸姉なら、ちょっと、読んでみたいような、題名ではないかしら。もっとも、私は、作家をめざしているわけではないのですが、家で仕事をしている者として、共感するところがありました。私は、在宅のパソコンプログラマーをしています。家について、自分で、自分に、仕事をさせることのむずかしさを感じています。

かったのか、なぜ、泣く泣くいわれるままになったのか、そのところをくわしく知りたいと思います。 (ポプラ社 八八〇円)

家事という、際限のない仕事に對して、どれくらいまで、やればいいのか、そのあと、どれだけ、仕事をする事ができるのか。家について、自由になるからこそその悩みです。

(締め切りに追われて、そんなこと、考えているヒマもないときもあります)

また、一日中、家にいれば、困りから期待されてしまう様々な役割があり、自分自身がそのとりこ

になってしまつて、仕事の遅れの(自分に対しての)いいわけにしまつてしまうようなこともあります。

この本は、家について、作家(広い意味で)として、書くための時間をいかにしてつくるか。家事の手抜き、家族、友人とのつき合い、家庭をオフィスにする方法等々、かなり、こまかいテクニックも書いてあります。ちょっと、アメリカ

流で、すぐに自分の暮しに結び付かないところもありますが、ヒントには、なるでしょう。そして、それ以上に、やはり、どの国でも、家にいる主婦の悩みは、同じだなあと、それを、アイデアと、強い意志と、ユーモアで、乗り越えようという著者に、勇気づけられます。

(講談社 九八〇円)

妻たちはガラスの靴を脱ぐ

田中喜美子著

東京都新宿区 駒尺 喜美

あまり本を読むのは好きでない私が、寝る前にちよつとだけ、と思って手にとつたこの本を、とうとうやめられなくなつてしまつて一気に読んでしまつた。

私にはそれほど面白い本であつた。私が以前から考えていたことが、この本に具体的に書かれていたからだろうか、と思う。今までは女の「不幸」が問題にされていた。不幸とは、姑にいびられたとか、暴力亭主に腰骨がず

れるほどけとばされたとか、飲んだくれ亭主に泣かされたとかいいう結婚の中で受身の立場におかれていた、女に降りかかる悲劇である。女がこういうことに耐えていた時代を女の「不幸時代」と私は呼んでいたのだが、最近それが「幸福時代」に変わりつつあるのではないだろうか。

このルポに書かれている女たちのケースを見ても、これまでのものと全く性質が違うドラマがある。たとえば第一話。相思相愛の夫婦なのに、夫の単身赴任を契機として、妻が幸福を追求すればするほど、今まで信じていた「幸せ」の内容が見えてきてしまう。「幸せ」が幻想にすぎなかった、それは構造の問題なんだということが「幸せ」を追求する中で見えてくるのである。

たまたま「不幸」な結婚をした

からというのでなく、幸福な結婚の中で何かをきっかけにして、結婚制度の仕掛が純化された形で露出してくる。つまり、ようやくいま、イブセンの「人形の家」の時代が日本にもやってきたのである。「ヒバリちゃん」と呼ばれる幸福な妻のノラが、「不幸時代」には誰も疑問さえ抱かない、「幸福な結婚に反抗して家出してしまいう受身で運命に弄ばれるのでなく、女が幸せをつかむために結婚の鳥籠の外に出る、それと同じ時代に日本の女もようやくさしかかったのだ、とこの一冊を読んで痛感する。

もうひとつ感ずることは、いま三十代から下の世代は、いわゆる「女役」を「演じて」いるんだなあということだ。

三十代以下の年齢の女たちは、親から「女の子らしく」育てられ

てはいるのに、四十代五十代の女たちのように、その女らしさが骨がらみでしみついていてのではなく、いわば「女役」を演じているだけのようと思われる。

女らしさが本当のいみで身についていない。取りあえずそのほうがトクだから「女役」を演じているだけで、何かに立ち向かわなくてはならなくなったとき、まるでお面を脱ぐように「女役」の役割を脱ぎすてて現実に立ち向かうことができるのである。それができるということの基盤には、やはり女

性の教育程度が高くなったという現実があると思う。

例えば第二話の、この中で一番年齢の高い妻は、そのためか自分の「女らしさ」をなかなか脱却できないでいる。それにひきかえ第三、四、五話の女性たちは、夫の本当の姿をみてとるリアルな眼をもち、自分自身を立て直す動きをもっている。

「女の幸福」という鳥籠からも、女たちは飛び立ちはじめた。

(汐文社 一二〇〇円)





松田道雄の



安心育児

子育てに迷った方へ
新しい育児観！
青森県立大学の書！
松田先生がアドバイザーの書！
田縣・父縣必読の書！

お母さん、
一番の名図！



ただ今、
話題沸騰中
絶賛発売中

単なる育児書ではなく、人間の命をいとおしめ、幼い者を守ろうとする断固とした血脈が通っており、その優しい語り口は読む人に安堵と自信をもたらせる。
朝日新聞61年4月7日書評

一般的な育児書とちがって、納得できて、楽しくて、たのもしー！ああ、こんなこと心配なくてよかったんだワとホッとしてました。

愛知県尾張旭市 浅見昌子さん(24才)

本の中で先生がおっしゃっている通りの事が何度もありました。もっと早く、この本を知っていたら……やっぱり、母親としての自信が大切ですね。

青森県むつ市 名久井陽子さん(26才)

定価1,200円(税別) 小学館

投稿ホットライン——言うべきか、言わざるべきか

親のホンネ

この際言っちゃう！親だから、感じることにいっぱい

夜中の一人泣きの記

東京都江東区 織田 裕子

「もう慣れてるもん」

息子は元気にそう言う。強がりなのか、心底そうなのかはわからない。そのときは私もさっと聞けた。

「もう慣れてるって、お元気でよろしいですね」

との同級生の母親に、
「ええ、まあ」

と軽く返事ができた。小五の二男は喘息

で今年の一月より千葉のほうへ入院して
地元の学校へ通学している。一月九日に
入院しやっと二カ月になる。

「慣れてるもん」発言のものは息子は二
歳前からの喘息発作のため、小学三年、
四年とやはり千葉の健康学園で寄宿生活
を送っていたのだ。二年間をなんとか元
気で過ごせたので、あとは親元で頑張っ
てみよう、と多少の不安はあったけど親

子とも希望で胸いっぱいの状態で退園し
てきたのに、やはり駄目だった。

念願の野球部に入りユニホームも揃え
ただけど発作の連続で苦しんだ。

今日面会にいった元気な姿を見てさき
ほどまではもうすぐ春休みで帰ってくる
と思い、楽しかった。面会より帰り、一
人で炬燵に寝そべって新聞を読んだら
友人から、



「かんころ餅食べにくる？」
と電話をもらい、

「うん」

といそいそとでかけ、友達がいってくれることも嬉しく、ほんとうに楽しかった。

その後、NHKの「妹」というテレビを観ていると、主人はマージャンで遅くなるとの電話。テレビの内容は途中より障害者になった兄と妹の話だった。

その中で頑なになってしまった障害者の兄に妹が、

「頼れる人には頼るのよ」

というセリフがあり、私も、

「そうだね」

と納得した。頼れる人には頼るかわりに、私達もできることはやってあげる、そういう精神でいこうと子供のことも含んでそう思った。それと、

「欲を捨てることと障害を認めることは違うよ」

というセリフにもほんとうにそうと納得した。でもこのへんから私はおかしくな

ってきた。涙がポロポロポロ落ちてくるのだ。誰かと話したいと思う。

でも一人一人の顔を思い浮かべて、こういう気持ちを今は誰とも共有できないと思う。たとえ、夫とも、母とも。ポロポロ泣いて相手を戸惑わせたくない。今の状態を見ていつまでも悲しんでいると思ってもらっても困るのだ。

「いつでも泣いてるの？ 子供はそっちのほうが良いのよ。つきはなして育てたほうが自立するのよ」

と言ってくれた人もいた。でもそういうでもない。いつも泣いてなどいられない。ただ単に元気な子が羨ましいとか、息子が可哀想だとかではない。自分にも掴みづらい、この不安定な寂寥感いっぱい今のこの状態は、一人でポロポロ泣くより仕様がなない。

今はただ、

「もう慣れてるもん」

というその言葉がせつないのだ。

(え・早乙女光子)

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 事↓こと 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで etc

◆送りがないについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変(わ)る↓変わる 浮(か)ぶ↓浮かぶ 話(し)合う↓話し合う 気持(ち)↓気持ち 行(な)う↓行なう 表(わ)す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお願致します。

わいわいガヤガヤ

数学人間から投稿人間へ

愛知県豊橋市 谷山由美子

えっ！ ウッソー！ ほんと？ 先日某雑誌より千八百円（所得税二百円をしっかりとられるんですね）が届いた。私の書いたひとことが掲載されるらしい。生まれて初めて書いた投稿である。（よほど投稿者が少なかったのだろうか。半信半疑）

そして今日は、新聞への投稿が載っていた。生まれて二度めの投稿がまたもや活字になった。これが驚かすにはおれようか。

私には今まで投稿の趣味も経験もいっさい

なかった。何か言いたいことや、反発するところがあっても、頭の中でひとりカッカッとしているばかりでそのうちばからしくなってしまう。

ところが前者はアンケートの余白に書いたのだが、後者はある意見に対してどうしても言いたいことがあったので意を決して書いたのであった。読んでみれば、視野の狭さと思いがかりまる出で赤面の至りであるが、活字になったからには自分の意見に責任を持たなければならず、これはたいへんなことだと思った。新聞などはどのだれが読んでいるかわからない。やはりこれきりにしようなどと逃げごしになってしまふ。しかし、やはり採用されればうれしいようなくすぐりたいよう

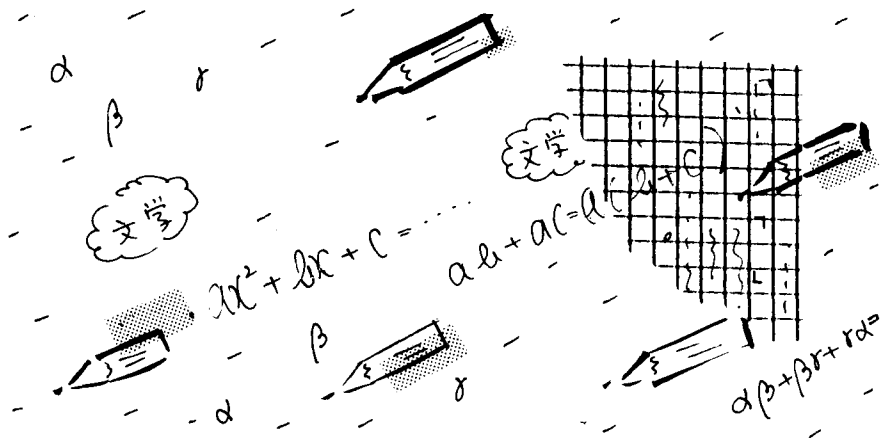
な気持ちには隠せない。

何しろ私は小学校入学以来、何が嫌だと言って文章を書くことほど嫌なことはなかったのである。作文だの読書感想文だのというのは、頭痛や吐き気がするほど苦手だった。書こうとしても私の場合は一行で終わってしまふのである。「おもしろかった」「楽しかった」「かわいそうだった」「頭にきた」それですべて終わりである。他に何か書くことはないのかと言われてもそうとしか書きようがないのである。

故に作文は出来事を細かく羅列し感想文は「あとがき」や「解説」を要約して枚数をかせいだ。

「わいふ」に投稿されるような方は皆書くことの大好きな文学少女でとうていこのような苦しみは理解できないかもしれない。かつて文系の友人をみて、なぜあんなにたくさん書くことがあるのだらうと思ひ、その表現のしかたに並々ならぬものを感じて感心したものである。

故に「わいふ」もひたすら読む側にたち、



「そうだ、もっと言えば、そのとおりだ」という感じで一人楽しんでいたのである。しかし、これを機会に、私も少し言いたいことを書いてみようかなどと思ったりしている。

もともと私は数学や理科が大好きで、問題を考えていると時のたつのを忘れてしまう。単純な計算問題は好きでないが、複雑な文章題などはがぜん闘志が湧いてきてあきらめきれない。そしてそれが解けたときの喜び。からまった糸がほどけたような、難解なパズルが完成したような、さわやかな快感をしみじみ感ずる。

今、家で中学生に数学を教えているが、いずれは高校生とも思い、高校数学をやり直している。さすがに大学受験の数学は難しい。しかも、三歳九か月と六か月の子供がいては一問解く時間さえもなかなか思うようにならない。

けれどもやはり好きなものというのは苦にならない。数学科に行かなかったのが悔まれるが、どこにいたって勉強はできる。これからの人生で今が一番若いのだ。思いたったと

きから始めればよいのだと思う。

話が横にそれてしまったが、これからもういふ”を”を楽しみにしています。そしてなるべく投稿もしていきたいと思っています。

それから、数学に興味のある人、おもしろい数学の本を知っている人、よければお手紙を下さい。

保護者とはだれ？

京都市南区

中村季代美

親という呼び名をいただいてまだ浅く、迷いと悩みは多々ある中、目下一つだけクロウズ・アップされたものが「保護者名」のこと。保健所、幼稚園その他で渡される用紙に必ずある「保護者名」の空白に、はて？と困ってしまったのです。父親の名か、母親の名か？今の我が家のシステムでは、子どもに付きそうのはほとんど母親の私です。

同じようにはて？と困った友人が、母親たる自分の名を書いたところ「母子家庭です

か」ときかれたそうで、ヨッシャ私も一度と
思って私の名を書いたのですが、係の人が忙
しくて見落としたのかどうか、反応なしでし
た。

皆さんは通常二名の保護者一名の名前をど
う判断されますか？

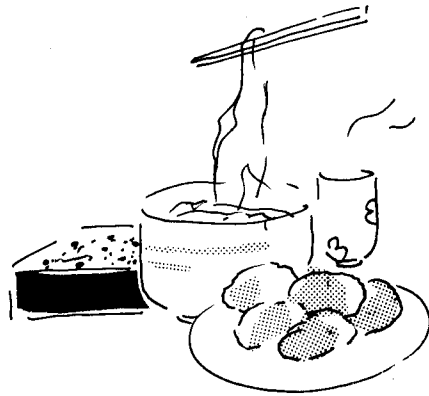
現代の常識

東京都東大和市 阿部 シゲ

私はもっぱら専業主婦、何の特技も持たな
い凡人です。だがただ一つ、友人と何らあ
らそうことなく交際のできることだけが、特
技といえば、特技なのかも知れない。

友人には十六歳〜八十歳に近い方を含めて、
年齢層には幅があるけれど、十六歳の友人は、
娘の友人である。

この間も数人の高校生が狭い我が家にやっ
てきた。このときとばかり、特技のない主婦
の腕まくりがはじまる。「何が、食べたいの？
甘いもの？辛いもの？」甘いものは、おは



ぎであり、辛いものは手打ちうどんである。

私の甘さと、辛さはこれだけのものなのだ
けれど、手作りの食物に縁遠い若い人達には、
結構受け入れられている。

三日前にも三人の子供の友人がやってきた。
餅類のすきなY子ちゃんのために「赤飯」を
作ってあげた。以前見えたとき、おはぎを食
べ過ぎて、翌日学校を休んだ経験の持ち主で

ある。

軽い夕食をして、帰るまで少し時間があつ
たので、コーヒーを入れようすると、子供
が「いらない、いらない」の一点ばりであ
る。けれど他の方達は欲しいかも知れないの
で、上等なおせんべいと、緑茶を差し出した。
しかし子供は怒っている。

どうして怒っているのか、わからない私に
対して、「本当に、非常識なのだから」「あ
なたのほうが、非常識ではないの」と言う私
に対して、「今はネ、お腹が一ぱいでも、出
してくれたものを、食べるのが常識なの」昔
者の私には、もてなしのほうで、常識と考
えていたのに、まったく逆なので驚いた。

「明日また、Y子が学校を休んだら、おかあ
さんのためなんだからね」私のほうでは気配
りのつもりが、まったく反対の意味になると
は、常識も変わったものである。しかし、二
歳や三歳の子供ではないのだし、十六歳にな
れば、自分で体調が整えられるはずである
と思う。食べなさい、食べなさいとおし勧め
たものでもないし、彼女達の自主性にまか

せて、何が非常識なのであろう。

思いやりとか、やさしさを忘れ去られたように、日々新聞や、マスコミ関係からきえてくるけれど、若い人達と、中年の人達との理解度が異なっているのは、一語一語の日本語の意味を、正しく理解することはできない。若い方達の来訪で、新しい社会像を知ることができた。

恐ろしい経験

兵庫県神戸市 久家 弘子

先日、私は寿命が五年縮む思いをしました。子育てを経験された人なら、こんな思いの一回や二回、あったのではないのでしょうか。

一歳六か月になる息子を連れ、三ノ宮（神戸）へショッピングに出かけました。土曜日の夕方、どこから集ってきたのかと思われるほど、大勢の人が行き来していました。息子は、歩けるのが嬉しいとばかり、通路を走ったり、階段を登ったり降りたりして、私は

息子の居場所だけは確かめながら買い物をしていました。息子がトコトコと店を出て走っていったので、追いかけていくと、息子との距離が十メートルほどあいてる間に、五、六人の人が入ってきて、その集団が横切ったときには息子の姿も消えていました。あわてて、息子がいた所まで走って行き、周りを渡渡しても、どこにもいません。一瞬、顔から血が引いていくのを感じました。

「なぎ」「なぎ」と大声で叫びながら方々捜したけれど、そのいなくなった場所は二階で、下へのエスカレーターも階段もあり、東西南北の通路も合流してる所で、行き先の可能性が広すぎ、どうしようもありません。北側の通路を捜しているときは、他のほうへ行ってしまうような気がし、もう、どうしていいかわからなくなりました。

「黄色の服を着た一歳半の子供を見ませんでしたか」と尋ねてまわりました。ある人に、「警備室に行行って捜してもらったかどうか？」と言われ、私も、自分一人の力では限界があるので、警備室に行こうと、階段のと

ころまで来たとき、二十歳ぐらいの女の方が、息子を抱いて、階段を上がってきて下さり、私はそれを見たとき、思わず、涙が出てきました。息子を抱いたときは、本当に自分の息子なのかと信じられないくらいでした。時間にしては、十五分ぐらいのでき事でしたが、こんな怖い目に遭うのは二度と嫌だと思いました。



<アインド・ア・ワード・クイズ> 200号おめでとう企画 by.MA

まないたひりたいきりたみ
あしらねたすごはんなしか
へほわらるみいえんんほ
ぶらいべいとるうむろうま
のめわさしいねしいちむろ
ちすいじせてんあよぼこん
たえがもうかほうるどくげ
ふちやわねそのあいおさつ
ゆこがついけやだやととは
しのやにぬふおじぬうなの
んつほんろふえんろさにじ
てとけのんさあかあんゆま

KEYWORD

まないた、ごはん、ほうとう、かてい、わいふ、しゃぶた
おかあさん、おとうさん、ぶらいべいとるうま、めい
わい、やがや、まじのはつけん、さるんえぶろん、
しつけ、あやのほんね、たらい、あいらん、みたりきたり、
みしん、あまはむ、おやじ、たいとこ、ごま、そうじ
たたみ、

★遊び方

KEYWORDの中のゴトバを上の方内から採
るのです。制限時間は3分間！

作者談 — やさしくするため、濁点を使用しました。
これが、ヒント。

(仙台市 岩田真砂子)

“わいふ”が嫌いな理由は？

神奈川県藤沢市 河野 民枝

二十日過ぎれば時間がとれるので、「わいふ」への投稿はそのときなんて考えていました。ところがその二十日に、また急な原稿を書くはめに。しかも鑑賞文なので資料になる本も読まなければならない。早さが取り得とばかり、二十四日には仕上げて発送したのですが、「わいふ」の今回の特集テーマを十五枚で書くには時間不足。しかも読者となつてまだ半年足らず。でも「わいふ」購読のきっかけなら、編集部へお手紙を出すつもりで……。

国際婦人の十年も終わりが二年前、東京から藤沢へ転居してきました。それまでは仕事と趣味と家庭に忙しく、地域のつきあい、女性問題などにはほとんど無関心。というより、そういう団体を嫌っていたくらい。それが、あるきっかけから地域で活動しているグ

ループをいくつか知り、アウトサイダー的ながら参加。そこでの雑談中に「“わいふ”は嫌い」という声をいくつか聞きました。

何故嫌いなのか、「わいふ」とは何かとばかり図書館で調べ、購読申し込みの手続きをしたのです。自分で確かめないで、他人の言葉だけで判断するのは「わいふ」に失礼というのが購読理由。内容がイヤなのか、編集者の姿勢がダメなのか、それとも次元の低い文章が多いのか。活躍振りが気に入らないなんて理由もあるでしょうし。

まだ半年、答えは出ない。読者の言いたい放題誌なので、文学的というわけにもいかないし、そう勉強になるというわけでもない（チョッとあきてしまいそう）。でも電話での編集者の感じはいいし、井戸端会議の中から、何か生まれてくることだってある。体験からの投稿は机上の空論とはちがう。女同士が情報を交換しあううちに、女性問題解決の一助にだってなっていくだろう。現に「わいふの目」がマスコミにも利用されたりしているし。

“わいふ”の広がり期待しつつ、とにかく参加を続けよう。小四の娘も読んでいたので。

春一番の銀世界

茨城県稲敷郡 潮田 恵子

筑波研究学園都市の一角に、無認可「あおぞら保育園」がある。ここの月一度、「ひと塾」なるものが開かれる。園長であり、ひと塾主宰者である長谷川氏は、会のマンネリ化にしがれをきらし（とは申しまして、そのマンネリがなんとはいえず、とっても素敵な人達のホッとする集まりなのですが）、講演会なるものを目指した。

ふだんこの集まりに関心のない人々にも講演会場の場をきっかけに、参加を呼びかけることもできるのでは。

そして長谷川氏の提案から、講師には、斉藤次郎氏を選ばれた。ちゃくちゃくと、とはとてもいえないが、それでもなんとか三月のある日曜日、幕は切って落とされた。

朝からの雨は、お昼前には激しい雪にかわり出し、見る見る一面の銀世界。

一時三十分の開演をひかえ、正午ごろから準備のため、会場にひと塾の面々が集合したが、公民館のドアは堅く閉ざされて、雪の玄関で立ちんぼう。雪はふるふるお外は寒い。「だれだ——。日ごろのおこないの悪いのは……」

車イスのAさんが、「ぼくよ、ぼくよ」といいたげに、不自由な両手を高くあげ、歯をむき出して笑い出す。

「やっぱナー」思わず彼のひざをうつ。

やっとドアがあいたころ、斉藤次郎氏もご到着。あわててテーブルセッティング、なんかみよくな雰囲気は、いっこうに盛り上がる気配なく、全員なぜか伏し目がち。

もしかして……などと三十分、開演遅らせてみたけれど、結局人は集まらず。テーブルの輪はだんだん小さくちぢまった。

それでもなんとか気を取り直し、先生のお話は始まった。のだけれど。話が見える、どんどん見える。まだまだ見える、まだ見える。

一時間半のお話は、あらかじめ資料代わりに私が読んだ氏の著書の文章そのまま、読んだ私がバカなのか。それはないでしょう斉藤先生。

話の中味を要約すれば、春たけなわの行楽シーズン。ともすれば、国電その他で思いもよらず遠足電車に乗り合わせる。悪ガキたちの集団に、思わず大人はしかめっ面。ところが斉藤先生は、この遠足電車を自身の精神状態のバロメーターに活用し、物事なんでも取りようひとつ。こちらの心に余裕があれば、かわいく感じ、それがなければ腹も立つ。子どもを好きになるか嫌になるかは、その大人の生活のしかた、心の持ちかたに大きく関係があるのではと結ばれた。子育てだってそうですよ母さん。と、おっしゃりたかったかどうかはともかくとして、集った二十数名の自己紹介に引き続き、いよいよ質問コーナーの山場にさしかかる。

二、三のやりとりが終わるころ、中年の男性が立ち上がり、
「そもそも、大の大人がこうして額を寄せ合



って、子どもと生きる意味などと、話し合わなければならないことなのか、それでどう変わるというのだろう」と、暗黙のうちに、してはならなかったような質問が、ポロリとこぼれ出し、主宰者にマイクが向けられた。

「私自身、そのことに対するシラジラしさは、たえず心の奥にあるわけで……」と、またまたマジなご発言。

「主宰者がシラジラしいと思っっているなん

て」と、なんかおもしろくなってきたぞと思いはじめた私の期待はみごとにはずれ、先生は怒って帰り仕度に取りかかり、

「昨日は怒りたりなかったようだ、私は今日来るべきではなかった」(前日長谷川氏は、斉藤次郎氏への、講演会場・時間その他の連絡の不振で、さんざん油をしばられていたのだった)なんていっちゃって。

先生おねがい、現代の子どもだけでなく、昔の子どもにもやさしくしてね。私、灰谷健次郎氏の講演のときの、やはり大人に対する冷たい言葉から、一年後の今も立ち直れないでいるのですから。

お茶くみ考

島根県邑智郡 岡 博之

私の勤務する公共職業安定所では、毎日、朝・昼休み・午後三時の三回、全職員にお茶が出される。お茶を出すのも、湯呑みを片づけるのも、女性職員の役目と決まっています。

私を含めて男性職員はまったく手伝わない。

昨年春、大学を卒業して着任したばかりのころは、先輩の職員がお茶をいれてくれるたびに違和感を感じていた。とりわけ、直属上司である女性の課長が、初めてお茶をいれてくれたときには、職場内での人間関係に対処していくうえで致命的な失策を犯したのではないかと思い、ひやりとした。

しかし、そんな心配は無用だった。この職場では男女ともに、お茶くみは女性がするものだと思いついて、少しも疑問を感じていないのだ。そしてその思い込みは、女性の上司と男性の部下との間にも、そのまま通用するのである。

また、こんな体験もした。島根県西部の四つの職安の職員が一堂に会したレクリエーションの際に、私とほぼ同年齢の、別の職安の女性職員と、食事の席で隣り合わせた。私がテーブルの上に置いてあった土瓶を取り上げて、自分の分をつぐ前に、彼女の湯呑みにお茶を注いだところ、彼女は「すみません、反対になってしまって」と、随分恐縮していた。

こっちは予想外の反応に当惑してしまった。

私は、お茶くみも男女が平等に分担するべきだと頭ではわかっているのだが、職場の中の思い込みに抗して、一人で異を唱えるだけの勇氣は持ち合わせていない。それに、目立つ行動をとって、職場の中で浮き上がってしまうことは、サラリーマンにとって最も怖い(私はもうかなり浮き上がりがけているのだが)。

職場でお茶が出されるたびに、小さな声で「すみません」と言うのが、精一杯なのである。



(え・カステラネンコ)

サークル だより

名古屋に 交流会ができました!!

大都市名古屋に“わいふ”の交流会がないとは驚きですが、遅ればせながらこの四月に、産声をあげました。

読者は市内に三〇名ほどいますが、今回第一回の交流会には六名参加しました。

四月二日菅原宅にお

集まりいただき、これから
の交流会について話しました。

“わいふ”の合評を中心に意見交換、いろいろな情報交換をしています。

投稿で成り立っている雑誌とはいえ、岩田さんの他は読むだけの読者の集まりですが、読んで話すことなら、書くことより先にできると思いませんか。

とにかく本音で話せる場になれば、「出るのが楽しい」交流会になることうけあいです。

“交流会だより”も出しています。

●隔月に一回（原則として“わいふ”発行月の翌月）、第一号は四月一四日発行

●会費 一回毎三〇〇円

●世話人 森、菅原

●第二回交流会のご案内

◆日時 六月一八日（水）AM 二〇時～一二時

◆場所 名古屋市婦人会館（地下鉄名城線東別院下車①番出口から東へ徒歩三分）

◆連絡先 465名古屋市中東区社口二一六〇一一B一〇三

菅原範子

Tel〇五二一七七三七七八三

●ご縁がありましたら

前号でお知らせしたところ、

また新たな縁談のご希望者がありました。身近にご縁を求める方がおいででしたら、編集部和田までお電話下さい。

サンケイソシアルの

ご紹介パーティ

一九七号でお知らせしたサンケイソシアルです。新たな結婚難時代を迎え、狭い交際範囲ではお相手は探せません。お気軽に出合いの場においで下さい。

六月十五日（日）新宿西口会館8F 会費四千円

六月二十二日（日）赤坂飯店 会費五千円

六月二十九日（日）ニューオータニ 会費八千五百円

問合せ申込 〇三ー四二二二二二四

わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せますノ!

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。(無記名のものは受け付けません)

●次のコラムへご投稿をどうぞノ!

- うちのワルガキ 子どもとその周辺の話題について、どんなことでも。
- オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。
- ナウい熱年 今どきの若い者へ、一言いい方のためのシルバースーフト。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。
- ファミリー・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそ

では言えないホンネのはけ口に。

●マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。

●職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

●親のホンネ 親、ことに母親ほどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。

●男性専科 敵に塩を送る心意気、男

のいいたい放題のページです。

●マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろあるんじゃないですか。遠慮ない告発をノ 強いマスコミに弱いミニコミからなぐり込みかけよう。

●マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですわね。あなたの主張や切実な体験を。

●対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。

●女の道楽 あなたがやってるホビーについて。

●親たり聴いたり 映画、演劇、音楽

会展覧会などの感想を。

●生きてます活字人間 読んだものについて。

●遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

●わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

●エッセイストクラブ ずいひつのよさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

●ワンポイント情報 一つのものまたは事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。

●以上いずれも八百字まで オーバーしても内容がよければ掲載いたします。締め切り偶数月二十五日。

×

●持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。二十枚―三十枚程度。長篇なら連載も可。

掲載分には薄謝を贈呈します。締め切り日はとくにもうけません。

●短い投稿はハガキでもけっこうです。気楽に投稿して下さい。

●絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。

●ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせてお送り下さい。

×

●投稿は原則として一応編集部で選択します。できるだけ多くの方の投稿を公平に掲載することをめざしています。

●編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きをえ下さい。

●「わいふ」の特色は、完全な言論の自由を守ることにあります。思想信条を問わず、すべての女たちに自分の考えを発表する場を獲得することが、「わいふ」の望みです。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

●「わいふ」からこれまで数人のライターが巣立っています。文章を書くことをしごとにしたいと思っていらっしゃる方に、「わいふ」は絶好のトレーニングの場となります。

●あなたの周囲に、誌上でご紹介できるようなすばらしい仕事をしている方、特殊な体験をお持ちの方、ユニークな生活をしている方——はありますか？ そういう方をご存知でしたら、ぜひ一報下さい。

●ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお書き下さい。原稿用紙の使い方はルールを守って下さい。

●ヨコ書き原稿は書き直すことになるので必ずタテにお書き下さい。原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

編集だより

●わいふもついに二〇〇号を迎えることになりました。感無量です。

●二〇〇号記念の特集テーマ「わいふと私」には予想をはるかに上回る投稿をいただきました。掲載分はわずか三篇とそのわりに少ないのですが、生涯の決定的な時期にわいふとの出会いが役立った、という特徴のはっきりしたものに絞りました結果です。

●それにしても、現実は何とはげしく動いていることでしょう。わいふにも「こんなひとはいませんか」と絶えず企業からの引きあいがあります。そんなときつくづく思うのは、都心から遠い郊外に住んでいる方の、働くことに対するマイナス条件の大きさです。これからはそうしたことも含めて、人口の都区内への還流がおこるのではないのでしょうか。

●二〇〇号の「ワンポイント情報」は、よびかけ文の書きかたがよくよく悪かったらしく、投稿がすべて、ご自分の家の個人的事情を含めた塾体験でした。「ワンポイント情報」は

いわば商品情報ですから、原則としては即物的な情報がほしいのです。それで今回は「ワンポイント」の掲載は見送り、塾体験は改めて二〇一号の特集テーマとして募集致します。今回原稿をお寄せ下さった方は、そのときまでお待ち下さい。(次号投稿募集参照)

●一九九号九一ページ下段「出産祝い」は「出産内祝い」の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。

●七月一日(火) 十四時より、合評会を飯田橋の婦人情報センターで行います。お申し込みは電話で編集部へ。

●六月十九日の公開講座のお知らせが四一ページにくわしくのっていますのでお忘れなくごらん下さい。

●ではみなさま、楽しいご投稿をお待ちしています。お元気で！

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますの
で、折返しご送金ください。バックナンバ
ーのご注文も同様に。二冊以上まとまりま
すと送料が半額以下になります。

WIFE

(隔月刊) 200 号

1986 年 7 月 1 日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450 円

(年間購読料送料共 3600 円)

発行所・棚グループわいふ

編集・わいふ編集部 162

東京都新宿区市ケ谷加賀町 2-5-23

TEL (03) 260-4771

郵便振替 東京 5-110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

□購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れに
なる方が多いので、誌代が切れてもひき続
き送本しています。お申出がないと、お送
りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。



株式会社 ミニクラ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡型谷町1
☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

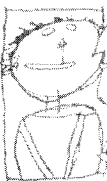
こころ美人になりましょう――

最愛のおしやべり クニニツク

MBSアナウンサー

精神科医

角 淳一・吉田脩二



●ラジオからのメッセージ 人気アナと精神科医が愛をテーマにDJする毎日放送35周年記念番組を単行本化。すてきな人間関係・親子関係はどうしたらもてるか。すてきなお母さんにはどうしたらなるか。読んでたのしい心のクニニツク。 九五〇円 千250

「万全のパスポート」と樋口恵子さんも太鼓判!!

最新・年金 パスポート

川村匡由著 愛読者年金相談カードつき

●あなたの年金大改正はこうだ 六十一年四月に実施された国民・厚生・共済の新制度年金のすべてを新聞記者がわかりやすく解説。モデル・ケースや書き込み欄、さらに相談カードを設けて、いくらもらえるか具体的に知ることができるパスポート。人生八十年時代はこの一冊で安心です。 一二〇〇円 千250

教室は太陽でいっぱい

松本美津枝著 定価1200円 千250

四六判/224ページ 最新刊発売中
子どもたちは、いつ、どういうところで、どのようにして人間として育っていくのか。父母や教師は、それにどのよう手をかしたらよいのか。子どもたちと、ともに泣き、笑いしながら過ごした25年の経験から語る。

元気つ子が育つ家庭料理

堀江泰子・堀江ひろ子著 定価1000円 千250

A5判/160ページ 第三版出来
野菜嫌い、肉嫌い、魚嫌い……子どもの好き嫌いは母親にとって悩みの種。好き嫌いをなくす工夫を中心に、食べることが楽しく、元気な子どもに育てるための料理のアイデアを満載。具合の悪いときの食事も紹介。

思いちがいの食生活

子どもから大人までの健康づくり

鈴木雅子著 定価1000円 千250

B6判/256ページ 第八版発売中
成人病がふえている。この原因の一つは高カロリーと栄養素を満せばよいとする米国型の食生活がある。本書は古来、日本人の知恵と風土がはぐくんできた日本型食生活をみなおし、健康管理のポイントをアドバイス。

家の光協会

〒162 東京都新宿区市谷船河原町11
☎ 03(260)3151 振替/東京5-4724

さりげなくヨーロッパが香る 三井ホーム「モンブラン」



●モンブランは、完全洋風タイプと和室付きタイプ。「基本は洋風でも和室が欲しい」という方のご希望にもお応えしています。7つのバリエーションあり。それぞれ敷地の広さにあわせてお選びいただけます。

●モンブランはツーバイフォー工法。その独特の壁構造から生まれるのは、まず耐震性。一般木造に求められる基準の約2.3倍の強度。そして大幅に冷暖房費を節約する省エネルギー性。●優れた耐火性が高く評価され、木造でありながら公庫は「簡易耐火構造」扱いとなり「木造」「不燃構造」より融資額もアップ。最長30年返済なので月々の返済もラク。また火災保険料も約20%割安になります。●また、「アティック」と呼ばれる小屋裏スペースがつけられるほか、話題の「3階建」も可能です。

三井ホーム八重洲営業所

〒104 東京都中央区八重洲2-1-4
八重洲GMビル3F (電) 03-281-3131